魔法少女リリカルなのはW

闘我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＷ

【Ｎコード】
Ｎ７０５０Ｉ

【作者名】
闘我

【あらすじ】
”ガイアメモリ”最近話題になっているロスロトギアである。
人間の心を代償に力を与えるという危険な代物。
そんなロストロギアを使い戦う執務官魔導士がいた。
名はＷ。

序章１－１　ｗ（前書き）

この作品のWは、オリジナル設定です。
ドーパントやガイアメモリ等の設定も変えてあります。
また、主役もオリキャラです。
ご注意ください。
W見てて調子乗ってやってしまった…。

序章1－1　w

風が吹いている。ヘルメット越しでも分かる。
この風は澱んでいる。
いつもの事だ。奴等を相手にする時はいつもこんな風が吹く。
異常なまでに高まった魔力。
その張りつめた力が風を媒体として俺に伝えてくるのさ。
逃げろってな。でもまぁ逃げる訳がねえ。
その先にある者こそが俺の目的だからだ。

「「浸ってる所悪いけど…もうすぐつくよ」」
「わーってるよ！！レイ。そっちの準備は良いのかよ？」
「いつでも。正宗が準備してくれればね」

頭の中から若い男の声が響いてくる。相棒のレイからの念話だ。相変わらず、真面目といか何と言うか…。

「「聞こえてるよ」」
「「げっ、聞こえてんのかよ！？」」

念話ってのは簡単な魔法だ。コツさえ掴めば子供だって出来る基礎的な魔法だが、通信手段としてはこの上なく、便利な魔法だ。ある程度相手の周波数みたいな物を覚えておかないといけないが、盗聴される可能性もあまりない。
まぁ…今みたいに考えが念話で喋ってしまうなんて言う、うっかりが無ければ便利な魔法だ。

「「はぁ…執務官にもなって、念話もまともに出来ないのかい？良くそんなので試験受かったよ…。今のが重要な念話内容で第3者に

ばれる様な事があったら、大変な事になるよ？」
「うるせえな。うっかりしてただけだ。もうしねえよ。…そろそろ着くな」
目的地の場所が見えてきた。
「到着っと」
俺は、ブレーキをかけるとそのまま「ハードボイルダー」を停車させる。
俺専用にカスタマイズされた黒と緑でカラーリングされた大型バイクだ。
最初の頃は扱いに四苦八苦したものの、今では手足の様に動かせる程まで慣れた。
まぁ…悪まで地上ではの話なんだが。
ハードボイルダーから降りると俺は周囲を見渡すとゆっくりと風を感じ取る。
人の気配は無い。まぁ…当然だ。ここは、本来人間の存在する様な世界ではない。
周囲は見渡す限り、荒野、荒野、荒野、荒野。
当たり前だが俺はこの世界で生活している訳じゃないぞ。ここには仕事できてるんだ。
「グオオオオ…！！！」
近くから何か人でない何かが吠える様な声が周囲へと響く。
風が震えて、メット越しでもビンビンに伝わってくる。
報告通りだ。
今回の目標はどういう訳か機械を好むらしい。
自動車を食ったという報告まである。どんな口してんだよ。全く。

俺は先ほどから、ハードボイルダーのエンジンはつけっぱなしにしてある。
結果として

「かかった！！」

俺は素早くハードボイルダーへ乗り込むとアクセル全開でその場から離れる。
案の定先程までハードボイルダーが合った場所の地面から巨大な顎が飛び出した。
成程…あれだけデカイ顎なら何でも食える訳だ。
トラック食ったっていう情報も間違いじゃないみたいだ。
しかし、あの見た目は、

「Ｔレックスのメモリか…。何で機械食うのかは知らねえけど、仕事は仕事だ。レイ！！」

メットを脱ぐと腰にダブルドライバー、赤い巨大な機械の装いたバックルをセットする。そして俺はＵＳＢメモリの様な形をしたジョーカーメモリを右手で構える。
そして、スイッチを押すと、

「「ジョーカー」」

メモリがスリープ状態から音声を発し、目を覚まし、紋章を輝き始める。
ジョーカーメモリ「切り札」の記憶が込められた、俺の持つガイアメモリの一つだ。
ガイアメモリとは、最近発見されたロストロギアの総称だ。
生体感応端末とも呼ばれている。既に滅びた世界と思われる観測不

能の世界からの遺産と考えられており、その世界で起きた現象や事象を魔法として再現できるプログラムの入ったロストロギアだ。
それを人間の持つリンカーコアへ差し込む事により、使用者の肉体を急劇に変化させ、超人化させる。リンカーコアさえあれば、魔導士でなくとも力を手に入れる事が出来る。他にも魔導士が使えば、その魔力をより高める事が出来るなど使用者はドーピングした者「ドーパント」と呼称される。

「「了解」」

相棒が静かに答えると、俺のダブルドライバーに緑のガイアメモリ「サイクロン」が挿入される。
こいつは「風」の記憶が込められたガイアメモリ、相棒のレイの持つガイアメモリだ。
俺と相棒は二人で一人、いつでどこでもこのダブルドライバーを通して、意識をリンクし、離れていても力を借りる事ができるのさ。

「いくぜ!!変身!!」

サイクロンメモリを押し込み、ジョーカーメモリを空いているスロットへと挿し込む。

「「サイクロン!!ジョーカー!!」」

ダブルドライバーから力強い音声が発せられると、左右の二つのメモリが共鳴し、俺の周りに軽い嵐を起こすと、体全身を包み込み、俺の、いや”俺達の”肉体を変化させる。
左右非対称の黒と緑の体、真赤な赤い目、首に巻かれた風になびく銀のマフラーそして、額にはWの文字を彷彿させる角。
そう、俺達自身も目の前の化け物同様の力を得たのだ。

コードネーム「W」それがこの姿で戦う俺達の名だ。

「何！！てめえもガイアメモリを！？」

「時空管理局執務官、空条正宗（くうじょうまさむね）だ。言わなくても分かるだろ？大人しくガイアメモリを渡して、出頭しろ。少しは罪もかるくなるぜ」

「ふざけるな！！こんな最高の力を手に入れた今管理局なんか目じゃないんだよ！！俺を認めなかった管理局に目にもの見せてやる！！」

「「典型的なドーパントだね。完全に力に飲み込まれてる。メモリを強制的に排出させるしかないよ」」

頭の中に声が響く、レイだ。だが今回のはさっきの念話と違って、自分の頭に直接響く。

今の俺の体にはレイの魂が宿り、また、その意思も俺の体にある為だ。

ダブルドライバーは使用者二人の魂と肉体を一つとし、本来一人一つのガイアメモリしか扱えない筈の規則を破り、二本同時に扱う事が出来る様にするデバイスだ。

そして、同時に目の前のドーパントの様に精神に異常を起こさないようにする役目も果たしている。

「ったく、仕方ねえ。なら力づくでいかせてもらう」

「舐めるな！！餓鬼が！！この力があれば俺だって魔導士に成れるんだ！！」

「成程、お前魔導士に成れなかった人間か。それでガイアメモリに手を出したと」

「ああ、そうさ！！あの男が、金さえ払えば、誰でも魔導士に成れるだけの力を与えてくれるのさ！！」

「売り手（バイヤー）か。相変わらずどこにでも湧いてきやがる。」

売り手（バイヤー）、ガイアメモリを商品として扱い、目の前の奴みたいな奴に次々と高額で売りつける人間の事だ。
不思議な事に今のところ誰1人として捕まっておらず、俺も売り手（バイヤー）の調査、逮捕は担当している仕事の1つだ。
おそらくは、売り手（バイヤー）自身もドーパントというのが俺の現在の考えだ。

「聞くだけ無駄と思うが、お前にガイアメモリを売りつけた売り手（バイヤー）に関する情報はあるか？」
「ある訳ねえだろ？あったとしてもお前みたいな奴に教えるかよ！！」
「「無駄だ正宗」」
「分かってる。一応聞いただけだ。まぁ…事実はともかく、一度ぶちのめす事に変わりはねえ」
俺達はゆっくりと左の人差し指でTレックスドーパントを指すといつもの決め台詞を口にする。
「「さぁ、お前の罪を数えろ！！」」

序章１－１　ｗ（後書き）

予想以上に長くなってしまい、序章が２部構成になりそうです…。
本当はこの１話で序章を終わらせるつもりだったんですがね。
しかし、殆どのフォームの技がまだ出てないのに、どうしよう俺…。

序章１－２　ｗ（前書き）

随分空いてしまった。
読んでくださる方がいればどうぞです。

序章1－2　w

俺達はゆっくりと右の人差し指でTレックスドーパントを指すといつもの決め台詞を口にする。

「「さぁ、お前の罪を数えろ！！」」

俺達の言葉に激怒する様にでかい顎をガチガチと何度も開け閉めするTレックスドーパント。

「ふざけるな！！俺を認めなかった管理局の方が罪深い！！」

好き勝手言ってやがる。相変わらずドーパントになった人間は自身が正しいと信じ込む人間が多い。
やっぱ、精神に異常をきたす所まで力に飲まれた人間は力づくでガイアメモリを排出させるしかない。
俺達はハードボイルダーのアクセルを噴かせる。速度が急激に上がりながら目の前のドーパントへと激突させる。
後方へと吹き飛ばすつもりだった。
だが、俺の思惑とは別に目の前のドーパントはまるで地に根が張った木の様にビクともせず、その巨大な顎でハードボイルダーを押さえ込んだ。

「クソっ…！！」
「「相変わらず常識の通じない相手だね。ドーパントって」」
「呑気に感想漏らしてる場合か！！レイ」

アクセルを噴かせる。しかし、その勢いも完全に殺されている。
不味いな。このままじゃ食われる。

「てめえのバイクも食ってやるよ！！」
ビシッと生えそろった顎をガジガジとハードボイルダーのボディに食いこませようとするＴレックスドーパント。
止めろっての！！この間ピカピカに磨いたばっかだってのに！！
「「おい！！レイ！！メモリチェンジだ！！」
「「了解。ヒートで良いね？」」
「ああ、熱いのお見舞いしてやる！！」
俺の右手が一人でにダブルドライバーの右スロットに収められていたサイクロンメモリを取りだすと別の赤いメモリを取りだす。
「「ヒート！！」」
同じ様にスイッチを押すと音声を発しながら紋章が浮かび上がる。レイが持つメモリの内の１つ。「熱き記憶」を込められたガイアメモリだ。
それを右のスロットへ装填する。
「「ヒート！！ジョーカー！！」」
ベルトから音声を発しながら、右半身の色が緑から赤へと変わる。
「何！！色が変わった！！」
Ｔレックスドーパントが驚く。まぁ無理もない。ガイアメモリを複数所持してるのなんて数いる魔導士の中でも俺達位だろう。
そして、その驚きこそが一瞬の好きを生んだ。

食い込ませていた歯が一瞬緩んだ。

「オラッ！！」

色の変わった右腕でドーパントの顔面を強打する。
その拳からは強烈な熱が発せられている。炎を纏った拳。
そう。ヒートメモリの力は高熱と闘争本能を高める攻撃性に特化したメモリだ。ハードボイルダーの突撃には耐えたらしいが、この拳には耐えられなかったらしい。

「ガッ…！！」

そのまま閉じていた口が大口を開けて少しだけ後方へと吹き飛ばす。
その隙にハードボイルダーを右へ傾けるとそのまま一時撤退する。
作戦を練る為だ。
とはいえ、相手も馬鹿じゃないらしい。

「逃がすか！！」

そう言いながら奴のいた地面を中心として巨大な魔法陣が展開する。
正三角形に剣十字の紋章。ベルカ式か？
巨大な魔力の発生と共にそのまま何か巨大な物が浮かび上がった。
後方を振りむきながらそれを見た俺は、

「マジかよ！？」
「「道理で顔しかない訳だよ…。」」

そう。地面から出てきたのは巨大な機械で出来た「体」だ。Tレックスの体。
道理で、ハードボイルダーの突撃でもビクともしない訳だ。

あの巨大な肉体が木の根だった訳だ。

「「恐らく、報告にあった機械を食べるというのは、この体を構成する為のようだね」」

「だとしたら、正直ヒートジョーカーじゃ無理があるか」

「「そうだね。恐らく本体はあの顔だけどそれでもあれだけの体を防御に使わないとは考えられない。あの体をくぐり抜けて一撃でとどめをさす必要がある」」

「なら、メタルだ！！」

俺は左のスロットからジョーカーメモリを取りだすとそのまま、銀色のメモリを取りだしスイッチを押す。

「「メタル！！」」

素早く、それを右スロットへ装填すぐ様ドライバーから音声が発生させられながらその姿を変える。

「「ヒート！！メタル！！」」

左半身が黒から銀へと変わる。

「闘士」の記憶を込められたメモリだ。このめもりの特徴は腕力と防御力の底上げを可能とする。

ヒートとメタルの力を合わせれば強烈な一撃が叩きこめるはずだ！！

「また、色を変えるのかよ！！無駄だ！！この体の前では何もかも無駄だ！！」

「そいつはどうだろうな？ハッ！！」

俺は左後ろ半身にセットされた棒状の武器「メタルシャフト」を取りだす。
折りたたまれていたそれを伸ばすと、挿入口「マキシマムスロット」にドライバーからメタルメモリを取りだし装填する。

「「メタル！！マキシマムドライブ！！」」

メタルシャフトから音声が発せられるとシャフトの両端から強烈な炎を吹き出し始める。

「「行くぜ（よ）！！」」

意識を完全にリンクさせ、そのままハードボイルダーを反転させ、ドーパントへと進路を変える。

「そんな棒きれで何が出来る！！死ねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
「ハァァァァァァ…！！！」

左腕だけでハードボイルダーのバランスを保ちつつ、右腕でメタルシャフトを構えながら突撃する。
敵はその場で足に制止をかけ、その巨体を砂煙を上げながら、止めた足を軸としてそのまま機械の尻尾で俺達を薙ぎ払おうとする。

「くっ！！」

俺は急いで左腕だけで前輪を浮かべるとそのまま、尻尾の上を登る様に進み始める。
それに気づいた敵は尻尾を振り払い俺達を払い落そうとするが、

「遅いんだよ！！」

そのまま俺はハードボイルダーを空中へと躍らせる。
これだけの巨大な機械な尻尾。正直ジャンプ台として利用するには格好だった。
避けれた。
そこで油断する程、俺達も馬鹿じゃない。

「「来るよ！！」」
「ガァァアアアアアア！！」

空中に逃げた俺達を待ちうけていたのは奴の巨大な顎だった。
そこにある瞳と一瞬俺達の瞳が交差する。
どう考えても、俺達に勝てる。
そう考えてるのが目に見えている。

「やられるかよ！！レイ頼むぜ！！」
「「了解！！」」」

俺が何も言わなくても相棒は次の瞬間には体を浮かせるとそのままハードボイルダーをその場で敵の下顎へ蹴り飛ばすと敵の真上へと躍り出る。

「ガッ…！！」

うめき声を上げながらそのまま、巨大な口がビシッと閉じられる。
止めだ！！
空中で俺達は魔方陣を展開する。
銀のベルカ式と赤のミッド式の魔法陣が重なる様に展開する。
全身の筋肉が膨張する。
そのまま、空中でメタルシャフトを構えると

「「メタルブランディング！！」」

一撃必殺の魔法を発動させる。強烈な勢いで噴出される炎が勢いを増し、そのままＴレックスドーパントの頭部にメタルシャフトを叩きこんだ。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

叫び声を上げながらそのままその巨体を砂煙を上げながら沈めていく。

機械の体も次々と、唯のスクラップへと変わっていく。

恐らく、メモリが強制的に排出されたんだろう。

「「正宗」」

「わーってる」

俺達はゆっくりと地面へ着地すると頭部が落ちた場所へと向かう。

そこにいたのは、生身で倒れている２０代前半の男だ。

その近くに壊れたガイアメモリが煙を上げている。

それを拾い上げる。

「任務完了（ミッションコンプリート）だ」

俺はダブルドライバーを外す。すると俺の体に宿っているレイの意識は俺の中から消えていく。それと同時に俺の体を纏っていたＷの姿から元の執務官の黒い制服へと変わった。

目の前にモニターが広がる。

通信だ。

そこに映っているのは長い特徴的な白い髪の人物。

正直黙っていれば、美「少女」だ。
俺と同じデザインの服装をしている。
見慣れた姿だ。俺の相棒「空条レイ」
名前から分かるとおり、俺の兄弟であり相棒だ。

「言っておくけど僕は男だよ」
「んな事分かってるよ。これから、犯人(こいつ)をを連れてミッドチルダに戻るぞ」
「了解。じゃあ次の任務内容を伝えるよ」
「…オイ。少しは休暇が欲しいぞ」

これで連続何回戦ってんだ俺…。

「文句は僕に言わないでほしい。それに今回はちょっと特殊な任務だよ」
「何だよ？」
「機動六課からの協力要請だよ」
「機動六課？確か、あのエース級が集まってる化け物部隊だろ？俺達の力なんかいらんだろ？」

金色の夜叉と白い悪魔の顔が頭をよぎる。
…勘弁してくれ。

「どうも、ガイアメモリの事で僕達の力を借りたいらしいよ？」
「ガイアメモリ？そういや、あいつらロストロギア関連も担当してんのか」
「そうみたいだ。まぁ簡単な任務だよ。これが終わったら少し休暇を取ろう。さすがにオーバーワークだしね」
「しゃあねえな」

そう言うと目の前のモニターを閉じると後ろにごろごろ転がっているガラクタの中に交じって転がってるハードボイルダーを見つける。

「…これの修理。経費で落ちるよな」

新たな任務機動六課への協力。

これが俺の、いや俺達のとんでもない物語の始まりだったんだ。

魔法少女リリカルなのはW始まるぜ。

序章１－２　ｗ（後書き）

次回にでもＷのステータスを書こうかと思ってます。
感想とかあればくれると嬉しいです

1話　スパイ任務そして再会（前書き）

近い内に上げれた…。
フェイトとはやてもやっと登場…。

1話　スパイ任務そして再会

あれから、第１６２観測指定世界から転送ポートでミッドチルダへ戻ると俺は、ドーパントだった男を時空管理局本局へ引き渡すと、レイと合流した後そのまま地上本部へと呼びだされた。
久しぶりに戻ってきた古巣だ。俺達は執務官になるまで、地上で捜査官をしていた。
周りの視線の中には鋭いものも混じっている。

「やれやれ、久し振りに戻ってきたらこれか…。」
「仕方ねえだろ。レイ。あいつ達にしてみれば裏切り者みたいなもんだからな俺達は」

そう。俺達は地上から海に所属を変えた。いわゆる裏切り者らしい…。
俺達自身そういうつもりはないんだが、いかんせん地上の奴等はそういう事にこだわる人間が他の所に比べて多い気がする。
まぁ…組織なんてものはトップの思想や人格がもろに影響されるもんだ。
そして、ここのトップの人間はそういう人間というのも容易に想像がつくだろ？

「レジアス中将か…。会うのは久しぶりだね」
「まぁな。司令直々にお呼出しとはなんだろうな？」

まぁ…十中八九機動６課への協力の事だろうな。
あの人にしてみれば、あそこの部隊のトップは気に入らないタイプの人間だ。
「八神はやて」

過去に何があったかは既に調査済みだが、あの人にしてみればこの人は犯罪者という事なんだろう。
あの人に一度でも会えばそんな事まで理解しちまう。相変わらず、御堅い人だぜ。
まぁ…その性格のおかげで”地上の正義”は守られているのも事実だからタチが悪いんだが。
そんな事を考えながら長い廊下を歩いていたらいつの間にか司令室の前に俺達は立っていた。
コンコン…。
俺は軽く扉にノックをする。
「どうぞ」
「「失礼します」」

中から聞こえる若い女性の声へ応えると俺達はそのままがプシュと空気の抜ける様な馴染みの音と共に開かれた自動扉をくぐり部屋の中へと入る。
大きなデスクに向かい座っている巨漢な男。
向かい合ってるだけでも威厳というかそういうオーラがバリバリに滲み出ている。

「どうぞ、こちらへ。空条正宗執務官。レイ補佐官」

デスクの前に向かい会う様に置かれているこれまた大きな二つのソファへとレジアス中将の隣にいた秘書の様な女性に案内される。
これまた美人だな。青髪のロングヘアーが似合っている。

「どうかしましたか？」
「い、いえ。なんでもありません！！」

俺としたことが女性の顔を凝視しちまうなんて、男としてやっち

ゃいけない事だってのに。

『相変わらず美人を前にすると凝視する癖は直した方が良いと思うよ？』

『うるせえ。分かってるよ』

念話で毎度の事だが注意される…。直そうと思ってもしてる自覚がなにんだから直し様がないんだがなぁ。

「コーヒーで宜しいですか？」

「あっ、ハイ。ブラックで」

「僕はミルクと砂糖を入れていただけますか？」

「分かりました」

そう言うと近くにあったカップへとコーヒーメーカーからコーヒーが注がれ俺達の前に出される。

「どうぞ」

「どうも」

「ありがとうございます」

ここまで、仕事続きで喉がカラカラだった。ホットのコーヒーでも喉の潤いは満たされる。

…旨い。良い豆使ってるなこれ。

レイも同様らしく相変わらず甘ったるそうなコーヒーを満足そうに口にしている。

「さて、喉の潤いもとれたか？空条執務官に補佐官」

「あっ、はい。ありがとうございます」

「君は席を外してくれるか？」

レジアス中将にそう言われると美人秘書さんは「失礼します」と言いながら部屋を出た。
…誰にも聞かれたくない話って事か。

「さて、お前達を呼んだ理由は分かっているか？」

まるで俺達を試すかの様に椅子に座りながら机に肘をつき顔の目の前に手を組む中将。
相変わらず人を見下す様な態度だ。人を引き付けるカリスマの一つなのかもしれないが、どうも俺は好きになれないぜ。

「機動六課への協力の件でしょうか？」

俺はそう答える。間違いないだろう。

「ふん。まぁ、伊達に海へ異動した訳はないか。それなりの実力はあるという事だな」
「お褒めにあずかり光栄です」

俺の答えに「ふん」と再び声を上げる中将。そんな嫌味聞きなれてんだよ。俺達は。
レイも涼しい顔してコーヒー飲んでやがる。
…こいつはこいつで慣れすぎな気がするが。

「なら、話は早い。貴様等に頼みたい事がある」
「なんでしょうか？」
「英雄気取りの青二才共が後見人となって立ち上げた組織だという事は知っているな？」
「一応与えられている情報には全て目を通していますから」

正直ここに来るまで全て流し読みしただけだが、大方の情報は把握済みだ。
それに、俺に間違いがあれば、レイがサポートしてくれる筈だ。こいつは俺何かより頭脳労働を得意としてるしな。
しかし、クロノ提督にリンディ総務統括官、極めつけは聖王教会の騎士のカリム・グラシアさんを青二才…真中は少し青二才というのは無理ないか？
まぁ、それにしたって皆会った事はあるが、皆良い人だった。人柄だけじゃない、皆きちんと仕事に対して誇りを持ち、それを実行出来るだけの能力(ちから)も持っている。
尊敬こそすれ目の前の人の考えには同意しかねる。

「それで俺達に何をしろと？少なくとも今の俺達はあなたの嫌う海の人間ですが」
「ふん。相変わらず表裏を隠そうともしない人間だな。お前の様な人間に良く執務官が務まるものだ」
「…っ！！！」

こいつ…！！！

「お話の続きを中将。こちらも次の仕事があるのであまり時間がありませんので手短に話して下さるとありがたいのですが」
今まで黙ってコーヒーを飲んでいたレイがいきなり口を開いた。
…俺がキレかかっているのを抑える為だろう。

『すまん』
『いつものことだよ』

ほんとこいつには頭が上がらないぜ。
こいつが補佐で良かった。

「…ふん。まぁ良い。中規模次元侵食未遂事件の首謀者が部隊長というだけでも許しがたい部隊だ。そこでお前達に頼みたいのは査察を頼みたい」

「…失礼ですが今の自分は海の人間です。自分達に首を絞める様な真似を出来ると思いますか？」

何考えてんだ！？この人。査察を俺達に頼むっておかしいだろ？普通は自分の部下の信用の出来る人間にするもんだ。
それをよりによって何で俺達に。

「お前はフェイト・T・ハラオウン執務官。高町なのは一等空尉と付き合いがあるそうだな？」

っ！！そういう事か！？

「どうせ、私が査察官を出しても、何か不祥事があっても隠蔽するに違いない」

「…そこで自分達ですか？」

まさか自分達が協力要請した人間が査察官など思いもしないだろう。
そういう事だ。つまり、俺達にスパイをしろと言う事だ。

「話が早いな」

「お断りします。どう考えても自分達にメリットはありません」

自分の身を破綻しかねない行為に自ら進んでする馬鹿はいないだ

ろ。
それ以前に彼女達は俺達の大切な友人だ。そんな彼女達が俺達の力を必要としてくれているのにそれを逆手にスパイ行為をしろというのだ。
出来る訳がねえ！！

「話は最後まで聞く物だ。お前達の追う事件の情報を私は自身の伝手で手に入れた」
「「！！？」」

なん…だと？
あの事件の情報を？
この目の前の男が？

「どういう事ですか…！！」
「それと引き換えだ。おまえ達にも得るものがあるだろう？」
「証拠は！？」

口でならどうとでも言える。執務官になってから追い続けているんだ。
その俺達の情報を上回るなんて事！！

「ふん」

そう言うとデスクの内ロックの施された引出を手に取ると、目の前に現れたモニターに向かって何か文字の列を撃ちこみ始める。
恐らくパスワードだろう。
ＯＫの文字と共にモニターを閉じると引き出しから大量の紙の資料が引き出される。
この時代。大抵の資料はデータ化されているが、重要な機密文書な

どは紙で保存される事も少なくない。
いつでも手元におけるというのが利点なのだろうが、データ紛失という事も考えられなくない人間の不安から来てる事が一番大きいのだろう。
そんな紙の資料の中から、一枚の資料を俺達に投げ捨てた。

「っこれは！？」
「驚いたね…」

そこには、ドーパント発見の報告と、現場での画像が貼られていた。
場所は恐らく、異世界。これだけ森の生い茂っている所はミッドチルダにはない。
そしてなによりそこに映っているドーパント！！
忘れもしない！！
下半身が蛇の様な上半身が女の姿の赤いドーパント！！
俺達の…！！俺達の…敵！！

「これはどこで？」
「言えん。独自の伝手と言っただろう？」
「ふざけないでください！！あなたのしている事は犯罪だ！！情報隠蔽に不正取引！！どれも地上本部の司令官がする事ではない！！」
「ふん…。どうとでも言え。だが、お前が頷かねば他の情報は渡せない。私を告発しようが、その程度の事で私の信頼をお前程度が覆せるとでも？」

糞が！！この人間！！ここまで腐ってるのか！？
こんな奴の下で働いていたなんて自分が嫌になるぜ！！
だが…悔しいが事実だ。

俺は執務官になって数々のドーパント絡みの事件を解決した。その上で数々の人から信頼を得た。
だが、目の前の人間は歴戦の勇者だ。これまで築いてきた信頼の格が違う…。
どう考えても俺が不利だ。

「協力をすればこれ以上の情報を確実に渡して頂けるんですか？」
「レイ！？」

こいつは何を言っているんだ！？

「ほう？補佐官の方が話は分かるか？やはりお前達は逆の方が良いのではないか？」
「どうなんですか？」
「約束しよう。必ず渡すと」
「分かりました」
「おい！！レイ！！お前！！」
「五月蠅い執務官だ。プライベートチャンネルの番号を補佐官の方へ送っておく。今後はそれで情報を渡せ。以上だ」

何が以上だ！！ふざけんな！！このくそ野郎！！

「いくよ正宗」

そう言うと俺の腕を掴むとそのまま俺を引っ張るレイ。
何考えてんだ！！こいつ！！

『話はここを出てからだよ』
『…くそ！！』

何か考えがあるのかもしれない。
信じるしかないか…ここは。

「失礼します」
「…失礼します」

形だけの敬礼を俺はして、その場を後にする。

「ふん」

相変わらず鼻で笑う声が聞こえると司令室の扉は閉じられた。
納得いかね…。

：＊＊＊＊＊＊

『おい！！いい加減いいだろ』

もと来た道を逆行し、休憩所まで来て念話で会話をする。
さすがに本部で普通に会話はしない。
こいつが何か企んでいるのは、確かなのだ。
誰かに聞かれたら困る。

『考え？』
『あんだろ？お前』
『そんな物はない』
「……はぁ！！！！」

相棒の言葉に念話ではなく、実際に口を開いて声を上げてしまう。
その俺の声に周りの人間が皆俺達へと視線を向けてくる…。

「…すいません。ほんとすいません」
軽く頭を下げると皆がいぶかしげながらその視線を元に戻し、談笑したり、仕事へと戻っていく。
『何をしているんだ？正宗』
『仕方ねえだろ！！お前が考えないなんて言うから！！』
何も考えてないってどういう事だ！！
『逆に聞くが僕たちの知る彼女達の部隊がそんなレジアス中将の欲しがる様な事をすると思うのかい？』
『それは…ないと思うが』
『そういう事さ。僕たちはありのまま報告すればいい。そうすれば僕たちの欲しい情報が手に入る。これ以上ない位好条件だ』
『だが、奴がそれで納得するか？』
『恐らく、中将とて僕たちを信じてはいないだろう。その内独自に査察官を派遣するのが目に見えてる』
『それじゃあ俺達に頼んだのはなんだってんだ？』
二度手間じゃねえか。それに外部のしかも海の人間に情報を渡すなんておかしいだろ。
自分が不利になるだけだ。
『囮だろうね。僕達が恐らく彼女達に査察にきたなんて少し変な動きをすればバレルのは目にみえている。そうすれば、彼女達はこれ以上査察官が来るなんて思わないだろう。
もし、上手くいかなくても情報さえ渡せば、僕たちの口を封じられると思っているんだろう。彼にとってこの事件は既に過去の事件。あれ以来このドーパントが何かしろの事件を犯しているという情報

はない。いかにレジアス中将とはいえ完全にドーパント絡みの事件を隠ぺいするのは不可能だ。渡された資料も発見報告だけみたいだしね』

『……』

『正宗？』

『悪い…。お前を一瞬疑っちまった』

その言葉に念話が途切れる。

それはそうだ。情けねえ。俺は自分が友人を裏切るという行為を前にそんな事出来るかと考えを放棄していた。

裏切らず、情報を手に入れる方法を

そして、その先を考えていた相棒を疑っていたのだ。

こいつは俺を信じてくれていたに違いない！！

そう思うと俺はこいつに申し訳なくなってくる。兄弟なのに！！相棒なのに！！

「相変わらず熱いね…正宗」

「レイ？」

「君は熱い。心がだ。人としてそれはとても大事な物だと僕は思うよ。だからこそ君は重要な場面で大きなミスを犯す可能性が高い」

父さんと母さんが良く俺に言っていた事だ。

そしてその後に続くのは

「僕はレイ。冷（レイ）。冷たいと書く。クール。そういう意味らしい。確かに僕は物心ついた時から何となく冷めているのさ。父さん曰く鈍いだけらしいけどね。でもそのおかげか僕は常に物事を冷静に考えられる」

そう続いていた。そして

「熱い心（ハート）とクールな思考。これら二つを重ね合わせる。そうすれば
「「二人で一人。最高のパートナーになる」」
俺達の言葉が重なる。
すると、レイは口元に微笑を浮かべる。
俺も同様に口元に笑みが浮かんでいるだろう。

「そう言う事さ。君が僕を疑ってしまう程、義理人情に熱い心の持ち主だからこそ、僕も君と組んでいるんだ」
「…でも謝る。お前の事を疑っちまうのはなんか違う気がする」
「ふむ。まぁ…僕の思考が読める程政宗がクールになれるなんて事ないと思うけど？」
「…言ってろ」

そう言うと俺達は再び口元に笑みを浮かべながら俺の左拳とレイの右拳をぶつけ合う。
「二人で一人」
その言葉を残した両親がしていたその思いを確かめ合う行為だ。
これは互いに気まずい雰囲気の時にする行為だ。
仲直りの行為だ。両親も夫婦喧嘩の時は良くしていた。

「さて、とりあえず機動六課へ行こうか」
「だな。ってハードボイルダーはどうした？お前」
そうだよ。持って帰って修理するって言ってその直後にこっちに来る様言われたからその後どうなったか俺知らないんだよ。
「既にリボルキャリーと共に機動六課へと送ったよ。リボルキャリーのＣＰＵは完全さ。ちゃんと今頃、宿舎についてる筈」

「おいおい、あんなバカでかいマシンが急に走り込んできたら困るだろうが六課の人間も！！」
「ちゃんと連絡はしてある。大丈夫だ」

いや、そういう問題じゃねえだろ？
リボルキャリーっていうのは、レイが自身で設計開発したハードボイルダーの換装ユニットを搭載した車体後部のリボルバー式のハンガーが特徴的な高速移送装甲車だ。
当然ながら、ハードボイルダーの母艦としても機能する。
…大きさが想像できるだろ？おまけにレイ独特のデザインの所為で公道走る度に、子供に指差される様な装甲車だ。六課の人間が驚かない訳がない。

「…あれ？正宗？」

…この声は。
しばらく通信でしか声を聞いてなかったので間違え様のない。
先程までこいつ為に俺は悩んでいたのだから

「…フェイト？」
「やっぱり！！正宗だ！！久しぶりだね！！」

声かけながら走り寄ってくる。
いつもの彼女にしては随分と声が大きい。
良いことでもあったか？
フェイト・T・ハラオウン
金色の髪と赤い瞳が特徴的な女性だ。いつもとは違う茶色の制服を着ている。
六課の制服だろうか。

これから俺達が行く部隊の人間で俺達とは友人でもある。

「久しぶりだな。この所通信でしか会話してなかったからこうして顔を合わせるのは久しぶりだ。」

「うん。そうだね。半年ぶりかな？互いに忙しかったし。レイも久しぶり」

「ああ。お久しぶり。しかし、君は本当に分かり易いね」

「えっ？」

「声のテンションが正宗と僕の時では差がある。それに少し頬が正宗を見つめる顔は赤かった」

「っ！！！！」

そうレイが言うとフェイトの顔がまるで茹でダコみたいに赤くなった！！

「おい！！大丈夫か！！フェイト！！急に顔が赤くなったぞ！！体調でも悪いのか？」

「だ、大丈夫！！」

そういうと笑いながら必死に両手を俺に向けてブンブン振っている。いや…その行為こそ心配だが

「ふふ…本当に面白い。この関係がいつ進むのか大変興味深い」

レイはレイで良く分からない事を言っている。

なんの事だ？

「フェイトちゃん。知りあいか？」

「ん？」

俺達の会話に割って入る様に休憩所の入口に入ってきたショートカットの女の子…この子は。

「あっ、ごめんね。はやて。飲み物買いに来てたのに」

どうやら、この休憩所に飲み物を買いに来たらしい。
ここには、豊富な自販機があるからなぁ。
しかし、はやて。やはり

「六課の部隊長。八神はやてか」

レイが静かにそう言った。

「そういう貴方達は、今度六課に来てくれるWですよね？」
「俺達を知ってるんですか？」
「もちろんや。フェイトちゃんから聞いとるよ？同期の中でもガイアメモリ関連の事件では右に出る者はおらんて」
「いや、それは言いすぎな気がしますけど。ふむ」

俺は彼女の全身を眺める。
フェイト程体つきは女性らしくないが、可愛らしい体つきだ。
フェイトを美人というなら八神部隊長は可愛いだな。

「っ正宗…！！」
「ぎゃあああ！！！」

急にフェイトの声が聞こえたと思ったら気がつけば彼女の指が俺の視界一杯に広がり直後に激痛が走った！！！
目つぶしだ！！いでええええ！！！反則だろこれは！！

「フェイトちゃん。やり過ぎや無い？」
「やらしい視線で私の親友を見るのは許しません！！」
「じゃあ…フェイトなら良いのかい？」
「えっ…！？」

レイがクスクス笑いながら、そう言うのが聞こえる。
クソ！！目がまだ回復しない！！

「それは、そのしっかりした段階をふんでからというか、まだ私達はそんな関係じゃないし…」
「…はぁ。これは驚いたなぁ。ここまでとは。なのはちゃんにも聞いとったけどあのフェイトちゃんがここまで」
「やはり面白いよ」
「…イテテ、何がだよ？一体」

やっと視界が回復した。
何かフェイトが赤くなりながらブツブツ呟いている。
なんだ？本当に大丈夫か？

「うーん。はやてちゃん…？」

…？なんだ？声が聞こえる。
休憩所の中は俺達以外にも人はいるがここまで可愛らしい声の持ち主はいない。
職業柄そういうのには敏感になってしまっている俺だ。間違いない。

「あっ、ごめんな。リィン。起こしてもうたか？」

そう言うと、彼女のかけていたバックが一人でに開くとえらく小さい人形みたいな白い髪の女の子が出てきた。

…小さいな。

「はい～。？どなたですかこの人達」

「紹介するわ。資料で見たやろ？今度六課（うちら）に協力してくれる執務官の

「空条正宗だ」

「同じくレイ。よろしく」

「よろしくな」

八神部隊長の紹介を遮って名乗りを上げる。さすがに、自分の名前位自分で言いたい。

それが可愛い女の子なら尚の事だ。

「はい！！はじめまして機動六課部隊長補佐及びロングアーチスタッフリィンフォース？空曹長（ツヴァイ）です！！」

ビシッと小さい体で敬礼するリィンフォース。

…何だろこう癒されるよな。この子見てると。

「正宗…！！！」

いつの間にか復活したフェイトが再び俺の目を潰しに来た！！

それを頭を下げる事で回避する。

「危ねえな！！フェイト！！失明したらどうすんだ！！」

「いやらしい目線をする目なんて失明しちゃえば良い！！」

「いやらしいって…ひでえ」

「ふん…知らない！！」

何怒ってんだ？全く。女は良いけど時々フェイトの怒る理由が良

く分からねえ。
「面白い人ですねぇ～はやてちゃん」
「そうやな」
クソッ。フェイトの所為で笑われてるし。
「しかし、興味深い。融合型のデバイスですよね？君は」
「はい！！そうですよ！！
「噂には聞いていたけど実際に見るのは初めてだ。今度じっくり話を聞かせてもらってもいいかな？」
「はい！！」
なんか…レイとリィンフォースちゃんは仲良くなってるし…。
…悔しくなんかないぞ。
「それはともかく、驚いたわ。地上本部に来てるとは思わんかった」
「ああ…少し。後で話します」
「？分かった。とりあえずそろそろ帰ろか。フェイトちゃん」
「あっ、そうだね。正宗達はどうする？」
「ああ、用事は済んでる。商売道具も六課の方に送ったしな。後は俺達が六課に出向するだけだ」
「そうだね。良ければ一緒に帰らせてもらっても宜しいですか？」
「もちろんや。六課自慢のヘリで一緒に帰ろか」
「ですう～」
ヘリで来てんのか！？そいつは凄い！！
というか…案の定レイが食いついて、八神部隊長に話しかけてるよ。

ちょっと引いてるなあれは…。機械オタな所があるからな相棒は。
そんな中皆して、一緒に休憩所から出る。
フェイトと俺が最後に出る時フェイトが急に立ち止まった。

「正宗」
「？どうしたフェイト。」

そして振り向くとそこには飛びきりの笑顔が浮かんでいた

「これからよろしくね！！」
「ああ！！」

レジアス中将からの査察任務。受けた以上はするさ。だが、彼女達はあんたの思う様な存在じゃねえ！！
逆にそれを教えてやるさ！！
こんな飛びきりの笑顔を浮かべる娘だって事もさ。

1話　スパイ任務そして再会（後書き）

一応キャラ設定です。

空条正宗
出身：不明（幼少の頃ミッドチルダにて空条光に保護される）
所属：時空管理局本局執務官（機動６課に出向）
階級：現場では１等陸尉
役職：執務官
コールサイン：ＷＬ（ダブルレフト）
魔法術式：古代ベルカ式　Ａ＋ランク→Ｗ時：古代ベルカ式　Ｓ＋ランク
所持資格：執務官：査察官：捜査官：大型自動二輪免許：普通自動車免許：大型特殊免許：特殊飛行機免許：水上オートバイ免許

今作の主役。１９歳で身長１７５ｃｍ。
黒い髪と赤い瞳が特徴的な男。
もっぱら近距離線を得意とするがベルカ式では珍しく砲撃系の魔法も器用にこなせる魔導士。レイが魔導士として登録しているので、二人で一人で戦うのに自分だけ騎士というのも…という事から魔導士として登録している。射撃魔法は使えるが、悪までベルカ式である珍しい人間である。
Ａ＋と執務官にしては少々ランクは低いがＷ時はＳ＋にまで跳ね上がる。
得意の肉体強化魔法と射撃魔法を血の滲む様な努力で特訓を重ね、執務官試験には一人で受かっている。（２回落ちた）
その際、フェイトとは同じ試験会場におり、二度目の試験の時に隣の席になった時から友人として付き合いが始まり今でもその関係は

続いている。
尚三回目の試験にむけての勉強の時フェイトの何気ない一言で正宗一人で使用可能な新しい魔法（あれを魔法と呼んで良いのか分からないが）を完成させた。
それ以来フェイトには頭が正宗自身は上がらない。
なのはとはフェイトとの紹介で、知りあい、軽く教導してもらった過去がある。
正直、正宗じゃ思いだしたくない過去らしい。（レイは興味深いデータが取れたといい喜んでいたが…肉体にダメージが残るのは正宗だけなので納得いかねー！！との事）
今回の機動六課への協力もなのはとフェイトがいなければ断っていた可能性が高い。

ガイアメモリ関連の事件を専門に仕事をしている。
そこには過去にWとなった発端の事件が関連しているらしいが…。

使用デバイスは変身ベルトWドライバーとガイアメモリ［ジョーカーメモリ］［メタルメモリ］［トリガーメモリ］
これらのメモリはボディメモリと呼ばれている。
カードリッジシステムは無いが、それぞれのフォームの専用のアームドデバイスに「マキシマムスロット」が装備されており、そこにガイアメモリを装填する事で使用者の魔力を一時的に爆発的に上げる事が出来る。

空条レイ
出身：不明（空条光に保護される）
所属：時空管理局本局執務官補佐（機動６課に出向）
階級：現場では１等陸尉

役職：執務官補佐
コールサイン：WR（ダブルライト）
魔法術式：ミッド式　AAA→W時ミッド式　S＋
所持資格：執務官補佐：査察官：捜査官：大型自動二輪免許：普通自動車免許：大型特殊免許：特殊飛行機免許：水上オートバイ免許：メカニックマイスター：1級通信士

今作のサブ主役。身長160？の華奢な体つきな男。
長い白い髪と赤い瞳が特徴。
体つきとその長い髪と顔から良く女性と間違われるのが悩み。
正宗とは戸籍上は兄弟だが血の繋がりはない。
昔、とある実験施設で眠っている所を保護される。
正宗とは出会った当初は喧嘩ばかりしていたが徐々に互いを認め合い今では執務官補佐として彼を支え共に仕事をしている。
「二人で一人」亡きリーゼロッテと光の言葉を胸にWとして戦っている。

ハードボイルダーやリボルキャリーその他のガジェット（ドローンではない）を設計し開発したのも彼であり、少々メカオタな所がある様で今回のハードボイルダーの修理に際して何か企んでいる…。
新しいデバイスの部品など新しいシステムが出来ると普段から考えられない位興奮する。
他にも知識の収集が趣味らしく休みの日は無限書庫に入り浸る事もしばしば、それ以来ユーノとも知りあい良い友人となっている様だ。
魔導士ランクとしてはレイの方が高いがWの特性上肉体での戦いを得意とする為、正宗に現場は任せている。
［サイクロンメモリ］［ヒートメモリ］［ルナメモリ］と呼ばれるソウルメモリを使用する。

2話　雑談（前書き）

今回から次回予告入れてみました。
多分予告通りになるはず！！
信じれ…。

2話　雑談

空から眺める夜の都市っていうのも良いもんだ。
あの一つ一つの光が人々の生活の光だと思うと心が暖かくなる。
この光を守る為俺達は戦っている…。
そう考えればこれまでの重労働（ハードワーク）の疲れもある程度軽くなるってもんだ。

「嬉しそうだね？正宗。そんなにヘリに乗るのが気に行った？」
俺の隣に座っていたフェイトも同じ窓から外を眺めるとそう語りかけてくる。

「レイと一緒にすんなよ。俺は単純にこの眺めが良いと思っただけさ」
「ふふ…そうだみたいだね」

レイは景色よりも、操縦席に興味深々だ。
なんか、今にも操縦席に転がり込みそうな体制で見入ってやがる。
相変わらずのメカオタだ。

「これは興味深い。ＣＰＵでの自動制御はリボルキャリーにも積んでいるがデバイスのＡＩを利用するというのは珍しい。管制デバイスとして利用するという考えはとても面白い。しかし、君とこのデバイスはまるで阿吽の呼吸での意思疎通が出来ているね。見事だ」
［ありがとうございます］
「執務官補佐に褒めてもらえるなんて光栄ですよ。長年の相棒ですからね。ストムレイダーとは」
［はい］

「ふむ、やはりインテリジェントデバイスは使い手と共に成長していくという…」

随分と意気投合してるな。ヘリパイロットのヴァイス陸曹にそのデバイス「ストームレイダー」だったか。レイと気の合う合う人間ってあまりいないと思っていなかったんだが杞憂だったか。少しは安心だ。

「安心したって顔だね。やっぱり弟は心配？」

「ん、まぁな。あいつあの性格だから。友人関係も限られててさ。俺と一緒だと休む暇もないしな」

「ごめんな。協力してもろて。休みとるつもりやったんやろ？」

俺達は俺達で親交を深める為、色々話をしている。

どうも、俺達の会話で休暇の事が出たことで俺達に謝っている様だ。リィンフォースちゃんが寝ちまったのを再び鞄の中に移していたはやてに申し訳なさそうに頭を下げられた。

「いや、良いですよ。フェイトとなのはからも話聞かされてましたし。八神部隊長の思いも聞いてますから」

そう。地上管理局の対応の遅さを何とかしたい。そういう部隊を作りたいという思いだ。

確かに一々、救助隊にしろ武装隊にしろ面倒な手続きしてる暇があれば、直ぐに出撃した方が良いに決まってる。

最初は面倒だと思ったが資料を読み、保存されていたフェイトとなのはのメッセージを聞けばその「思い」は嘘偽りの無いものだというのも嫌という程伝わってきた。

俺はこういう人間が嫌いじゃない。

「ほんま、ありがとな」
「いえ。気にしないで下さい」
「ね？正宗は話せばわかってくれる人って言ったとおりでしょ？」
「ほんまや。フェイトちゃんお墨付きの人に間違いはないな」

どんな風に話してんだよ…フェイト。そこまで期待されてもな。
俺に出来る事なんてたかが知れてる。それに、一応秘密裏に査察するという任務もある。
まぁ、表向き協力って事だから俺達は査察官じゃなく、一管理局員として不正を発見した場合、報告をする。という事なんだがな。まぁ…良い機会だ。その言葉が嘘か本当かは自分の目で見るさ。

「後な。私の事ははやてで良いよ」
「はい？」

何を言ってるんだこの人は。

「うちの部隊はそんな堅い部隊やないから普段は気楽に付きおうてもらいたいんよ。
その方が皆打ち解けるのも早いしな」
「ですが…」

いくらなんでも上司を呼び捨というのはなぁ…。
聞いたことねえぞ。

「正宗。公の場ではちゃんと皆してるから大丈夫だよ」
「それに私も正宗君と同い年やしな。聞いとったらフェイトちゃんとは気楽に話とるし。私ともそれなりに気楽に相手してもらいたいんよ」
「…分かった。はやて。これで良いんだろ？」

「うん！！ありがとうな！！我儘聞いてもろううて」

・・・可愛い。

「正宗…」

「だから何でお前はそんな直ぐキレるんだ！！」

「自分の胸に聞いてみるといい」

プイっと顔を背けるフェイト。。

なんだよそれ…。

相変わらず訳が分からない。

「ほんま仲ええね二人は」

「仲が良いというのか？これは」

「ここまで素のフェイトちゃんはあまり、見られへんよ」

「はやて！！」

「ははは…。ごめんごめんフェイトちゃん」

顔を赤くしたフェイトと笑いながら受け流すはやて。

聞いていたとおり親友らしいな。

俺に言わせてみればここまで、同性の職員とじゃれ合うフェイトは見た事なかったからな。新鮮だ。

「何笑ってるの？正宗」

「んっ…なんでもねえよ。そういやエリオとキャロもいるんだったか？六課に」

話題転換だ。このままだと俺が標的にされていたかもしれないしな。

「うん。二人も正宗とレイの事話したら楽しみにしてたよ」

「ああ…道理であいつ等からメールが来てた訳だ」
「なんや。エリオとキャロとも知り合いか？」
「ああ、まぁ。と言ってもあいつ等が小さい時に何度か一緒に遊んだ事がある位だけど。今でも時々連絡は取り合ってるが実際に会うのは本当に久しぶりだ1年以上会ってないな」

フェイトが執務官として働いた先で身寄りの無い子供の世話をしているというのは俺達執務官の間では結構有名な話だ。唯でさえ忙しい職種にも関わらずそこまでするフェイトが有名にならない筈がない。
その中でもエリオとキャロ。この二人はフェイト自身が保護責任者となっている。
言ってしまえば事実上この二名の母親だ。
正直保護責任者になりたいという相談を受けた時は驚いたが、こいつはこいつで厄介な過去を持っているからその過去から子供の世話をしているのかもしれないな。
まぁ、その後正式にフェイトが保護責任者となった後、フェイトと休みを合わせたりして二人に何度か会ってる訳だ。
フェイトと一緒に遊園地に連れて行ったな。懐かしい。
レイは俺の事を兄ちゃんとか言わねえからちょっとした兄貴風を効かせて気がするなぁ…。
恥ずかしいな。今思い出すと。

「懐かしいね。遊園地に行った時の事思い出すよ」
「うっ…」

こいつ嫌がらせか

「なんや？面白そうな話な気がする」
「聞かなくていい！！」

「あのね。正宗。行くまではエリオとキャロの為とか言ってたけど気がつけば本人が一番のりのりだったんだよ」
「がーーー！！フェイト！！バラスなよ！！」
「ほんま…仲ええね。二人とも」

クスクス笑うはやて。
ったくフェイトの所為でまた笑われた。
フェイトはフェイトで笑ってるしよ。

「しかし、エリオもキャロも魔導士と騎士か。連絡受けた時は驚いた上に嬉しいような悲しい様な気がしたがお前は良いのか？保護者のお前としちゃ学生にでもなって欲しいとか言ってなかったか？」

笑ってたフェイトも笑うのを止めると少し、弱々しく微笑んだ。
まぁ、親としては複雑か。自分に憧れて同じ魔導士と騎士になると言われた日にはなぁ…。
魔導士としてその気持ちは嬉しいが親としては危険な仕事はして欲しくないんだろう。

「うん。でも、ちゃんと自分で考えて答えをだした結果魔導士と騎士になった訳だし。本人の意思は尊重してあげたいしね。それに六課では同じ部隊だから何かあれば私が守るよ」
「あんまり構いすぎるなよ？あいつ等だって自分で決めて魔導士と騎士になったんだから一応社会人だ。まっ、六課にいる間は俺も気を付けて見とくよ」
「ありがとう。正宗」
「ほぉ……」

なんだ？この納得した様な顔は
というか、面白い玩具を見つけた様なニヤニヤ顔は…！！！

「二人とも気づいとらんかもしれんけど、今の会話。子供の進路の心配する夫婦の会話以外の何物でもないよ？」
「「なっ！？」」
な、何言い出すんだ！！この人は！！
夫婦って！！俺達まだ１９だぞ！！
大体、付き合っても…
フェイトの顔をちらりと見る。
「「っ…！！」」
同じ瞬間に視線がぶつかった。
真赤な顔になって視線を逸らされた。
…なんだこの反応。
つーか自分でも分かる。体中の血液がまるで顔に集まるかのように顔が熱い…。
やべえ…。なんだこれ。
いつもは美人だなと思っているフェイトが今は…スゲー可愛い。
「あーごめん！！弄り過ぎた！！ここまで本気の反応されたら、私の方が恥ずかしいわ！！」
「本気って…」
「……」
「……」
沈黙が気まずい。
「ま…まぁ。エリオとキャロに会うのは楽しみだ！！」
「う、うん！！楽しみにしてるっていってたよ」

流れを変えねば！！

「…話が最初に戻っとるで」

「「あっ！？」」

再び気まずくなりそうになるが思わぬ所から、助け舟が入った。

「八神部隊長。そろそろつきますよ！！」

「あっ、ほんまや。意外と早かったね？」

助かった。

フェイトも同じ心境らしく胸をなでおろしている。

窓を覗けば、大きな建物が見える。あれが機動六課か。

「それはもう、最新のＪＦ７０４式ですからねぇ！！」

「実に興味深い話が聞けた。これでハードボイルダーの強化案が見えたよ。正宗」

「そ、そうか。良かった。良かった」

「ん？何かあっのかい？若干顔が赤いが」

「な、なんでもねえよ」

「ふむ。まぁ構わないが」

「そ、そう言えば、はやて。俺達が呼ばれたのってガイアメモリ関連のエキスパートが欲しいって事らしいが」

今度こそ流れを変えてやる。もうすぐこのヘリから降りるが、その前にどうしてもこれは聞いておきたい。

「ああ…。うん。それやねんけどな。二人に面倒見てほしい子がおんねんよ」

「面倒を見る？俺達教導資格も教官資格もないぞ」
「違うんだ。正宗。フォーワードメンバーが陸戦魔導士で全員まだ新人（ルーキー）なのは知ってると思うんだけど」
目線を送り確認をしてくるフェイト。
それには俺ではなく、レイが答える。
「確認済みだ。配布された資料は既に頭に叩きこんである。それで、僕達に何をしろと？教導なら高町教導官がいるだろう」
「うん。そのメンバーは最初は４人のつもりやったんやけど急遽５人に増えたんよ」
「大丈夫なのか？一つの部隊が保有できる魔導士のランクは決められてるんだろ？お前らエース級だけでも、馬鹿みたいにランク高いのに」
そう。部隊を設立する際の注意として、一つの部隊が保有出来る魔導士のランクの総計は決まっている。
それを決めておかなければ唯でさえ数不足の実力のある魔導士達が、一か所に集まってしまったりととんでもない事になる。下手すりゃ、クーデターなんて簡単に起こせる環境が出来上がっちまう。まぁ…そんな大層な事考える人間がいるとは思えないが。
そこでこれから向かう機動六課のメンバーを軽く頭の中で羅列してみるが正直、ちょっとやそっとの天変地異なら何とか出来るメンバーが揃ってくる。
…正直異常な部隊だ。普通なら設立不可能だな。
まぁ、それを可能にする裏技を使っているのは容易に想像がつく。
能力リミッター。
魔導士自身の魔力出力に制限をかけ、本来のランクを引き下げて１部隊が保有出来るランクの総計が収まる様になっているんだろう。

「うん、まぁ。ちょっと特別な事情があってな。私がもうワンランクダウンして本局にも許可貰えたんよ」
「ワンランクダウンだけ？何かきな臭いな」
「ああ、そうだな。どうなってんだ？」

レジウス中将の様に疑う訳ではないが、この部隊にはやはり、フェイト達の言う“思い”だけじゃなく、他にも思惑がありそうだ。

「あんな、その新人。昔ドーパントやったんよ」
「「！？」」

こいつは予想外だった。
まさか、ドーパントだった人間を六課が引き受けたのか。

「ブーストって事か？」
「そうなる」

一部のドーパントとなった人間の中から人間性やドーパントになった経緯、本人の反省度具合等を考慮し、本人の意思を確認した後、魔導士試験を受けさせる事がある。
その者達は「ドーパント」から「ブースト」と呼称が変わる。
そして、本局預所属の対ドーパントの戦力として、ある程度の権利を与えられる訳だ。
ガイアメモリを持つ、魔導士の殆どは皆がブーストと呼ばれる。
かくいう俺も一応はこのブーストとして本局には登録されている。

「俺達にそいつにガイアメモリの使い方を教えろって事か？」
「そうなる。けどそれ以上に教えてあげて欲しいんよ。ドーパントやからって、皆に認められへん事はないって」

…予想通りか。ブーストはその立場上周りから、冷たい目で見られる事も少なくない。
自分達の努力なしで簡単に力を手に入れた人間だからだ。そして、その力の使用者は大半が力に溺れ暴走し、大きな災害をもたらす。
その姿同様化け物以外の何物でもない。
それを防ぐ、ドライバーがあるとしてもその不安は拭えきれないんだろう。
隣人が化け物。
そんなの誰でも嫌だろう。

「話はわかった」
「やってくれるか？」
「まぁ…気持ちは分かるけどな。そんなの無駄だと思うぜ？」
「…無駄？」

その言葉にはやての目が少し細くなる。
少し怒らせたか？言い方が素っ気なかったかもしれない。

「僕も正宗に同意見だ」
「レイも！？」

フェイトまで大きな声を出して驚きやがる。
それには少し、心の中でチクリと痛みが走る。
分かってねえんだな。やっぱり俺達（ブースト）の事を。
長い事友人関係を続けていてそれが分かってもらえていないという事が少し寂しい。
まぁ、こいつは初めからそういう事は気にしない人間だから分からないのかもしれないが、それが彼女の魅力でもあるのが何とも皮肉だ。

「まぁ…ドライバーとガイアメモリの制御の仕方位なら教えてやる。けどそればっかりはそいつ自身の問題だ」
「…分かった。今は受けてくれる返事を聞けただけでもＯＫとするわ」
「はやて。良いの？」

フェイトは納得がいかないみたいだ。
ああ…。やっぱり、フェイトは優しいな。だが、今はその優しさが正直…

「着陸します！！シートベルトつけて下さい」
「あ、ああ分かった」

俺の言葉を最後に皆が黙りこくり、それきり、先ほどまでの明るい雰囲気はどこかに吹き飛んだ。ヘリのプロペラの音が徐々に小さくなると同時にヘリが地面へと着陸すると同時に今まで感じていた浮遊感の様な物がなくなる。
全員が無言でヘリから降りる。
ヴァイス陸曹が何か言いたそうだがその言葉は喉から出る事はなかった。

「まぁ、とりあえず歓迎の挨拶や！！空条正宗執務官、空条レイ執務官補佐！！機動六課は君ら二人を歓迎するよ！！」

雰囲気をぶち壊す様な大きな声ではやてがそう言うと、皆がその顔に笑みを浮かべた。
まぁ、とりあえず。今は笑ってこの歓迎を受け入れよう。フェイトとの再会に新たな仲間との出会いだ。そこに新規臭い顔は似合わないしな！！

次回予告

無事六課へと配属された俺とレイ。
さっそく、俺達はこの部隊の本当の目的は何かを探ろうとするが、
呆気なく見つかっちまう。
まぁ…それはさておきだ。
そこで出会ったのは、自分専用のデバイスを手に喜ぶフォワードメンバーの新人達。そんな中、浮かない顔している一人の少年がいた。
そう、はやてから話された“ブースト”の少年だ。

「何だよ？おっさん」

仕方ねえ…少し頭冷やしてやるか。
次回　魔法少女リリカルなのはW
第三話　「背負う罪」
さぁ、お前の罪を数えろ！！

2話　雑談（後書き）

…フェイトをデレさせるのが難しい！！
ああ…恋愛事を書くのは難しいですよ。
…めげない！！
頑張りますよ！！
さぁ、次回はオリジナルのガイアメモリと使い手が登場します。

3話　背負う罪（前書き）

すみません。
オリジナルのガイアメモリとか言いながら結局次回に持ち越し、予想以上に長くなった。

3話　背負う罪

「おい、見つかったか？」
「ダメだね。それらしいデータはない。まぁ、こんな端末から知れる事なんてたかが知れてるのは分かってたけどね。でも、僕言わなかったかい？彼女達がレジアス中将の望む様な事をしてる可能性はないと思うよ？」
「…まぁ。そうだろうけどな」

俺とレイは、あれからフェイトとはやてに、用意してくれていた宿舎の部屋へと案内されそのまま泥沼のように眠りについた。
まぁ、久しぶりにベッドで眠れたという事もあるんだろうけどな。
俺達は爆睡して、朝早くに目が覚めた。
ＡＭ３：００。窓から外を覗けば未だに日は昇っていない。
寝たのが確か１１時位だったから４時間位の睡眠だ。習慣というのは恐いもので俺自身ここまで早く起きるとは思わなかった。
寝なおそうかと思ったが、ある意味チャンスだ。
さすがに誰も起きてないだろ。
そう思い、俺は未だ眠っていたレイを叩き起こすと、デスクワークを行う部屋の端末から
今現在こうして、六課について調べている訳だ。

「はぁ？せっかく久しぶりにベッドで寝れるというのに、こんな事で貴重な睡眠時間を削らせないでほしいよ」
随分と不満そうだ。お前は少なくとも俺よりは寝てる筈なんだがな？
「そう言うなって。何かある。それは確かだと思うんだ。それが、汚職とかそういう事じゃなくて、もっとこう六課の設立根幹に関わ

る様なさ」
「…はぁ。相変わらず君お得意の勘かい？」
レイはため息をつきながら忙しなくキーボードを叩く。
「まぁ、そうだな」
「君の勘は、８割がた当たるから始末に悪いんだ。…駄目だね。この端末から調べられるのは今手元にある資料以上の事は分からないよ」
「まぁ、そう容易くはないか…」
下手すれば、情報がデータ化されていない可能性とてある。
紙か、もしくは当人達の頭の中だけか。
顎に手を当て考える。
違和感を感じたのは何だ？いつ感じた？
そんな事を考え始めた時だ。
「誰かいるの？」
若い女の声と共に、あえて点けていなかった部屋の灯りがついた。
…タイムアウトだな。まぁ、表の手段で情報が手に入らないというのが分かっただけでも良しとしよう。
考えるのはいつでも出来る。
「ああ。すいません。ちょっとやり残した仕事があって」
こういのは適当に誤魔化すのが一番だ。
レイに視線を移すと予め用意していた、この間のＴレックスドーパントの事件の報告書を画面に出す。
嘘の中に、事実も入れておく。

常識だ。

「あれぇ？正宗君？レイ君？」
「げっ…なのは」
「お久しぶり。なのは」

俺の事を下の名前で、呼んでいる辺り、目の前の女が俺の知り合いなのは分かるだろ？
栗色のサイドポニーが特徴的な女だ。白い制服を着ている。
六課の制服ではない。
教導官の制服だ。それを身に纏う知り合いは俺は一人しか知らない。
高町なのは
フェイトの親友で俺もフェイトを通じて知り合った女性だ。
笑いながらこっちに歩いてくる。
どうやら、俺達との再会は、向こうは喜んでくれているらしい。
まぁ、俺も嬉しいんだがな…。
唯なぁ…。

「うん。本当に久しぶりだね。前あったの何時だったかな？でも正宗君。げっ…て。酷いなぁ。お友達なのに。よいしょっと」

不満そうに、頬を膨らましいながら、両手に持っていたいくつかのファイルを、俺達の使っていたＰＣの横に置く

「仕方ねえだろ。お前の顔見るとあの時の事思い出すんだよ…」
「にゃはは。あの時はねぇ…私もガイアメモリ所持者との模擬戦は初めてだったし」
「僕は実に興味深いデータが取れたからよかったけどね」

思いだしたくもない。

あれは、俺が執務官の駆け出しとして働き始めた時だ。
フェイトの紹介でなのはに出会った時彼女が教導官と知り、軽く指導してもらえないかと頼んだら、実力を見たいといい模擬戦をする事になった。
それが間違いだった！！
全力全開で戦う羽目になり、馬鹿みたいにでかい収束砲で消し飛ばされたんだよ！？
エースオブエースの名は伊達じゃないと文字通りに身に浸みて分かってしまったんだよ…。

「おめえは体にダメージ残んねえだろうが。俺何か目が覚めたら体中が痛くて一日動けなかったんだぞ？」
「うーん。手加減はしてたよ？」
「分かってるよ。だからこそ、その後自身喪失で軽く自分を見失いかけたんだがな」
「あの時は君を説得するのが大変だったよ…」

本気で戦って、相手に一発しか入れられなかったなんて男としても魔導士としても自身なくなるわ。
あの時は本気で魔導士止めようかと思った。
というかレイが必死で説得してなかったら本気で止めてたぞ。

「ごめんごめん。でも二人してこんな朝早くから何の仕事してたの？」
「ん？ああ。この間終わらせた事件の報告書の作成だ。もう終わったけどな」

そう言い目の前の画面にこの間の戦いの画像をだす。
俺達がTレックスドーパントにメタルシャフトを叩きこんでいる画像だ。

さすがはバットショット。
良い仕事だ。

「相変わらず凄いねぇ。ドーパントとの戦いは」
「まぁな…。そういやお前こそどうしたんだよ？こんな朝早くから」

どうやら、疑われはしていない。
もう問題ないだろう。

「うん。今日の朝の訓練の前にフォワードの子達のデータをもう一度見直そうと思って」
「データって。そんな一回一回変わるものか？」

俺の疑問にはなのはではなくレイが答えた。

「変わるね。正宗だって気がついてないだけで、訓練というのは受ける度に動きが段々変わるものさ」
「うん。レイ君の言う通りだよ。それにあの子達はまだまだ原石の状態だから一回一回磨く事で色んな輝き方を見せてくれるしね。まだ、訓練は始まったばかりだけど何となく形は見えてきたよ」
「へぇ…。じゃあ聞くがブーストの奴は何所のポジションなんだ？」

その言葉にはなのは少し表情を暗くする。
まぁ…予想通りというか。
初めてのブーストの教導と言う事でまだ、はっきりとはそいつだけどのポジションが良いか見えないんだろう。

「うーん。その子にはオールラウンダーが良いかなって思うんだけどね」
「おいおい…本気か？」

「微妙だね」

オールラウンダー。
チームを組む際自分達の得意とする魔法や技能からそれぞれのポジションが決められる。これは魔導士のチームでもスポーツのチームでも変わらない。
そんな中このオールラウンダーというポジションはその名の通り全ての役割をカバー出来る人間のみがつくことが出来るポジションだ。
とはいえ、そのポジションにつくのは、ある程度、様々な魔法が使用出来る、いわゆる器用貧乏な魔導士のイメージが強い。
どれもこれもパッとしないが全部一通り使えるというタイプだな。
レイが微妙といった意味が分かるだろ？

「ううん。違うの。その子ね、正直強いよ。技能だけで言えばフォーワード陣の中ではダントツのトップ。魔導士ランクこそBだけど間違いなく彼の持つ技能や魔力はAAクラスはあるよ。それに加えてガイアメモリを使用した場合正直今の私じゃ相手するのキツイしね」
「お前が？…ああリミッターか」
「うん。今は私AAだから。だから、正直助かるよ正宗君が来てくれて」
「うん。なんとなくオチは読めたね…。正宗」

ポンと肩をレイに叩かれる。
同情する様な目で俺を見てんじゃねえよ！！

「わーってるよ。俺達にそいつの面倒みろってんだろ？だが、昨日はやてとフェイトにも言ったが出来るのは表向きなアドバイスだけだぜ？精神（メンタル）面まで、面倒見るつもりは、ない」

その言葉にはうーんと困る様な顔をするなのは。
俺に先に断りを入れられてどうしたものか考えているんだろう。
「そこをなんとか。駄目…かな？」
上目遣いでお願いしても駄目な物は駄目だっての。
「そういうのは個人の問題だ。そいつがブーストって言うなら何かしらの犯罪を犯した可能性が高い。違うか？」
「…うん。確かにあの子は罪を犯したけど。でも…あの子ずっと苦しんでるんだよ。必死に隠そうとしてるけどね」
全く、フェイトといい、はやてといい、なのはといい、ここまで、お節介な組み合わせは、そうそういないぞ。
そういう風に同情されたってそいつの罪が消える訳でもねえのにな。
まぁ…こいつ等の場合は同情というよりみ全力全開の余計なお節介なんだろうが。
「ハァッ…。話聞くだけだぞ？」
「っ本当！？」
沈んでいたなのはの顔がまるでひまわりの様に笑顔になる。
…不覚にもドキッとしてしまった。
「相変わらず女の人の頼みに弱いね正宗。正にハーフボイルド」
「うるせえ！！誰がハーフボイルドだ！！ハードボイルド！！俺が目指してるのはハードボイルド！！」
「でも…良いの？フェイトちゃんにも聞いたけどあの、その」
歯切りが悪い。どうも昨晩のヘリでの会話内容とその雰囲気につい

てフェイトと話したんだろう。話によれば二人は同室との事らしいしな。

「仕方ねえだろ。二日続けて、大事な友人に頼まれたんじゃあなぁ。それに正直お前らの顔を曇らせる新人ってのにも少し腹が立つ」

自分(てめえ)で決めてブーストになったんだろうに他人に迷惑かけるなんざ、納得いかね。

「まぁ…僕は正宗が決めたならサポートはするけどね。正直気は進まないけど」

「二人ともありがとう！！」

［マスターそろそろ時間です］

彼女の首元の赤い宝石から女の声が発せられる。彼女の頼れる相棒デバイスの「レイジングハート」だ。

「よう。レイジングハート。久しぶりだな」

「久しぶり」

［ええ。お久しぶりです］

軽く挨拶を交わす。俺達。

インテリジェントデバイスと言われるこの類のデバイスはＡＩが組み込まれている、つまり意思があるのさ。だからこそ最低限の挨拶はしないとな。

「いっけなーい！！もうそんな時間なの？正宗君！！多分後で聞かされると思うけど一応スタッフ全員に後で紹介する事になるから二度寝しちゃダメだよ？それじゃ！！」

「お、おい！！」

「行っちゃったね」

そのまま走って出ていくなのは。
廊下は走るなって先生に習わなかったか？というか今はあいつが先生だろうに。
まぁ…それよりだ

「あいつ、結局何もここで仕事出来なかったんじゃ？」
「だね。まぁ訓練中でも、データは見れると思うし、心配はないと思うけど」
「なら良いんだが。まぁ折角だし、しばらく置いて行ったファイルを見てるか。二度寝するなって釘刺されたしな」
「はぁ…。仕方ないな」

そう言いながら俺達はお呼出がかかるまで、フォワード陣のデータをひたすら見ながら六課初日の朝を過ごしたのさ。
……今になって眠気が来たなんて言えねえしな。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「皆ごめんな。忙しい中集まってもろて、今日は外部協力いう形で、ガイアメモリ専門の人が今日から六課に加わってもらいます。その人達の紹介がしたいから集まってもらいました。じゃあ、空条正宗執務官、九条レイ執務補佐官よろしくおねがいします」

…紹介って六課のスタッフ全員にかよ！？

『俺はてっきり、フォワードメンバーだけかと思ってたぞ』
『僕もだよ。皆仲が良い部隊だね。』

念話で会話する俺達。こんな大人数の前で話すなんて思ってなかったから何も考えてなかったぞ！？

『まぁ、適当に挨拶するだけで良いだろう。時間を取らせるのも悪い』

『わーった』

念話を終わらせるとそのまま、前へと出る。

「え～、紹介されました空条正宗執務官だ。昨晩着任したので、まだ会ってない人が大半だと思うけど、まぁ、見かけたら気軽に話しかけてくれ。俺達が専門としているのは、ガイアメモリ関連の事件だ。今回もそれに関する事で力になる為に六課に来た。ガイアメモリの事で聞きたい事とかあれば遠慮なく聞いてくれ。まーいるか分かんねえけどな。

唯、最初に言っておくが俺とレイ執務官補佐はブーストだ」

その言葉に皆が少しざわめき始める。

視界に入ったフェイトとなのはが目を大きくパチクリさせてら。

まぁ…予想外だろうしな。

俺がこの場でそんな事言うのはさ

「確かに手にした力そのものは少し、異形な物かもしれない。でもだ。それでもだ。今回俺達がここにいるのは六課設立に込められた思いに共感したからだ。皆の仲間に入れてほしい！！よろしく頼む！！」

俺はその場で頭を下げる。するとレイも同じ様に頭を下げた。

『まぁ…仕方ないね。第一印象というのは大事だ』

どうやら、俺の考えは分かってくれたらしい。
ブーストという立場上、皆が恐れる可能性がある。それは人間として仕方ない事だろう。
異形な力を前にすれば恐れるのも無理はない。
だからこそ、こちらから1歩、歩み寄る。
そうでもしなければ対等な関係を築くなんて無理だからだ。
それが、原因なら今この場にいる人間もするべき事が見える筈だ

「ちょ、正宗君頭上げて！！こっちから来てほしいて頼んだんやし！！皆もなんか言うたげて！！」

言葉が素に戻っとる…はやて。
部隊長としてはどうなんだ？それ。落ち着けっての。

『でも、今回はそれが良い方向に働いたみたいだね』
『？』

パチパチパチ…！！！
徐々に俺達に向けて大きな拍手が送られた。
中には色々言ってくれてる人までいる。歓迎の言葉だ。
どうやら認めて貰えたらしい。
俺達は顔を上げると

「ありがとう！！これからよろしく頼むぜ！！皆！！」
「以下同文」
「お前なぁ！！以下同文ってなんだよ！！挨拶になってねえ！！」

そう言うと皆が笑い始めた。
これ、良い雰囲気だとは思うんだが、完全に俺達面白人間と思われ

てないか？
フェイトとなのはも笑ってやがる。
俺の横では、はやてもだ。
…まぁ良いか。

「じゃあ、皆！！今日も一日がんばろか！！」

はやての締めの言葉に皆が笑いながら敬礼をする。
良いのか？この部隊ゆる過ぎる気がするが、まぁ嫌いじゃないがな
こういう雰囲気は。
人間笑顔が一番だ。
しかし、これで一つの可能性は消えたな。
やはり原因は…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「びっくりしたよ。正宗。心臓止まるかと思った」
「本当だよ。でも、なんで急にあんな事」
「ほんまや。最終的に皆受け入れてくれてたけどな」

こうして現在俺達は三人に軽くお説教されてる次第です。はい。
まぁ、覚悟はしてたがな。
いきなりブーストだなんて言えば、皆驚くだろうし、実際皆驚いていた。

「お前らが言ったんだろうが。ブーストでも認められる様にしろって」
「「「あっ」」」

その言葉に三人とも言葉を詰まらせる。

「簡単な話がお手本だよ。そのブーストの新人“バニット・ランクロス”だって見てたんだろうしよ」
「へっ？なんで正宗君が名前知ってるの？」
「うん。まだ紹介もしてない筈なのに」
「もしかして、会ったんか？彼に」

俺の横にいたレイは目の前の空間におもむろに手を“突っ込んだ”。
俺は見慣れた光景だが、三人とも驚いている。
ああ、まぁこいつの特殊な魔法を直で見るのは初めてか

「空間接続。レイ（こいつ）の持つ希少技能（レアスキル）さ。一度でも行った場所があればその空間へと極小さな門を開く事が出来るのさ。まぁ、人を通すなんて事は出来ないが、ある程度のサイズの物ならそこから持ってくる事も出来る」
「解説どうも。別に彼本人に会った訳でもないよ。これを見ただけさ」

そう言い手を再び引っ張るとそこには、何冊ものファイルが手にされていた。

「なんや？それ」
「なんだろう？なのはは知ってる？」
「えーとね。これは私が朝纏めようとしたフォワードの皆のプロフィールと昨日訓練してとれたデータだよ…」

頭を掻きながら申し訳なさそうに目をきょろきょろするなのは。
それにはさすがにフェイトもはやても溜息をついている。
それはそうだろう。

「個人情報をあんな所に置きっぱなしにしておくなんざ管理局員としては失格だな」
「まぁ…僕達はそのおかげでいち早くフォワード部隊の事は知れたけどね」
「ううっ…言葉もございません」
「ほんまや。これが、悪意ある人間に見られとったら大変な事になる」
「なのは。しっかりして」
「ごめんなさい…」

親友兼同僚と親友兼上司から駄目だしを食らうなのはか…これは希少だ。俺は素早く胸元から相棒（レイ）が発明したガジェットバットショットを取りだすと素早くシャッターをきる。
軽くフラッシュが焚かれると撮った画像が映される。
おお、上手く撮れてる。

「何撮ってるの!?正宗君!!」
「ははは…いや、ちょっとバットショットの通常形態のテストも兼ねてさ、撮ってみた」

バットショット。
レイは俺の執務官という立場上現場で約に立ちそうな物を作ってくれている。
その名を「ガジェットシリーズ」。
一種のサポートデバイスだ。
このバットショットは、通常形態は単なるデジカメだが、最大の特徴は「バットメモリ」と言われる“ギジメモリ”を挿入した時に現れる。
“ギジメモリ”とは、俺達が集めたガイアメモリのデータを元に作りあげた一種の人口ガイアメモリだ。

とはいえ、オリジナルと違い、人間をドーパントにする様な力はない。
精々、軽いＡＩ代わりに使うくらいだ。
その機能を使用して、ガジェットへと挿入すると“ライブモード”へと変形する。
このバットショットの場合デジカメからコウモリへと形を変え、自立飛行と、自動撮影を行う事が出来る。これを使えば危険な場所も撮影できるという訳だ。
この間の戦いの時も撮影していたのがこのバットショットさ。
こいつが出来たお陰で詳しい報告書を書ける様になり、俺は重宝してる。
まぁ、実を言えば今回テストと言ったのは今回こいつに新たな機能を加えたらしく通常形態にバグを起こしてないかをチェックした訳だが…まぁ問題ない。
良く撮れてる。

「あう～恥ずかしいなぁ。もう」
「まぁ…誰にも見せはしねえから安心しろ」
「それはそうと、正宗。さっきお手本って言ってたけど。どういう事？」

フェイトの顔が真面目になると皆も同様に俺を見つめてくる。

「簡単な話。皆がブーストっていう存在にビビってるなら。こっちが折れて仲良くしてくれって言えば、どうにか成る事もあるって事だ。それを実行しただけだ。まぁ、別に六課の環境の方に問題は無さそうだがな。あの反応を見る限り。その資料見て、俺が何でそいつがチームを組もうとしないのかは分かるが、その程度お前らも分かってるんだろう？」

その言葉に皆が無言で頷く。
そう、そこから先をどうすれば良いのか分からないんだろう。
同情なら出来るが、それをすればランクロスとか言う奴がより心を閉ざすのは目に見えている。
だからこそ俺達に頼んだ。
同じブーストという肩書を背負う罪人をだ。

「ったく。俺はそういうの柄じゃねえんだけどな」
「ほんまゴメンな。嫌やろ？やっぱこういうの」

顔を曇らせるはやて。
俺はその頭にポンと頭を乗せるとそのまま撫でた。

「へっ…何？正宗くん？」
「まぁ、確かにヘリで聞いた時は少し腹が立った。要は傷を舐め合えと言ってる様なもんだからな。だが、俺達はそんなつもりはない。俺達は俺達なりにそいつの根性叩きなおしてやるよ。だから心配すんな。そんな事で笑顔曇らせんな。お前らもな」

そう言いながら空いた手でフェイトの頭を撫で、はやてを撫でていた手でなのはの手も撫でる。

「うっ…」
「あう…」

何か皆顔を赤くして、黙りこくってやがる。
そんなに嫌だったか？
子供扱いするなって事か？
まぁ…俺も同い年だしなぁ。同い年に子供扱いはさすがに失礼か…。

「君はやはり、ハーフボイルドだね」

レイはレイでにやにやしながら俺達を見ている。
ってか誰がハーフボイルドか！！ハードボイルドだ！！

「これは、確かに反則やね…」
「…やっぱり正宗は卑怯だ」
「うう…ドキドキするよ」

何かブツブツ呟いてるが…何だ！？
そんなに怒ってるのか！？
何とか話を逸らさせねば！！

「そういえば、これから俺はどうすれば良いんだ？」
「そうだね。皆そろそろ戻ってきてくれるかい？」

そうレイが言うと、皆が顔を一斉にブルブル左右に振ると、真面目な顔に切り替わる。
切り替え早っ！！

「とりあえず、今日はなのはちゃんについて行ってフォワードの皆と会ってくれるか？」
「分かった。お前らは？」
「私達はこれからちょっと六番ポートに」
「教会本部でカリムと会談や」
「カリムさんか…」
「正宗は知りあい？」
「ああ。一度会ったことがある。向こうは覚えてないだろうけどな」
「…それはない思うけどな」
「んっ…何か言ったか？はやて？」

ぼそっと何か呟いたらしく、良く聞こえなかった。
「はは…何でもないよ。うん。フェイトちゃん。ほないこか」
「そうだね。あっ、正宗。私は昼には帰るからエリオとキャロと一緒にご飯どうかな」
「そうだな。久しぶりにいいかもな。」
「うん。よろしくね。じゃあ行ってきます」
「いってきます」
「ああ、いってらっしゃい」
「いってらっしゃいフェイトちゃん、はやてちゃん」
「いってらっしゃい」

そう挨拶を交わすとフェイトとはやては俺達とは逆の通路へと向かった。

「それじゃあ行こうか。正宗君、レイ君」
「ああ…わかった」
「さて、訓練スペースかい？」
「ううん。今日はねちょっと特別なんだ」

なのはは随分嬉しそうだ。
まぁ…こいつの事だし、それと今日見たデータから考えると

「フォーワードメンバーにデバイスでも渡すのか？」
「えっ！？どうして分かったの？」

驚いてやがる。
まぁ…昨日来たばかりの人間に見抜ける訳ない思っているのかもな。

「データを見たからだろ？正宗」
「正解だ。相棒」
「データって、これだけで？」
なのははレイの手元を指差す
レイの手にあるいくつかのファイルだ。
「ああ。まぁな。特にスターズ二人のデータがな。こいつらの技能に付いていけてない。自前のデバイスにしちゃ良く出来てるが限界だろ？」
「こういうデータ解析は僕の方が得意なんだけどね…。そこに人間が絡むと何故か正宗の方が正解を導いてしまう。本当に不思議だ」
「凄い…」
なんだ…？なのはの奴。もの凄い目がキラキラしてるんだが
「凄いよ！！正宗君。これだけのデータだけでそこまで分かるなんて。ねぇ教導の資格取ったらどうかな？勿体ないよ！！」
「近い近い！！顔が近い！！」
気がつけば顔と顔が付きそうな位の至近距離。
それに気づいたなのはも一瞬で顔を赤くする。
すぐ様、身を引くなのは。
「あっ…ごめんなさい」
「いや…良いけどよ。何でいきなり教導資格なんだ？」
「そうだね。正宗に物を教えるだけの知識があるとは思えないが」
「失礼な奴だなぁ！！相変わらずお前は！！」
真剣に悩んでやがる。レイの奴。そこまで俺と教導官が結びつかん

か！？
まぁ…俺も悔しいがこいつと同じ意見だ。
自分の事で手一杯なのに、そんな事考えたこともねえ。

「ううん。これだけのデータから会ったことも無い魔導士の実力が分かるなんて凄いよ！！」
「いや、言ったってお前が大体纏めてたしな。俺はそれを見ただけだぞ」
「それが凄いんだってば！！」

また顔を近づけてきそうな勢いだ。
それを手で制する。

「その話は今度だ今度！！とりあえず、技術研究室でも行けば良いのか？」
「う～勿体ないなぁ。うん。技術研究室だよ。といってももう目の前だけどね」
「だね。喋りながら話すと早いものだ」

そう言いながら扉の前に立つと自動的に扉が開かれる。

「ごめん。ごめん。おまたせ」
「あっ、なのはさん。遅いですよ。もう新デバイスの説明終わっちゃいましたよ？そちらは空条執務官と補佐官ですね」

扉が開かれると、そこにはフォワード5人とリィンフォースちゃんにもう一人眼鏡をかけた娘がいる。
彼女達の手にはそれぞれ待機状態のデバイスが握られている。
どうやら、来るのが遅かったらしい。なのはは「あちゃー」とか言いながら頭に手を当てている。大丈夫か？こいつ。

しかし、フォワード全員は例の資料に丁寧に顔写真が付いていたから見分けがつくが、メガネの娘は初見だ。

「あっ紹介するね。正宗君、レイ君。この子は」
「メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。よろしくお願いします。正宗さん。レイさん。シャーリーって皆呼ぶんのでそう呼んでください」

笑顔で敬礼するシャーリー。
元気一杯だな。でもなんでだろうな。なんというかこの娘からはレイと同じものを感じるのだが。

「メカニックデザイナーか。という事は僕が頼んでおいた物も？」
「はい！！レイさん！！ちゃーんと仕上げておきましたよ！！」
「何だ？頼んでおいたものって？っていうかいつの間に！？」

そんな暇なかったろうが。

「こっちに来る前さ。言っただろう？リボルギャリーを送った時にデータを送っておいたんだ。それと、ヘリでのヴァイス陸曹とストームレイダーとの会話から得たデータも寝る前に彼女に送っておいたのさ。何をしたかは、まぁ…後で実物を見た方が早いよ」
「楽しかったですよ～！！あんな子に触れるなんて本当。徹夜でしたけど全然眠気が来ないです！！」
「君にもあのマシンの素晴らしさが分かってくれるかい？」
「ええ。あのテールユニットが特に！！」

…成程。そういう事か。メカオタだこの娘も。
さっきから、専門用語が飛び交いまくってる。
まぁ…ハードボイルダーに関して話してるらしいのは分かるが、ま

さかあいつが言ってたハードボイルダーの強化か？もう終わったのかよ！？

「にゃははは、意気投合してるね」
「仕方無い。放っとこう。リィンフォースちゃん昨晩振り！！」
「はい！！正宗さん！！レイさんはシャーリーと気が合うみたいですね。あそこまで会話が弾んでいるのを見るのは初めてです」

相変わらず小さいなぁ。
和むなぁ…。

「どうかしましたか？正宗さん」
「いや、何でも…んでそっちが」
「フォワード陣だね。皆自己紹介しようか？」
「「「「はい！！」」」」

さっきから、だんまりだったフォワード陣がなのはに続いて声を上げる。
緊張してんなぁ…初々しいね。

「スターズ3スバル・ナカジマ二等陸士です」

青いショートカットが似合う女の子だ。
リボルバーナックルとローラーブーツで戦う子だな。
ポジションはフロントアタッカー。
使用魔法は近代ベルカ式か。確か昔なのはに助けられたって子だな。

「ナカジマってもしかしてナカジマ三佐の？」
「はい。父です」
「やっぱりな。それになのはに助けられたのも君だろ？」

「えっ…！？あっ…はい！！でもどうして？」
「ゲンヤさんとは、執務官の前に捜査官をしてた事もあってな。短い間だけど世話になったのさ。それとなのはとは個人的に付き合いがあるからな。聞いた事があるのさ。まさかこうして魔導士になってるとはなぁ。世の中何があるか分かんねえな？なのは」
「うん。そうだね」

これまた、恥ずかしそうに顔を下げてしまってる。まぁ…子供の頃の事話されたら恥ずかしいか。

「よろしくな。スバル…で良いか？」

俺は手を差し出す。しばらく間をおいて急ぐ様に手を握ってきた。

「はい！！えーと正宗さんで良いですか？」
「ああ。よろしくな。んで次は」
「スターズ４ティアナ・ランスター二等陸士です」

気合いの入った声で敬礼をする。オレンジ色の髪を二つに結っている。
…なんというか写真で見ても思ったが実際に会うと

「似てるなやっぱり」
「えっ？」
「もしかして、知りあいなんですか？正宗さん」
「そうなの？正宗君。ティアナ」
「い、いえ。私は。どこかで会いました？」
「いや、会った事はない。俺が一方的に知ってるだけだ」
「どういうことですか？」

どうも胡散臭そうに見られてるなティアナには
まぁ…軽くストーカーみたいな発言だったかもしれないな…
反省だ。

「ティーダさんに写真見してもらった事があるんだよ」
「！？兄を知ってるんですか！？」

目を見開き大声を上げるティアナ。
ティアナだけじゃない。なのはもいつの間にか談笑していたシャーリーもレイも何でかしらんが黙ったままのエリオもキャロも絶句している。
俺自身驚いてるんだ。フォワードメンバーのデータを見た瞬間、眠気も吹っ飛んださ。
全員、一応俺の頭には記憶に残る名前がフォワードメンバーだったんだからな。

「あの兄とはどういう」
「執務官になったばかりの時にな。一緒の戦場にたったのさ。あの人の精密射撃には助けられた」
「そうだったんですか…。」
「ああ。あの人は、間違いなく優秀な魔導士だった。たった一人でドーパントを食い止める程だからな」
「ドーパント？兄は違法魔導士に殺されたと聞いてましたけど…。」
「ああ…。ドーパントだったのさ。恐らく、あの人の部隊長のミスだな。それを隠す為に奴がドーパントっていうのを隠そうとしたんだろう。まさかそのミスで死人が出たなんて知られたらキャリアに傷がつくからな。ガイアメモリ関連の事件を隠ぺいするのは、当時重犯罪だったんだ。一応その後、俺がそのドーパントを逮捕して、真相を暴いて、その部隊は解体したけど。でもまぁ…その部隊長が上の方と繋がってた所為か部隊長の自主退職とその部隊は自然と分

解せれて何の問題にもならなかった。すまない力不足だった」
俺は頭を下げる。するとティアナはうろたえながら
「ちょ、えと顔上げてください！！正宗さん！！」
「良いのか？」
「ええ。逮捕してくれた魔導士がいると聞いていましたけど。正宗さんだったんですね。ありがとうございます。兄の為にそこまで動いてくれてた執務官がいたなんて…うれしいです」
そういうとその瞳は少し涙ぐんでいた。
いや…ティアナだけじゃない、スバルもだ。他の皆はポカーンとした顔をしている。
事情が呑み込めないんだろうな。

「ありがとうな。ティアナで良いか？」
「はい！！正宗さん！！よろしくお願いします！！」
「ああ」

いつまでも湿っぽいのは悪いしな。それに、レイを含めた皆に話すのもなぁ…。
話せばまた湿っぽくなるのが目に見えている。
この話が出来るのは恐らくティアナと皆が本当の絆で結ばれた時だろう。

「んじゃ、次いくか」

皆何か聞きたそうだが、敢えて踏みとどまっている。
そういうのが円滑な関係を生むんだろうな。
こいつ等はそれが分かってる。良いチームになるな。

そう思うと俺は二人の若い魔導士と騎士に目を向ける。
ぽかーんとした顔を急に引き締めると

「ライトニング３エリオ・モンディアル三等陸士です」
「ライトニング４キャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

小さい体にまだ着こなせていない制服で敬礼をする二人。
体が震えてる。
あー仕事場で俺と会うのは初めてだからだろう。

「久しぶりだな。二人とも。元気してたか？」
「はい！！でも何か変な気分ですね。一応、通信では何度も話してますから」
「うん。そうだね。三人そろって話すのは初めてだな。これでフェイトさんがいれば皆揃いますね」

エリオもキャロも喋り始めたら緊張が解れたようだ。

「昼には帰ってくるって言ってたからな。皆で飯食おうって話だ」

その言葉に二人とも嬉しそうに顔を見合せて喜んでいる。
やっぱ良いもんだ。
俺の弟はこんな顔しないからなぁ…

「エリオとキャロとも知り合いなんですよね。正宗さんとレイさんは確か」
「二人に聞いてましたから」

スバルとティアナがそう言うとエリオと、キャロの隣に立つ。

「まぁな。フェイトとは一番付き合いが長いからな。その関係でな」
「まぁ…僕は実際に会うのは初めてだけどね。よろしく。エリオ、キャロ」
「「はい！！」」
「挨拶が遅れたみたいだけど、空条レイだ。執務官補佐をしている。正宗同様レイと良名前で呼んでくれて構わない。よろしく」
「はい、私達も名前で構いませんレイさん」
「ありがとう。さて後は」

全員の視線が先程から会話に参加しようとしない壁に腕をくみもたれかかる少年へと向く。
制服こそきっちり着ているがその態度は最悪だ。
上司の前でこの態度はない。
茶髪の髪は綺麗にカットされている。美容院にでも行ったばかりかもしれないな。
そして、その目付は正直滅茶苦茶悪い。
これでガムでも噛んでたら正直ぶち切れてるぞ。俺。

「スターズ５バニット・ランクロス二等陸士です。よろしくお願いします」

ぴしっとその場で敬礼をする。形だけは無駄に良いなこいつ。

「ああ。おまえもブーストだったか」
「はい。そうです」

俺は軽くバニットの横まで来ると皆に聞こえない様に呟いた

「案外、臆病者なんだな。お前。」
「…っどういう意味でしょうか？」

「虚勢を張ってるのがバレバレなんだよ。チキンが」
その言葉にキッと俺を睨みつけてくるバニット。
やはり、図星らしい。
そして次の瞬間には俺の顔面向けて拳が飛んでくる。
俺は軽く首を横へ向けるとその拳を避ける。

「正宗君！？」
「ちょっと！！バニット！！あんた何してんの！？」
なのはとティアナが声を上げる。
なのはは困惑を、ティアナは、バニットに対して、怒っている様だ。
やはりこの2名の関係は特に悪いらしい。
他のメンバーもバニットに向けて冷たい視線を送っている。
正直見方に向ける視線じゃない
ったく。
これがこいつなりの気の使い方の結果って事か。

「ちっ…」
舌打ちをするバニット。拳を避けられた事に対する苛立ちか、はたまた仲間に認められない事に対する苛立ちか。

（「矛盾してんだよ。お前は」）
「なのは。模擬戦の用意しろ」
「へっ？」
「模擬戦だ。俺とバニットで模擬戦をする。ルールはどちらかが戦闘不能になるもしくは降参（サレンダー）するまでだ。レイも良いな？」
「仕方無いね」
「ちょっ…正宗君？」

「正宗さん。いくら何でもいきなり模擬戦はバニットに不利じゃ」
ティアナが軽くバニットを心配する様な言動を発する。
さすがにフォーワード陣のリーダーなだけはあるか。
一応のチームメイトの身を案じている。
それが分かっただけでも収穫だな。
まだ、こいつ等の絆は結べる筈だ。

「って言われてるがどうする？バニット」
「…やります。やらせてください。高町教導官」
「バニット…。分かった。でも、戦闘不能までは駄目。いい？二人とも」
「なのはさん！？」

ティアナが驚きの声を上げる。ティアナだけじゃない。他のメンバーも顔を見合わせ混乱している様だ。
シャーリーは特にだ。

「良いんでしょうか？リィン曹長？」
「うーん。多分大丈夫です。はやてちゃんに正宗さんを信じる様言われてるですよ」
「大丈夫なんでしょうか？」
「大丈夫だ。正宗ならね」
「レイさん」
「僕の兄さんは誰よりも熱い男なんだ。バニットの心だって溶かすだろうさ」
「何ごちゃごちゃ言ってんだ！？レイ。訓練スペース行くぞ！！」
「はいはい」

そう言い、技術研究室を皆で出ようとした時だ。

ビービービービー！！！
部屋全体が赤い光を発し始めるとあらゆる画面にＡＬＥＲＴの文字
こいつは
「出撃かよ！？タイミング悪いなもう！！」

次回予告

これから模擬戦って時に限って出撃。
ったく最悪だ。フォワード陣の関係は今はまだ最悪の状況だ。
仕方ねえから。俺がバニットを指示するつもりだったが、空にドー
パントだ！？
なのはもフェイトも雑魚のガジェットの片づけで手がたりねえ。
仕方なしに俺達は、新たな力を得たハードボイルダーと共に空へと
出る。
フォワード部隊は心配だが、今は信じるしかねえ。

次回魔法少女リリカルなのはＷ
第４話「星と雷とＷ」
本当に大丈夫か？なんか嫌な予感がしやがる。

3話　背負う罪（後書き）

え～前書きでも謝りましたがどこにオリジナルのガイアメモリ？という。
すいません。
次回に持ち越しです。
バニット・ランクロス。
こいつが、その使い手です。
正宗が少し嫌なキャラに見えてしまったかもしれません…。
また、おっさんなんて言うキャラには成らなさそうです…すいません。

4話　星と雷とw（前書き）

あけましておめでとうございます。
年末忙しく全然…何も書けなかった。
正月休みで、何とか執筆…予想外に長くなりました。
他の人の小説も結構更新されてて、このサイト見てたら暇しませんね…。
彼女がいないからって…負け惜しみじゃないんだからね！？

…男のツンデレなんてキモいだけですよね。
すいません。
でも自分的にそういう男キャラは好きなんですよねぇ…。

4話　星と雷とw

聖王教会本部。
あの後、フェイトちゃんに車で送ってもろた私はカリムのいる部屋まで通された。
良い匂いの紅茶とお茶菓子がテーブルの上に置かれてる。

「ごめんな。御無沙汰してもうて」
「いいのよ。気にしないで。部隊の方は順調かしら？」

その質問には私は、少し表情が暗なるのが自分でも分かる。
はっきりと自信を持って、順調とは決して言えへんのが事実。

「やっぱり、バニットが問題なのかしら…」
「まぁ…そうやね。正直に言うとまだ、あの子とフォワードの子等が分かりあえてないからな…」
「ごめんなさい。私が無理にお願いしたから…」

カリムが頭を下げてくる。
さすがにそれは、私も焦ってしまう！！
教会でも重要な立場にいる人間でもあり、六課設立の際色々な手続きも行ってくれた。そのおかげで私は人材選びに時間かけれたし、こっちが感謝こそすれ、謝られるなんて…。
今日は皆謝罪でもする日なんか…？
正宗君とレイ君も頭下げるし…もう。

「顔上げて、カリム。こっちが感謝こそすれ、カリムに謝られるなんて事ないよ。それにロストロギアを扱う以上ガイアメモリも避けられへん。ブーストの存在は六課には必要やったんも事実や」

フォワードメンバーの追加。
それはカリム直々のお願いやった。
聖王教会の信者の一人やったらしく、カリムとも何度か会った事があるらしい。
今の彼からは想像出来ん位明るい子で家族思いの良い子やったらしい。
実際事件の状況を考えれば、彼自身にははガイアメモリを使用したいう事以外に罪はないいう形で処理された。本人に意志があるなら、ブーストとして働く許可も管理局はだした。
彼はそれを承諾し、元々、魔導士いう事もあって試験自体は免除。
その後は、カリムの頼みで六課が引き取ったいう訳や

「ごめんなさい。なんとか解決の糸口になれればと思っての外部協力者を頼んだんだけど。彼達はどう？」
「大丈夫や。空条執務官も補佐官も協力してくれる約束はしてくれた。バニットに関してはあの二人に任せるしかないやろね」
「そう。本当は私が力になってあげれれば良いんだけど。あの子の苦しみは同じ罪を背負ってる者にしか分かってあげられない…。本当自分の無力さが嫌になるわ…」

カリムがそこまで思い入れる子やねんな。バニット。
ほんま二人の間に何があったんやろ。

「カリム…。大丈夫やよ。正宗君なら…バニットを救ってくれる」
「だと良いのだけど。彼等は元気だった？」
「うん。カリムの言う通り、執務官としても人間としても信用できる良い人や。でも、まさか、フェイトちゃんとなのはちゃんから聞かされてとった人物とカリムの言う空条執務官が同じとは思わんかったけど」

そう。今回彼等二人に協力要請をした切っ掛けはカリムからの紹介やった。
カリムとは子供の頃正宗君は会った事があるらしい。
それは昔起きたとある事件でカリムの危機を正宗君のお父さんが救った事があるらしいとのこと。その時偶然彼も居合わせたらしくて、その時一言二言喋った位らしい。その後、風の噂で彼の両親の死そして彼が弟と共に両親の後を継ぐ様にガイアメモリを専門とする執務官となった事を知ったらしい。

「私も驚いたわ。世界は広い様で狭いわね」
「そうやね。でも正宗君。カリムの事は覚えとったよ」
「えっ？そうなの？まだ小さかったのに」
「はは。記憶力が良いんかもな。何だかんだ言うても、執務官にもなるだけの力もあるんやし」

そう言いながら、置かれている紅茶を頂く。
うん。おいしい。
気になる話は色々あるけど

「そういえば、カリム。今日は何があったんや？」

本題にはいろか。
私の言いたい事を感じ取ったカリムは、纏う雰囲気を一変させ、目の前にモニターを出すとそのまま、いくつかのボタンをタッチした。
すると、部屋全体にカーテンがかかり、部屋全体が暗くなる。
いくつかのモニターが展開され、映像が綺麗に浮かびあがる。
でも、そこに映った映像は

「新型のガジェット…二機も！？」

一つは全体が翼みたいな形のガジェット、もう一つは形が球体のガジェット。
どっちも初見のガジェット。
これが呼び出した理由何か？
カリムがそれだけの為に、呼びだしたとは思えへんのやけど。

「ええ。今までの？型以外に新しいのが2種類。戦闘性能はまだ不明だけど、これ」

ひとつのモニターが大きくアップされる。
サイズ比が表わされている映像。
平均男性の身長の約1．5倍位の大きさなのが分かる

「？型は割と大型ね。本局にはまだ正式には報告してないけど、監査役のクロノ提督にはさわりだけ、報告したんだけど…」

もう一つ画像が大きくアップされる。
そこに映されたのは、一つの箱…。
この箱は…！？

「一昨日づけでミッドチルダに運び込まれた不審貨物」
「レリック…やね」
「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし…」
「ガジェット達がレリックが発見するまでの予想時間は？」
「調査では早ければ今日、明日」

確かにこれは…でも予定では…
…成程。そういう事やね。

呼び出した理由は。

「レリックが出てくるのがちょい早いような…」

「だからよ。だから会って話したかったの。これをどう判断すべきかどう動くべきか」

あかん…。

想定外の事に、動揺しとる。

「レリック事件も、その後に起こるはずの事件も…対処を失敗する訳にはいかないもの」

自分の責任が重いいう事を必要以上に感じてるんかもしれへん。

確かに、今回の部隊設立…。

何も私の思いだけで、出来た訳やない。

そんなん出来る程、私の周りの人達は甘くない。

優しくも厳しい、そんな人達ばっかりや。

六課設立にはカリムの持つ希少技能（レアスキル）が大きく関係しとる。

だからこそ、カリムが責任を感じるのは当然やけど…。

私は無言でモニターを開くとタッチする。

カーテンが再び、動きだし部屋の中に光が戻ってくる。

暗い所おったら、気分も滅入るし、嫌な事ばっかり考えてしまう。

「はやて？」

「まぁ…何があってもきっと大丈夫」

「…さっきまだ大丈夫じゃないって言ってたじゃない」

「うっ…」

それを言われると…まぁそうやねんけどな。

でも、

「即戦力の隊長に新人フォワード陣も技能だけで見れば問題ない。まだ不安要素はあるけど、頼もしい助っ人も来てくれたし、大丈夫やよ」
「空条兄弟ね。仮面ライダーか…。」
「仮面ライダー？何やそれ？」

初めて聞いた言葉や。
二人のコードネームはWの筈。

「知らない？ドーパントある所にバイクに乗ってやって来る正義の味方」
「いや、知らん。何かのコードネーム？」
「ある意味コードネームかも。でも、それは自然と周りがつけた名前だけどね」
「自然と？どういうこと？」
「彼等に助けられた人間の一人が口にしたのが原因らしいわ。仮面ライダーの再臨って」
「再臨？」

以前にもそう呼ばれとった人間がおったいうこと？

「私の口から言えるのはそこまでかな。彼等が仮面ライダーを名乗ってない以上これ以上は本人達から聞いてくれる？」

迂闊に聞けない事いうことかもしれへんな。
知りたければそこまで信頼を勝ち取りなさいと言われとるみたいや。

「分かった。向こうから話してくれる様になる位仲ようなるよ」
「ふふ…頑張ってね。」

どうやら、少しは、気分が晴れたみたいやね
よかった。
でも、何か正宗君とレイ君も堂々としとるから気にならんかったけど二人ともブーストやねんな…。
と言う事は、彼等も何らかの罪を犯した言う事で…でも彼等二人の経歴に犯罪歴なんてなかったけどな…。
隠蔽？いや、あの二人の性格からしてそんな事許す様な人間とちゃうやろし…。
良く良く考えればまだ二人の事は表向きな情報しか知らん。
仮面ライダー。
なんやろ。この言葉があの二人の過去にとても大きく関係してる気がするのは気の所為やろか…。

ビービービービー！！！

私の前にモニターが開かれるとそこにはＡＬＥＲＴの文字

「…予想以上に早いみたいやね」
「みたいね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
第一種警戒体制。
着任初日からこれかよ。
確かに、出動が多い職場とは分かっていたが、このタイミングは最悪だ。
フォワード陣はまだ纏まってない。
チームで行動する場合。そこに非協力な人間がいるだけで全てが崩れることも大いにありうる。
そう。

1人のミスが全員の命を失わせる事もあるんだ…。
「正宗？大丈夫かい？呼吸が乱れているが」
「ああ…悪い。大丈夫だ」
らしくねえ…。
あの時の記憶で、ここまで緊張させられるなんざ何年振りだ。
やっぱり、糞生意気な新人の所為か…。
糞…やっぱ引き受けるんじゃなかったか？
俺自身が自分の罪を思い出しかけただけでこれだ…。
「…今は目の前の事態に集中しよう。チームワークに問題があるなら僕達でサポートすればいい。大丈夫さ。僕達はもう同じ過ちは繰り返さない」
「ああ…そうだな」
ったくこいつには敵わねえや。
心を見透かされているといのとは違う。
分かってくれる。
そういう感じだ。
そういう存在が相棒で、兄弟で俺は恵まれてる人間だってのは分かるんだが…
「なぁ…相棒」
「何だい？正宗」
「何でリボルギャリーが空を飛んでんだよぉおおおおお！！！」
そう。あれから、俺達はレリックというロストロギアらしき不審貨物を運んでいる貨物車両が発見されたらしく、それを抑える為、出撃した。

レリックというのは、一見赤い宝石だが、実際は高度なエネルギー結晶体らしい。
何の目的で作られたかは不明だが、すでに他世界、しかも未開の世界で、何らかの災害を引き起こしている。第1級探索指定ロストロギアだ。
その上その世界ではありえない技術の研究施設後があちこちで発見されているらしい。
つまりが、何者かが、レリックを利用して、何やらかそうとしている可能性が非常に高い。
それも次元犯罪レベルでだ。
六課はレリック関連の事件を専門とする部隊だ。
その為、レリックの行方を六課の後ろ楯のカリムさんの所属する聖王教会の教会騎士団の調査部にも依頼していたらしいが一足遅かったようだ。
貨物車両にはすでに何体かのガジェットドローンが入り込み、完全に列車は制御を失っているらしい。
幸い、まだレリックのある重要貨物室には侵入されてはいないが時間の問題なのは目に見えている。
場所は山岳とこれまた陸戦魔導士にとって戦いにくい事この上ない場所だ。
仕方なしに、俺はてっきりまたヴァイス陸曹にヘリで運んでもらう気でいたのだが…

「リボルギャリーが飛べないなんて一言も言ってないよ。実際問題宇宙でも活動は可能だ。
さすがに水中は無理だけどね」
「どんだけ汎用性高いんだよ！？リボルギャリー！？ホイールが変形した時はびっくりしたわ！！」
そう。現在俺達は、なのはとフォーワードメンバーが乗るヴァイス

陸曹のヘリの横で並行飛行しているリボルギャリーの中にいる。
使い手でもある俺が知らない機能があるってどうなんだよ…。

「まぁ…その分武装が装備出来なかったのが不満といえば不満だけどね」
「いや…それだけの汎用性を実現させようと思ったら仕方ないだろ。主に資金的な意味で」

まさか、リボルギャリー制作の際口座から金が纏めて無くなってたのはまさかこれが理由か？
経費だけで完成しなかった訳だ…。
これで武装を装けていたらと思うとぞっとする。

『大丈夫ですか？空条執務官、空条執務補佐官』

目の前にモニターが現れるとそこには、メガネをかけた男性が映った。

『お初にお目にかかります。通信越しでの挨拶で申し訳ありません。グリフィス・ロウラン准陸尉です。ロングアーチ所属部隊長補佐です。よろしくお願いします』

真面目な好青年って感じだな。

「ああ。よろしく頼む。それと俺達の事は名前で呼んでくれて良いぜ？正直兄弟だから見分けつきにくいしな、聞いてて」

補佐官付くか付かないだけだしなぁ…。
聞いててややこしいんだ。

『分かりました。正宗執務官。レイ補佐官でよろしいですか？』
「ああ。頼む。んで？状況は？」
『空に新型のガジェットが複数確認されました。部隊長2名が空域を確保する為先行して出撃する事になったのですが…』

歯切れが悪い。
何か想定外の事が起きたか？
まぁ…新型というのは不安になるとは思うが…・
それを代弁するかの様に、レイがグリフィスに応える。

「何かあったのかい？」
『…空のガジェットを指揮するドーパントの存在が確認されました』
「「！！？」」

マジかよ…？
この状況でドーパントだ？
不味いぞ…！！フォワード部隊とバニットのチームワークはまだ最悪だ。
俺が現場に降りて、バニットと組むつもりだったんだが…。

「なのはとフェイトで抑えられそうか？」
『いえ…予想以上に数が多いです。空域確保で精一杯かと』

状況は最悪か…。

「分かった。とりあえず、なのは達と話す。通信繋げてくれるか？」
『了解』

そう言うとグリフィス映っていたモニターが閉じられ、別のモニターが三つ開かれる。

一つは、なのはが一つは、はやてが、もう一つには「ＳｏｕｄＯｎｌｙ」と表示されたモニターが映される。
フェイトは既にこちらへ向かっているか。
飛行中の為、音声だけなんだろう。
はやては六課へ向かって移動中か。
そして、なのはは隣のヘリにいると。

「さて、どうするんだ？部隊長」
『状況は聞いとるみたいやね』
「当たり前だよ。それでどうするんだい？ドーパントの相手は僕達がするべきなんだろうけど…」

隊長二人と俺が空へ出る。
それがベストなのは分かる。だが、

『今のフォワード部隊を出撃させて良いのか。だよね。なのはどう？』
『…いけるよ。幸い今回はライトニングとスターズそれぞれに分かれて動いてもらう事になるから。皆いけるね？』
『『『『はい』』』』

威勢の良い声が重なる様に通信で聞こえる。
なのはと同じヘリに乗ってるからだろう。
だが、今の声にバニットの声がなかったのを俺は聞き逃さなかった

「なのは。バニットを出せ」
『分かった。変わるね』

そう言うと視界からなのはが消えると、相変わらず不機嫌そうな顔のバニットが映る。

当然か。俺はあれだけこいつに喧嘩を売ったんだ。

『何ですか？』

「お前、今の自分の立場は分かってるな？」

『……』

だんまりか。言いたくないが、こいつのお芝居に付き合ってやるか…。

「はっきり言うと今のお前はフォワード部隊の足手まといだ」

『『『『『『『『『！？』』』』』』』』』

その場にいた人間全員の驚きの息遣いが聞こえる。

当然だろう。

チームワーク云々言ってるのに、下手すれば、チームが空中分解する様な言葉だ。今の言葉は。

バニットの性格はどう考えても直情型。さっき、俺を殴ってきたのが良い例だ。

だからこそ、そういう人間は何かを隠そうとするとボロがでる。

まぁ…普段は今みたいにだんまりを決め込んでいるらしいからバレないんんだろうが…。

俺は、見逃さなかった。

普通の人間なら気付かなかっただろうが、肩が少し下がると同時に軽く息が吐かれる…。

安堵している姿だ…

「足手まといっていうのは技術（レベル）が足りねえとかじゃねえぞ。スタンドプレイに走る人間がチームにいるだけでそのチームは崩壊する可能性があるんだ。言いたい事分かるな？」

『俺にスタンドプレイをするなという事ですか？』

「そういう事だ」
『分かりました』

その答えに皆が皆驚きの声を上げている。
こいつが今までスタンドプレイを強行してきたのにいきなり素直に言う事を聞いているからだろう。
だが…予想通りだ。
こいつは、自分を嫌わせようとしているだけだからな…。
自分に近づくな。そう言ってるんだろう。
“仲間”を失わせない為にだ。

（「恐らく、メモリの所為だろうが…」）

こいつの過去を資料と照らし合わせて、今朝調べてみたが、まるで別人だった。
チームワークを重視し、真っ先に敵陣に突っ込むフロントアタッカーとして以前いた部隊ではリーダーの様な立場だったらしい。
だが…

（「ガイアメモリに人生を狂わせられた…か」）
（『正宗…詳しい詮索は後だ。今はこの状況を何とかしないと』）

深く考えようとすると頭にレイの言葉が響く。
視線を目の前のモニターから、横の相棒へと向けると既に様々なモニターでガジェットドローンのデータを確認している。
…仕事しろって事ね。

（『悪い…。考えに入っちまうとこだった』）
（『礼はいらない。バニットの事は確かに気になるけどドーパントと戦う事も考えないと。それが新人達やなのはとフェイトを守る事

に繋がる筈だ』）

そうだな…。
そうなると信じよう…。
だが、保険はかけておいて損はないな

「おい。バニットお前ドライバにリミッターは付けてあるな？」
『はぁ？当たり前ですよ。ブーストは皆そうでしょ？』

ブーストになった人間は自身のガイアメモリを使用する際、所属する部隊長の許可が無ければその力を行使できない様に挿入口が閉じられている。
俺達は執務官という立場上自由に使えないと困る事も多いので、それには当てはまらないがそれも、管理局に貢献して信頼を築いた結果だ。
まぁ…使う度に面倒な報告書は書かねばならないのだが…。
しかし、相変わらず態度悪いな…。
これはいずれにせよ帰ったら力で分からせるしかないか

「なら、どうしようもない状態になるまでブーストの使用は禁止だ。はやても良いな？」
『そのつもりや。ええな？バニット』
『…分かってます』

相変わらず仏頂面でそう言うバニット。
だが、やはり安堵しているというのが俺には分かった。
やはり、こいつはガイアメモリを使うのを恐れているだけだ。
帰ったら、あいつのメモリを調べるか…。
もしかしたら…あいつの不安を取り除けるかもしれないしな…。

「スターズは3人で行動。良いか？はやて」
『分かった。私も直ぐ6課に戻るけど少し時間かかる。それまでグリフィス君は指揮を。リィンは現場管制。ええか？』
「分かった。聞いているかグリフィス？」
そう言うとモニターが開かれグリフィスが映ると
『了解しました』
そして、開いていたバニットへの画面からリィンフォースちゃんが顔を出すと
『はいです！！』
そう大きな声で言った。
皆やる気十分だな…。
『なのはちゃんとフェイトちゃんは空域の確保！！』
『うん』
『分かった』
なのはとフェイトも静かにそう言う。
まぁ…新人達を引き連れての初出撃だ。
少しは緊張するか。フェイトにいたっては自分の子供が出撃する訳だからな…。
『んで、正宗君とレイ君は空中に出てるドーパントの相手を…でも正宗君空飛べんの？』
最もな疑問だ。

俺は陸戦魔導士。はっきり言おう。空を飛ぶ事は出来なくはないが…あまり得意ではない。長時間の飛行は不可能だ。
だが、

「問題ない。その為にハードボイルダーが存在する」
「ああ。こいつはテールユニットを換装すれば陸海空どこでも活動可能だからな。心配はいらねえよ」
『そうか。分かった。二人には空のドーパントをお願いするよ』
「「了解」」

俺達は声を揃えてそう言うと、ダブルドライバーを腰に当てるとベルトが出てきて腰に固定される。
一足早いが、少しでも気分を上げとかねえと今回は新人達の初出撃なんだ。
失敗はしねえ…。

「ほんなら皆出動や！！」
『『『『『『『「「了解」」』』』』』』』』』

全員の声が重なる。今度はバニットの声もちゃんと入っていた。
全てのモニターが閉じられる。
皆の士気は上がっている。
…大丈夫だ。
恐らく…唯の出撃ならバニットがブースト化しなくても大丈夫なはず。
俺がするべき事は…

「俺達が…だろ？」
「！？…そうだな。俺達がするべき事は、あいつ(バニット)がブースト化しない様な状況を作る事だ。そして、その為には…」

「空のドーパントは僕達で何とかするだね？よし、これでＯＫだ」
俺の気持ちを代弁するとレイは目の前のモニターを全て閉じると、パチンと指を鳴らすと中央のハンガーで固定されているハードボイルダーが勝手にランプを点灯させた。
「な、なんだ！？レイ！！何したんだ！？」
「見れば分かると言っただろう？さぁ…もう一人の君の主だ挨拶して」
何を言ってるんだ？レイは挨拶って…
［はじめましてマスター正宗。この度、ＡＩを組み込まれましたハードボイルダーです。以後お見知り置きを…］
若い女の声で喋りやがった…。ってえぇぇぇぇぇぇ！！！
「レイ！！どういう事だよ！！これは！！」
「どうもこうも。言っただろう？強化したと」
「いや言ったけど…。だからってインテリジェントデバイス化する事なくないか！？」
バイクだぞ？
「だからこそだ。この間の戦いだって、正直僕がハードボイルダーを制御しつつ、戦って何とかなったレベルだ。それが、空の上や海の上となるとゾッとするよ…。いくら僕に被害はないとはいえね…」
「レイ…。お前良い奴よ！！」
俺は感動した！！

兄ちゃん感動だ！！兄弟歴長いが今日程感動した事はない！！
抱っこしてギュしてやる！！

「！！！止めたまえ…！！！！僕はそんな趣味はない！！」
「感動したぞ！！俺は！！」
「っ！！サイクロンで吹き飛ばすぞ！！」

サイクロンメモリを俺の頬に突き付けてくるレイ。
地味に痛え…。

『何してるの…？正宗君』
「「あっ…」」

いつの間にか開いたモニターになのはの顔が映っている。
その顔は見てはいけない物を見てしまったかの様に、頬が軽くヒクヒク動いている。

「いや…軽い兄弟のスキンシップを」
「…そ…うなんだ。うん」

頬が赤く染まっている。
不味い…果てしなく誤解されてる。

「違うぞ！！僕は決してそんな趣味はない！！」
「俺だってねえよ！！」

二人して互いに拳をぶつけ合うとその場からバックステップで離れる。
ヤバいヤバい…。
まだ、チラチラとこちらの様子を覗う様に視線を合わせようとしな

いなのは。
まだ…誤解されてる。

「だから違うっての！！…ハァ。それより何か用があるんじゃないのか？」
『あっ…うん。そろそろ空に出た方が良いから。それで連絡したの』
「了解した」
「了解。なのは。出来るだけドーパントは早めに蹴散らすつもりだが、もしかしたら手間取る可能性も高い」
「わかった。でも信じてるからね。正宗君とレイ君なら大丈夫だって！！」

胸の前でグッと拳を握ると飛びきりの笑顔でそう言うなのは。
これは、期待に応えるしかねえよな！！

「任せろ！！レイ！！」

俺の声に応える様にレイはシートに座るとそのままシートベルトで体を固定する。
変身した時こいつの体は無防備になる為、ハードボイルダー出撃の際キャノピーを全開で開くリボルギャリーの中で変身する場合レイの体が吹き飛んでしまう可能性があるからだ…。
何でこんな難儀なマシンにしたんだか…。
レイ曰く「カッコいいから」らしいが…それで自分の身を危険にするとかなぁ…。

［サイクロン！！］

レイの手の中でメモリが覚醒する。
俺も急いでメモリを取りだすとスイッチを押す。

［ジョーカー！！］
「「変身！！」」
俺達がいつもと同じ姿を変える台詞を叫ぶとレイのWドライバーへサイクロンメモリが挿入される、するといつの間にか俺のライトスロットへサイクロンメモリが転送される。
その瞬間にレイの体がシートに座ったまま、ぐったりと首を前屈みに倒れる。
俺は、サイクロンメモリを強く押し込みジョーカーメモリをレフトスロットへ挿入し、同じ様に押し込む。
［サイクロン！！ジョーカー！！］
力強い音声と共に俺の体に“切り札”と“風”の記憶が魔力（エネルギー）に転換されて軽い嵐を起こし、俺達の肉体を変化させる。
「行くぜ！！レイ！！」
『了解！！頼むよ！！ハードボイルダー！！』
レイの声に反応する様に、ハードボイルダーが軽くエンジンを吹かすとライトを点滅させながら喋り出す。
［了解しました。リボルギャリー。マスクドハッチ展開］
そう言うとリボルギャリー内を灯す光が赤く点灯する。エマージェンシーコールだ。
続けてリボルギャリーの天井が真っ二つに分かれる。
当然空の上な為、強烈な風が俺達を引きはがそうとするが、しっかりと座席部分のアンチキックバックシートが特殊な生体反応磁石を

含んでいる為、俺達の体が引き剥がされる事はない。
本来は、ハードボイルダーの加速に振り落とされない様にする為の機能なのだが…思わぬ副産物な効果を発揮してくれている。

［続けて、リボルハンガー回転。換装ユニット。タービュラー！！］

リボルギャリー後部のリボルバー式のハンガーへハードボイルダーが下がると現在装備されている緑のユニット“ボイルダーユニット”を分離しハンガーへと戻すと、再び前方へとハードボイルダーは押し出される。
続けて、ハンガーが回転し、そのままハードボイルダーを再び下げると先程とは違う赤い後部ユニットへ接続される。
その姿は先ほどまでのバイクではなく、赤い巨大な翼を畳んだ飛行ユニットだ。

［カタパルト展開。ハードタービュラー射出準備］

前方へとカタパルトが伸びるとハードボイルダーが運ばれる。すると、ハードボイルダーの前輪が９０度回転し、折りたたまれていた翼“バリアブルウィング”を展開する。
黒と赤の小型戦闘機“ハードタービュラー”へと換装が完了する。

「んじゃ、行くぜ。なのは。俺がドーパントと接触する。フェイトと二人で雑魚の片づけは頼む」
「うん。了解！！フェイトちゃんもそろそろ着くみたい。私も出るよ」

通信が切られ、モニターが閉じられると、隣で並行飛行していた６課自慢のヘリの後部ハッチが開かれるとそこから、茶色い６課の制服姿のなのはが出てくる。

こちらの方を振り向き、軽く微笑むとそのまま飛び降りた…。

「レイジンングハート！！セーットアップ！！」

［スタンバイ！！レディ！！］

なのはが俺達で言う「変身」の決め台詞を言うと、赤い宝石の形をしたレイジングハートがピンクの光を発し、次の瞬間には、なのはの姿を戦闘時の服装“バリアジャケット”へと変える。

純白の衣装に、胸元の赤いリボンが特徴的なバリアジャケットだ。

サイドポニーだった髪型もいつの間にかツインテールに変わっている。

そう言えば…なのはは雑誌の表紙を飾る程メディアにも出てる有名な魔導士だったな。

ネットを徘徊してる時、あのバリアジャケット姿のコスプレ衣装が売られててビックリした…フェイトのもあったな。

『正宗君！！レイ君！！急いで！！』

「わ、わりい」

『何をしているんだい…変な妄想は帰ってからしてくれ』

「なっ…誰が変な妄想だ！！」

『正宗君！！』

「すんません…」

糞、変な事考えるもんじゃねえな。

「W！！ハードタービュラー出るぜ！！」

［テイクオフ！！］

ハードタービュラーが声を上げると俺はアクセルを噴かせる。

勢い良く、カタパルトから飛び出る俺達。

後部に搭載されたメインブースターから赤い魔力の光が吹きあがると一気に加速し、なのはと並行して飛行する。
念話に切り替える。空中では言葉が聞こえにくいからな。

『スターズ1、ライトニング1、Wエンゲージ』

通信が入る。この声はシャーリーか。ライトニング1って事は

『来たか。フェイト』
『正宗、なのは、待たせてごめん。こっちの空域は3人で抑える。新人達の方フォローお願い』
『了解』

男の声が聞こえる。グリフィスだな。

『頼むぜ？グリフィス。新人にはちと、危ない奴が混じってるからなぁ』
『了解です』

良い返事だ。
6課は優秀なスタッフが集まっていると聞いていたが、こういう後方支援にも優秀な奴が揃っていると思えば少しは気が楽になる。

『こうやって4人で同じ空は初めてだね。』
『うん。なのは。正宗。レイ』
『まぁ、そうだな。俺達自身空に出る事が珍しいからな』

何度か2人とは仕事が一緒になる事はあったが、こうして、4人揃う事は初めてだ。
まぁ、このまま並んで遊覧飛行ならよかったんだがな…

『そういう訳にもいかないみたいだよ。来たよ。皆！！』

レイの声が響くと俺達の後方から追いかける様に飛行型の全体が翼の形をしたガジェットドローンだ。

『全く。僕の発明品と同じ名前なんて許せないな…』

レイは不満そうだ。ガジェットドローンという名称に決まった時、レイがブチ切れてたのを思い出す。
こいつの発明した俺達の調査道具と同じ名称だからなぁ…。
だから、いつもこいつは必ずガジェットドローンをドローンまで付けて呼んでる。

［マスター。ドーパント反応です。ここより上空に反応あり］
『了解だ。んじゃ行ってくるぜ。二人とも。雑魚は任せた』

翼と前輪に搭載されたローターから赤い魔力の光を吹き出しながら垂直上昇を始める。

『うん。こっちは任せて』
『ドーパントは頼んだよ。正宗君。レイ君』
『『ああ、任せろ！！』』

あっという間に上昇速度を上げたハードタービュラーはなのは達から離れるとドーパントの許へと俺達を運んでいく。
一瞬で片づけてやる！！
そして、あのふざけた新人（バニット）の頭冷やしてやる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なんなんだあの人は…まるで全て見透かされてるみたいだった。
普通じゃない。あの目で見られてるとこちらの心の内が全て曝け出してしまいそうで恐ろしかった。
あれが、W。
ブーストでありながら執務官にまでなった存在。
俺達ブーストの立場は世間からも、組織内部からもあまり良い目に見られない。
当たり前だ。大半がドーパントとして、前科持ちなのだ。
誰がそんな奴信じられるか。
でもそんな中、執務官という所属部隊における事件および法務案件の統括担当を行う普通の人間でも、なることが難しいのに、ブーストという圧倒的な不利な経歴を持ちながらなる事に成功した。空条正宗という存在は俺達ブーストの中でも有名だ。
中には裏で汚い手を使い成りあがったという奴等もいるが、彼の担当する事件を見る限り、それはないというのが俺の中の考えだ。
はっきり言って…強い。
ブーストとしての格が違う。
それを思い知らされた。
それは今日初めて会ってもそう思い知らされた…。

「案外、臆病者なんだな。お前」

今日耳許で発せられた言葉が頭の中で反響(エコー)する。

「虚勢を張ってるのがバレバレなんだよ。チキンが」

糞っ…！！！
あの時俺は気がつけば右腕を振るっていた。
しまったと思った瞬間には遅かった。顔面一直線コースだ。直撃だ。

不意打ちというのもおまけについている。にも関わらずあの男は軽く首を動かすだけで避けやがった。
毎日拳を撃ち続けて鍛えた俺の拳をだ…。
本気では無かったとはいえ、俺の努力が無駄と言われているみたいで悔しかった。
だが、それ以上に怖かったのは…

（「あの人は俺が何でこんな態度をとってるか分かってる…。いや、それを言えば事情を知ってる隊長陣全員か。高町教導官にハラオウン執務官に八神部隊長もだ。だけど、これまで俺にどの様に触れて良いのか分からなかったから呼んだってところか…」）

多分俺の経歴を見たんだろうけど、あの人なら俺に会っただけで見抜かれた様な気がする。
俺をフォワード陣に完全に組み込もうとするんだろう。
チームとして成り立たないからだ。

（「でも、俺は仲間を求めちゃいけないんだ…。じゃないとまた…」）

「ちょっと、大丈夫？バニット」

オレンジの髪の同僚が俺の顔を覗っている。
その顔はどことなく心配そうだ。
不味い…考え事をしている間に、少し呼吸が荒くなっていたらしい…。
少し、身につけている6課の制服も汗ばんでいる。
糞っ…やっぱりあの空条（ヒト）正宗の所為だ。
嫌な事思い出しちまった。

「…大丈夫。そんな事より自分の事心配したら？新しいデバイスで初出動なんだ。リーダーが呆気なく撃沈されました。なんて、洒落にならない」

我ながら嫌味ったらしくそう言う。
最初の内は言い回しが上手くいかなかったが、今はもう慣れた。気がつけば嫌味がペラペラ出てくる様になってしまった。
案の定、ランスターは俺を睨みつけるとそのまま離れていった。

（「これでいい。後は最低限チームとして命令を守り行動すれば問題はない。ブーストになる時は、あいつ等を引離せばいい。それに今回は2人だけだ。問題ない。ドーパントも空に出てるんじゃ俺の役目もないだろうし」）

そう考えながら、俺は銀色のバックルを取りだすと腰に当てる。
ドライバーだ。
無骨な金属のバックルから同じ色のベルトが出てきて腰に固定される。
バックルの中央部分にはガイアメモリの挿入口が設けられているが、今はそれもガッチリと二つの歯車がかみ合う様な拘束具により、閉じられている。

「さあて…新人共！！隊長さん達が抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ！！準備はいいか！！」

ヘリの操縦席から通信が入ると後部ハッチが開かれる。
出撃の合図だ。

「「「「「はい！！！！」」」」」

俺以外の４人が大きな声を揃えて、ヴァイス陸曹に応える。
アホらしい…。
俺はそんな声を張り上げる暇があるなら、とっと出て仕事をする。
全員が深呼吸をしている中俺は一人、後部ハッチに足をかける

「スターズ５。バニット・ランクロス。出ます」
「えっ？ちょ…あんた」

ランスターの慌てる声が聞こえるが気にしない。
こんな降下から始まる任務は何度もしてる。

「ドライバ起動！！」

すると、ドライバにセットされた歯車が動きだし、俺の体を一瞬オレンジの魔法陣が包み込むと俺の体にバリアジャケットを纏わせる。
その見た目は、白いロングコートに手足に銀色の装甲が纏わりついた姿だ。
少しハラオウン執務官の姿に似ているかもしれない。
デバイスはドライバのみ…。
十分だ。ブーストになった人間はドライバを装着しているだけでも、軽くメモリの力を行使できる。
俺の場合、ゼロ距離からの直射型魔法に、魔力付与による打撃だな…。
正直ナカジマと被ってる…まぁ俺の方が小回りは効くし、周りに被害は出さないで済むが…。
なんで俺をスターズに入れたのか分からない…。
何か考えがあるのだろうか？

「ちょっと！！バニット！！降下の順番は決めてたでしょ！！」

遅れて飛んできたランスターとナカジマだ。
恐らく反対方向にはライトニングの二人が居る筈だ。
今回の任務は互いに車両の一番前と後ろから順に内部に侵入したガジェットを撃破しつつ、7両目にある重要貨物室にあるレリックの保護をする。という内容だ。
先程、リィン曹長がそう言っていた。
多分、俺が単独行動を起こすとでも思ってるんだろう。
バリアジャケット姿になったティアナが今にも殴りかかってきそうな勢いでこちらに歩いてくる。
しかし、この姿は…

『デザインと性能は各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちょっと癖はありますが、高性能です！！』

そう、白いバリアジャケットは、それぞれ改造はされてはいるが、高町教導官の纏うバリアジャケットと似ている。
ここからでは見えないが、恐らくライトニングもハラオウン執務官と似たようなバリアジャケットを着ているのだろう。
ナカジマが自身のバリアジャケットを見ながら喜んでいる。
こいつは高町教導官に憧れているらしいから尚嬉しいのだろう。

（「足元に気配…来るか」）

小さくて分かりにくいが微かに何かが動く気配がする。
恐らくは…

「スバル！！感激は後！！」

ランスターも気づいたみたいだ…。
目の前の車両の天井がベコベコとへこむとそのまま青い光が巨大な

穴を開けた。

［ドライブ！！］

［イグニッション！！］

ランスターとナカジマのデバイスが音声を発しながら戦闘態勢を取る。

ナカジマはローラーを回転させながら突っ込んでいく。

それを援護する形でランスターは銃を構えると、そのまま

［ヴァリアブルバレット］

「シュート！！」

オレンジの弾丸を二発撃つと開いた穴から出てきたガジェットを撃破する。

ＡＭＦが効いているはずなんだがそれも物ともしていない…。

強くなってる…。

スバルはスバルで隣の車両から盛大に天井をぶち抜き再び躍り出た。

次の瞬間には青い魔法で出来た道の上に着地すると続けて地面に着地する。

でも、あれ、どう考えても、デバイスが出した魔法だ。

凄い性能だな…。

「ちょっとバニット！！あんたも動きなさい！！」

「分かってる。内部からお前と進む。それで良いんだろ？」

「え、ええ。」

俺が素直に言う事聞いた事から驚いている…。

まぁ…仕方ないけど。

さて、早く終えよう。

正直帰ってあの一ムカつく野郎（空条執務官）をぶちのめさなきゃ気がすまない…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どうした！？W！！この程度か？ハハッこりゃあ聞いてた程じゃねえな！！」

予想外に苦戦しちまってる…。くそ。なんなんだ！！あいつは！！でかい図体してる癖にやたら小回りが利きやがる…。ハードタービュラーで一気に近づきサイクロンで強化した拳で殴ろうとしても一瞬で避けられるとそのまま巨大な爪で迎撃される…！！！

『鷹の翼と上半身に獅子の下半身。恐らく奴はグリフォンメモリの使い手だ』

「グリフォン？道理であの馬鹿みたいにデカイ爪な訳だ…」

二足歩行の化け物は確かに言われてみればグリフォンの特徴がある。特に両腕の爪は人間ではあり得ない大きさだ。

俺達の体には既にいくつもの傷がいたる所についている。軽く引っかかれただけでこれだ。…まともに喰らったら…想像したくねえな。昔読んだ本によれば、牛やら馬やらを纏めて何頭も掴んだ事もあるらしいし…。

『接近戦は不利だろう。ここはトリガーで』

「そうだな。」

俺は、ジョーカーメモリをレフトスロットから引き抜くと青いガイアメモリを取りだし、スイッチを押し、覚醒させる。

［トリガー！！］

トリガーメモリ。
“銃撃手の記憶”を内包した俺の持つ、“ジョーカー”、“メタル”に続く3つ目のメモリだ。
射撃攻撃に特化したメモリで射撃技術だけでなく、爆発力のある魔法の記憶も内包している為、扱い所が難しいメモリだが、今はこいつを使う場面だろう。
俺は素早くレフトスロットにトリガーメモリを入れ押し込み、スロットを展開する。

［サイクロン！！トリガー！！］

力強い音声と共に俺達の体の左半身が黒から青へと変わる。
そして左胸のマグネホルスターと呼ばれる生体磁気ポイントに固定されていた青い大型の可変式銃型デバイス“トリガーマグナム”を取りだすとそのまま狙いを目の前のグリフォンに向けるとトリガーを引く。

「くらえ！！ソニックバレット！！」

風に変換された魔力が魔力弾となって次々と、グリフォンドーパントに飛んでいく。
サイクロントリガーはサイクロンの力で弾速が他のトリガーの形態（フォーム）よりも速くなる。その分威力は減るが、それでも基から馬鹿みたいに威力の高いメモリだ。
問題はない。数発でも奴の翼にあたればそれで奴は落ちる筈だ。
大抵翼を持つ生き物の武器は翼であり弱点も翼だからな…。

「はっ…！！！やってみろよ！！」
「「なっ！？」」
グリフォンドーパントは自身の翼を前へ展開するとその場で静止する。
自分から当たるだと！？しかも翼で受け止めるなんて！！自殺行為だ！！
そして、撃ち出された弾丸が全てグリフォンの翼へと命中すると爆炎を起こす。
煙で奴の全身が覆われる。
「何考えてたんだ？あいつ」
『いや…まだ終わってない！！』
「何！？」
煙の中から巨大な翼が見えると次の瞬間には煙全て吹き飛ばすとそこには無傷のグリフォンドーパントが現れやがった！？
どうなってんだ！？
「この程度か？そんな攻撃じゃ俺の翼に傷一つ付けられねえよ！！ハッハハハハhа！！」
二枚の翼が力強く開かれると勢いをつけてこちらに突っ込んできた！！
俺は、体を傾け、緊急回避を行おうとするが、
［マスター。私が動きます。マスターは戦いに集中を！！］
ハードタービュラーがそう言うと俺の動きよりも速く回避運動を行う。

先程まで俺達がいた所を強烈な風を起こしながら通り過ぎるグリフォンドーパント。
俺の反応だと、今頃あの爪の餌食になってた可能性が高い。

「わりい。助かった」
「いいえ。それが私の役目ですから」
『つけて正解だったろう？』

自慢げにそう言うレイはなんというか、こういう所は餓鬼みたいで可愛いもんだ。

「はいはい。さて…どうするか」

奴は下で翼で全身にブレーキをかけるとそのまま羽ばたかせ急上昇し上からこちらを狙ってくる。

『あの翼もおそらく普通の翼じゃないんだろう。サイクロンで威力が下がっているとはいえ、あれだけの弾丸を食らって無傷だなんてありえない』
「それは分かるが…糞！！又当て逃げ戦法かよ！？」

上空へ上がったグリフォンドーパントは再び急降下による爪による攻撃を行ってくる。
それを何とかハードタービュラーが察知して避けてくれるがこれではジリ貧だ。

『…当て逃げ。ヒットアンドアウェイ。そして先程の接近戦を挑んだ時の奴の反応…。そうかそういう事か。分かったよ。正宗。奴の弱点が』
「何だよ！？弱点って！！うわっ！！また来やがる！！」

上空に急上昇するとこちらに狙いを定めるグリフォンドーパント。
「ハハッ！！大人しく死にな！！」
「おい！！相棒！！」
俺の呼びかけにレイは無言で右腕を動かすとライトスロットからサイクロンメモリを抜きとり、黄色いメモリを取りだすとスイッチを押す。
［ルナ！！］
音声を発し、ルナメモリが覚醒する。
レイが持つ“サイクロン”“ヒート”に続く3つ目の“幻想の記憶”が内包されたメモリだ。
その特徴は“謎の力”この言葉が一番相応しい。
超常的な力を司り、肉体を変化させる、それは各フォームのデバイスにも適用される。
レイはライトスロットへルナメモリを差し込むと、ドライバーを展開する。
［ルナ！！トリガー！！］
右半身が黄色に変わる。
ルナトリガー。
トリガー形態ではもっとも安定する形態だ。
理由はは魔力弾が操り易くなるからだ。
ルナの力により、強力な魔力弾が安定して相手に当たる様になる。
単なる誘導弾の様に思うが、実質は全く別の魔法だ。
このルナの魔力弾は誘導弾と違い、使用者の制御を必要とせず、ロ

ックした相手を魔力弾が自動的に追尾してくれるというものだ。
その分消費する魔力は結構大きいのが傷だが…。
レイがメモリをルナに変えた意図は、あの馬鹿みたいなスピードの持ち主に攻撃を当てる為だろう。
それは俺も考えたが、それも駄目だ。
当てれたとしても…あの驚異的な翼で塞がれるのが目に見えている。
それだけじゃない恐らくあの爪も翼同様硬いだろう…。
速さと防御を両立させたある意味化け物だ…。

「当ててもあいつはトリガーの威力でも防ぐんだぞ？意味ねえだろ？」
『思い出して…正宗。奴は攻撃を防ぐ際、必ずこちらの攻撃が一部位に当たった場合だ』
「一部…？そう言うことか！？」

レイの考えは分かった。
なら後はそれを俺が実行するだけだ！！
トリガーメモリを抜きとるとトリガーマグナムのマキシマムスロットへ装填する。

［トリガー！！マキシマムドライブ！！］

音声が発せられると同時に先程までは弾道を安定させる役割を持っていた銃口の下に装いていたホールディンググリップのグリップバレルが銃口を覆い隠す様に上へ上がるとトリガーマグナムの真の姿“マキシマムモード”へと変わる。

「無駄だっての！！俺の翼は鋼の翼だ！！そんな豆鉄砲じゃビクともしねえ！！」

ったく、これでもこいつの威力はなのはがカードリッジシステムを使用して放つアクセルシューターよりも威力はある筈なんだがな…。ここまで強いドーパントは珍しいぞ…。何で管理局のデータベースにないのかが気になる。これだけの実力があれば、有名にならない訳がないんだ。

最近パッと出のドーパントという訳でもなさそうだ。

じゃなければ、ここまで空で自由に動ける訳がない。先天的に才能を持っていると考えられなくもないが、それでもこの動きは異常だ。

急上昇からの急降下。

ドーパントとはいえ体にかかる負担は相当の筈。

それを平然とやってのけるだけの肉体を持っているという事になる。

ドーパント化する際、肉体が変化するが、普段から鍛えている肉体とそうでない肉体のドーパントではやはりその力の差は如実に現れる。

それは人間もドーパントも変わらないという事だ。

そして、その飛行に適した肉体を作るというのは簡単じゃない。

専門的な知識も必要になるだろう…。

つまり…考えられるのは正体が飛行技能を学んだ経験のある魔導士の可能性が高い。

（「まぁ…本人の口から後で聞かせてもらうさ」）

「いくぜ！！レイ！！」

『ああ』

俺達はトリガーマグナムを両手で握ると狙いを上空にいるグリフォンドーパントへと向ける。

「無駄無駄無駄…！！！この翼を貫くなんざ無理なんだよ！！」

グリフォンドーパントは急降下を止めるとそのまま静止し、翼を前

方へ展開する。
…予測済みだ。
俺達は青のベルカ式の魔法陣を足元のハードタービュラーを中心に展開する。同時に銃口の前に黄色い魔法陣が展開される。
そして、同時に黄色い魔力弾が１０個。円状に回転しながら銃口の前に現れる。

「「トリガー！！バースト！！」」

トリガーを引くと同時に魔力弾が2発、弧を描きながらグリフォンドーパント目掛けて飛んでいく。

「無駄だ！！そんな弾丸効かねえよ！！」
「そうだろうな！！“今の”お前の翼にはな！！」

魔力弾が、展開された翼へ当たると爆炎を噴きあがらせる。

「効かねえよ！！」

自慢げに翼を展開するとこちらを嘲笑しながら両腕を振り上げる。
どうだ！！Wとでも言われている様だ。
だが…

「ならこれでどうだ？バースト！！」

再びトリガーを引くと2発の魔力弾が撃ち出される。
グリフォンドーパントは再び翼を展開する。
が、今回の弾丸は一発がこれなで同様翼へともう一方は、奴の背後に回る。
それに気付いた相手は咄嗟に翼の一方を後方に展開するが

「甘い！！」

前方の先程翼が守っていた胸元がガラ空きになる。
２発が同時に翼と胸に当たると爆発を起こす。

「ガァアアア…！！！」

初めて奴が、悲鳴を上げる。
煙が晴れると、そこには翼の一部が焼きただれたグリフォンドーパントがいた。
対して、胸元は無傷だ。

「鋼の翼なんかじゃねえ…。お前が使ってたのは硬化魔法だ」

硬化魔法は、肉体の一部を一時的に硬くする事で物理的に肉体の防御力を上げる魔法だ。
この魔法は全体を強化できる訳ではない。
悪まで体の一部だ。腕や足そして…翼といったな。
おかしいと思ったんだ。
トリガーの攻撃に耐えるだけの装甲を持ちながら、あれだけのスピードが出せる訳がないんだ。
この二つを同時に高レベルで再現するのは無理だ。
それはどんな魔導士にも当てはまる。
もちろん、ブーストにもドーパントにもだ。
奴は避けれない攻撃の時のみ動きを止めていた。
当然だ。肉体の一部を硬化させる魔法を使えば、あれだけのスピードが再現出来なくなる。
そうすれば、この仕掛(からくり)けに気付かれる。
翼の一部が焼かれ、その体がふらつき始める。

「クソっ…この俺が！！」
「終わりだ。さぅきの攻撃を胸元で受け止めていれば、まだその翼（スピード）で勝負が出来たかもしれねえがな…。投降しろ。これ以上やる意味はない」

こちらには、６発の魔力弾が同時に発射出来る準備がある。
翼を損傷した今こいつに先程までのスピードは出せないだろう。

「糞っ！！俺はチキンなんかじゃねえ！！」

さっきの俺の言葉に激怒する様に怒鳴り散らすグリフォンドーパントは自棄になった様に翼を前へ展開しつつ、こちらに突っ込んでくる。

『地雷踏んだね…。完全に頭に血が昇ってる…』
「仕方ねえ…。メモリブレイクだ。行くぞ！！レイ！！」
『了解』

翼の内側に爪を隠してるのは目に見えてる。
俺達は冷静にグリップ部分を握ると再び魔法陣を展開させる。

「「トリガー！！フルバースト！！」」

残った６発の魔力弾が同時にグリフォンドーパントへ飛んでいくと全てが全く同一の瞬間（タイミング）で奴の体へと命中する。
同時に魔力弾が炸裂し爆発が起きると奴の体全身が炎と煙で包まれ、辺りに羽根を身き散らした。

「ガァァァァあああ…！！！」

その中から叫び声が聞こえると同時にこちらに向かって太陽の光が反射しながら何かが飛来する。
それを俺達は掴む。
白い煙を噴き上げながら機能を停止したガイアメモリだ。
そして、同時にその爆煙の中から、一人の人間が落下していく。

「レイ」
『ああ。分かってる』

右腕をその人間に向けて伸ばす。
すると、そのまま右腕が伸びていくとその人間の脚を掴む。
ルナメモリの力だ。
俺達の肉体を変幻自在に伸び縮みできるのさ。
そのまま、再び腕を縮めると先程までグリフォンドーパントとして戦っていた相手の素顔を確認する。

「迷惑かけんなよな…。若いな」

男だ。それなりに顔も整っている。
気絶している。
当然といえば、当然だが…。
あれだけの衝撃を受けたんだ。

「こちら、W。ドーパント逮捕。メモリも回収した」

通信を入れる。
報告ってやつだ。

『お疲れ様。正宗君』

この声ははやてだ。
てっきり、グリフィスが出ると思っていたが、もう6課に到着していた様だ。

「疲れる程じゃねえよ。フォーワードメンバーは？どうだ？」

今はそれが気になって仕方無い。
戦いの間に空域を少しはなれてしまった様だ。
下にはリニアレールのレールだけしか見えない。
バニットは下手な行動してないだろうな

「大丈夫や。バニットはちゃんと働いてくれとるよ」

何だか声が弾んでいる。
嬉しそうだな。

『何かあったのかい？』

レイがおれの代わりのそう聞いた。

『分かるか？キャロが竜召喚に成功したんよ。エリオとのコンビネーションも成功したし、車両のコントロールも取り戻した。レリックも回収出来た。初出撃にしては、上々や』

本当に嬉しそうだ。
まぁ…それもそうか。初めての自分の部隊での出撃だ。
しかし、バニットがね。
これで…少しは仲間を頼る様になれば良いんだが…。

『…っ！！何！？この反応。…ドーパント！？』

通信が急に慌ただしくなる。
周りのロングアーチスタッフのざわめきが通信越しでも聞こえる。

「何だ！？何があった！！」
『ごめん！！正宗君！！至急リニアレール内部に行ってくれる！？
中にもう一人ドーパントが隠れてたみたいや！！今リィンとティアナとスバルそれとバニットが重要貨物室内部で戦闘中。エリオとキャロも向かっとる。隊長二人も向かっとる。三人が苦戦しとる。お願い！！』
「っ了解！！」

通信を切る。
そして拘束魔法“フープバインド”を右手で掴んでいた男にかける。
黄色い縄状に編まれた魔力が男を拘束する。
それをハードタービュラーに上から同じ様にバインドでくくり付ける

「聞いてたな？レイ」
『ああ。分かってる。ハードタービュラー。このまま彼をリボルギャリーまで運んでくれるかい？』

その答えをライトを点滅させながら、ハードタービュラーが答える。

「了解しました。お急ぎください。マスター」
「分かってる。レイ！！メモリチェンジだ！！」
『了解！！』

俺達は二本のメモリを抜きとると、ジョーカーメモリとサイクロンメモリ二本を同時に挿入する。

［サイクロン！！ジョーカー！！］

体が緑と黒に変わると銀色のマフラーが現れる。

「糞っ！！飛ぶのは苦手なんだけどな！！」

『言ってる場合じゃないよ。』

「わーってる！！」

俺達はハードタービュラーから飛び降りると同時にマフラーをなびかせながら飛行する。

「変な気起こすんじゃねえぞ！！バニット！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カッ…ハッ！！！」

ナカジマが壁に叩きつけられた。

そのまま、前に倒れ込む様に倒れた。

不味い…。

軽い脳震盪を起こしている可能性がある。

「「スバル！！」」

リィン曹長とランスターがナカジマへ駆け寄る。

俺は、二人を守る様そのまま左手を前へ構え、右腕を引くとオレンジ色の魔法陣が展開され、右拳がオレンジに発光する。

「Dファング！！」

俺は目の前の赤いドーパントへと強化した拳を叩きこむ。
コンクリートでさえ簡単に砕く拳だ！！
これが当たれば少しは隙が！！

「甘い…！！！」

俺の拳を横へステップし避けるとそのまま俺の腹部に赤いミドルキックが叩きつけられる。

「がっ…！！！」

腹部に強烈な激痛が走るとそのまま、胃液が逆流して少しだけ口から吐き出される。
危うく…朝食ったハムエッグが逆流（リバース）するところだった。
そのまま、俺は膝をつきかけるが、何とか踏ん張りを効かせた。
…糞っ！！視界が霞む…。一劇でこれかよ。
咄嗟にバリア張ってなかったらヤバかった。

「ほう。立つか。あの時よりは成長したか？」

そう言うと奴はバックステップで距離を取る。
あの時？何を言ってる…？

「忘れたか？俺を？」

忘れた？ゆっくりと視線を奴へと向ける。
全身を覆う赤い鎧、腹部には赤いドライバ、背中に背負われた棍棒。
そして額に生えた日本角と口元には牙の様に描かれたペイント。

「ガッ…！！？」

頭に激痛が走る…。急いで頭を押さえる。
忘れもしねえ…。
そうだ。こいつは…こいつは！！！

「バニット！？クロスミラージュ！！カードリッジロード！！」
「エクスプロージョン！！」
「私が動きを止めます！！」

ランスターのデバイスが薬莢が排出されると、ランスターの足元にオレンジ色のミッド式の魔法陣が展開される。
隣で浮遊していたリィン曹長も銀色のベルカ式の魔法陣を展開する。

「凍てつく足枷（フリーレンフェッセルン）！！」
「クロスファイアー！！シュート！！」
「ほう…」

ドーパントの体が徐々に凍りつくと全身が凍り浸けなる。
次の瞬間にはランスターが１０発近くの魔力スフィアを形成するとその周りに浮遊する。
そして彼女のかけ声と共に全てのスフィアが目の前のドーパントへと飛んでいく。
全弾がＨＩＴする。
…駄目だ。

「やった？」
「いえ…まだです！！」
「！！逃げろ！！二人とも！！」
「えっ…」

「キャアアアア！！！」

俺の声に反応しきれず次の瞬間には煙の中から、巨大な赤い光の腕が飛び出るとリィン曹長を軽く弾くとそのままランスターを掴んだ。

糞っ…あの技は。

間違いない…。こいつは。やっぱり！！！

「思いだしたか？Dボーイ。そのドライバは管理局制だな。ブーストになったか？ハハっ！！これは良い。そこまでして俺を殺したかったか？」

体に纏わりつく氷を熱で溶かしながらこちらに歩み寄ってくる。

白い湯気が上がりながら出てくるその姿はまるで、赤い鬼！！

「このっ！！離しなさいよ！！」

「随分威勢の良いお姫さまだな？なぁDボーイ。似ているなぁ。この状況（シチュエーション）？お前がガイアメモリを手に入れたあの時と」

「えっ…？」

ランスターが、困惑の表情を浮かべてる。

糞…またか？

また、俺は誰も守れず！！

「あの時もお前の仲間をこうして！！」

「クッ…！！！」

拳に力が入ると握られているランスターは苦しみの声を上げる…。

「止めろ！！」

「なら…変われ。貴様らの言うブーストとやらにだ。あれからどれ

だけ成長したか確かめてやるよ」
そう奴は言うと、込める力を増していく
「かっ…！！！」
ランスターの目が見開かれ、口を大きく開かれる。端から唾液が、零れ始める。
まずい。このままだと…！！！
でも俺は…あの力を…制御出来ない…！！！
「良いのか？今のお前は力があるんだろう？ガイアメモリがな。あの時とは違うだろう？
見せろ！！お前の一殲滅（D）の力を！！」
やるしかない…。
だが、ブーストになるには、拘束具が外れなければなれない。
そしてその認証を行えるのは今、八神部隊長のみだ。
でも、下手すれば、俺のした事で部隊長の責任能力が問われる可能性がある。
それだけは避けなけないと…
「分かった…。使う。だから！！！そいつを放せ！！！」
俺は懐からガイアメモリを取りだす。
オレンジ色のガイアメモリだ。
そして、ドライバの拘束具である、歯車を、掴むと力任せに引っ張る。
壊す為だ。

「クッ…！！！」

それと同時に俺の体全身に電流が流れ込む。
拘束具を強制的に外そうとすると、自然と流れる自動防衛機能だ。
力を込める度に、指から煙が上がると同時に血が飛び出る。

「ガァあああああああ！！！」

ベキッ…！！！
金属の歯車が、ヒシャケルとそのまま、固定していた軸から折れると電流の流れが止まる。

「ハァハァハァ…」
「ハハハハハ。良いだろう。お前のその根性に敬意を称し、このお姫様は渡してやろう」

そう言うと赤鬼はこちらに向かって拳を払うとランスターをこちらへ投げつけた。
俺はそれを、何とか両手で受けとめるが、女一人とはいえ、今の俺にはとてもじゃないがまともに受けとめきれずに膝をついてしまう。

「カハッ…ハァハァ。…バニット？」
「…っ大丈夫？」
「あんまり…でも逃げる訳にも…いかないでしょ？」

なんて奴だよ…。まだ戦意は無くなってはいないみたいだ。
タフだとは思ってたけどここまで…。

「リィン曹長とナカジマを連れて、逃げろ。ここは俺が食いとめる」
「ハァ…！？ふざけんじゃないわよ！！ここまでされて黙って下が

れる訳ないでしょ！！それにあんたを一人置いていける訳ない！？」
「だからこそだ！！奴は俺を指名してる。俺がブーストになるのを要求してるんだ。それに俺のメモリはお前達を巻き込む可能性が高い」
「巻き込む？」

怪訝な表情を浮かべるランスター。
ブーストになったからといって皆が皆その力を使いこなせる訳ではない。
中には俺みたいに上手く制御できない人間もいる。
特に俺の力は…

「頼む…。二人を連れて逃げてくれ。正直、ブースト化したらお前達を襲ってしまうかもしれない…。お前一人なら対抗して逃げるなり、戦うなりできるかもしれないが。気絶してるあの二人を連れてだと絶対無理だ。だから…」
「それは…チームの一員として私達を心配しての言葉？」

試すかの様に真っ直ぐ見詰めてくる目だ。
まずい…こいつにも見透かされた気がした…。
俺は必ずこいつ等を危険に合わせてしまう。それが嫌で今日まで、スタンドプレイを行ったり、チームには加わらない様にした。
否定しろ。
そう頭の中ではそう叫んでいた。
だが…俺の口は自然と

「…そうだ」

そう答えてしまっていた。
そう口にしていた。

「そう…。だったら、尚の事逃げるなんて出来ないわ。全員で戦う。いい加減起きなさい！！スバル！！」

そう、大きく声を張り上げるランスター。
それに、反応する様にナカジマの瞼がゆっくりと開かれた。

「っ…ティア？」

ゆらゆらと体をふらつかせながら起き上らせる。
まじ？
ランスターの気合い入魂ってヤツ…？

「うわ！！バニット！！どうしたの？その手！！」

俺の手の事を言ってるのか？
さっきの電流が流れた所為で火傷して血が出てるけど。
さっきまで自分だって倒れていたのに、先に俺の心配…？

「そういう奴よ。全く…変な所で似てるわね。あんた達」
「「？？？」」

俺とナカジマが似てる？
どういうことだ。

「作戦会議はもう良いか？」

俺達以外の声がその答えを聞こうとする俺達を遮る。
胸の前で両腕を組んだ赤鬼だ。

「良いから逃げろ！！リィン曹長まだ気絶してるだろうが！！」
ランスターの胸元に抱きかかえられているリィン曹長は未だ目を覚ましていない。
それに全員でかかるとしても、“俺の力”が皆を危険にしてしまう…！！！

「…頼む。ランスター、ナカジマ。逃げてくれ…。じゃないと…」
「…巻き込んでしまう？ふざけないで！！良い？さっきあんた自分で私達の事仲間っていったのよ」
「そうなの？っていうか私そんなっ重要な場面で気絶してたの！？」
「うっさい！！スバル！！だから…一緒に戦うわよ」
「リィン曹長はどうすんだよ！？」
「っ…！！それは」
「頼む…。逃げてくれ。俺は、俺は一人じゃないと“あの力”を使えないんだ…」

俺の頼みに苦虫を噛んだかの様に顔をしかめさせるランスター。
そんな中ナカジマが一歩前へ踏みよると俺の目を見ながら問いかけてきた。

「ねえ。バニット。別に死ぬつもりはないんだよね？」
「あ、ああ」
「わかった。逃げようティア」

へ？こいつ。今なんて？

「な、何言ってんの！？スバル！！あんたこいつ残して行くっていうの！？」

「大丈夫だよ。バニットは死ぬ気なんてないって言ってるし」
「そんな嘘に決まってるでしょうが！！あんな化け物一人でどうやって戦うのよ！！」
そう叫びながら赤鬼を指差すと、スバルを睨みつける。
赤鬼はそれに少々戸惑っている。
「大丈夫だよ。バニット目逸らさなかったもん。嘘じゃないよ。でも条件が一つ。帰ったら何でわたし達を避けてたのかちゃんと喋って。良い？バニット」
何かいつもと逆だな。
いつもはナカジマが熱くなってランスターが治めるって感じなんだが…。
「…わかった」
今はそう答えるしかなさそうだ。
じゃないと、ナカジマまで動かないと言い出しかねない…。
…俺に嘘は無理か。
アイツの言葉を思い出しちまった。
「ちょ！！スバル！！ってきゃあああ！！」
ナカジマは抗議をするランスターを抱きかかえるとそのまま、入ってきた入口に向かって、ローラーで駈けだし、俺の横を凄い風を起こしながらその場から離脱した。
「信じてるから」

すれ違った瞬間そう俺の耳には聞こえた。
ナカジマの声だ。
あれだけ、迷惑かけたのに、そんな俺を信じる？
馬鹿だろ？馬鹿だけど…なんでだろな？
嬉しいや。
軽く口元が笑っちまうのが自分でも分かる。
ああ…やっぱ俺には無理なのかもしれない。自分を偽るのは。帰ったら皆に謝るか。
その上で距離をとろう。

「やっと終わったか？」

やれやれという様に溜息をつく赤鬼。
襲おうと思えば襲えた筈だ、だが、奴はそうしなかった。
確かに常に奴に俺は気を向けていたが…それでも潰そうと思えば潰せた筈だ。
なんでだ？

「早いとこ、変われ。折角心おきなく戦える様に待ってやったんだ。」

「そういう事かよ」

こいつは俺と何でかしらないが戦いたがっている。
単なる戦闘狂（バトルジャンキー）かと思ったが、それでは説明のつかない所もいくつかある。
何か目的があるのかもしれない。

［ドラグーン！！］

メモリのスイッチを押し覚醒させる。

Dの文字を象る龍の紋章。
「殲滅の龍の記憶」を内包したガイアメモリだ。

「変身！！」

そう叫ぶと俺は無理やりこじ開けたメモリの挿入口にメモリを挿しこむ。
すると、オレンジの魔法陣が展開されると俺の全身を膨大な魔力が包み込んでいく！

「ほう…」

目も前の赤鬼が驚きの声を上げる。
その声はどことなく嬉しそうだ。
関係ない…！！倒すだけだ！！
そして…全身を覆う魔力はオレンジの鎧となって、俺の体を包み込む。
龍を象った様な全身鎧だ。
肘から伸びた、刃がオレンジ色に輝きはじめる。

「変身完了」

そう呟くと、俺の周りに軽く魔力の光が舞いあがる。
全身に力が漲ると体の部分部分に具現化した宝玉が輝き始めるとそこを中心にその部位に力が漲る。
このメモリの力の一つは圧倒的な身体能力強化だ。
正直あの時この状態なら、空条執務官も避けれなかっただろう。

「ははははっはは！！！！良いぞ！！強くなっている！！どこまで至ったか！！確かめてやろう！！」

「うるさい！！お前を…倒す！！」
俺は左腕を前へ送り、右手を引いて構える。
すると、両腕と両肘、の宝玉が輝く…！！！！
そして、そのまま呟いた。
「さぁ…終わりへのカウントダウンのはじまりだ！！」

次回予告

何とかブースト化して戦う俺、バニット・ランクロス。
強化した肉体で、赤鬼のドーパントと拳を撃ちあう。
だが。分かる。
こいつは…力を抜いてる…手加減されてる！！！
奴の言葉通り俺は試されているかのようだ。
力が欲しい…そう思った。その時だ

［我を受け入れろ…！！！］

何かが俺の中で囁いた…。
同じだ。あの時と…でも俺は！！俺は！！

次回、魔法少女リリカルなのはW
第５話「殲滅のＤ／制御出来ない力」
やるしかないのか…！？

4話　星と雷とw（後書き）

次回に続く…。
こんだけ長くして続くって…俺どんだけだよ。
しかもタイトルにある雷、ライトニングの活躍は都合上カット。
アニメ本編と同じ内容だと思ってください。
しんどかった訳じゃないんです！！（言い訳）

バニットのメモリ
「ドラグーンメモリ」”殲滅の龍”て我ながら恥ずかしいメモリだ…。
ブースト形態のイメージはオレンジ色のス○ロボのソ○ルゲインみたいなのを思い浮かべていただけたらと…。
分かりにくくてすいません…。
うーん。
近い内に文章を書きなおすかもしれません…。

5話　殲滅のD／制御出来ない力１－１（前書き）

１ヵ月ぶり更新。
ほんとすいません！
しかも、何か久しぶりに書いた所為か文章が…。
しかも今回前後篇に…。
何か色々すいません…。

5話　殲滅のD／制御出来ない力１－１

「「ストームキック！」」

俺達は風を纏った蹴りを振るうと、纏めて2体の空戦ガジェットを破壊する。

爆炎と共に、煙が上がり、空中で爆散するが、次の瞬間には別のガジェットが視界に入ってくる。

さっきから、この繰り返しだ！

どうなってんだ！？

『キリが無いね…』

「ぼやいてる暇があったら手動かせ！」

レイが溜息をつきながらぼやくがそんな事分かってんだよ。

糞っ！何が起こってんだ。

『正宗！』

俺の頭に、フェイトの声が響く。

それに気づいて振り向くと、今にも俺に突撃しようとしてきたガジェットが視界に入った。

しかし、すぐさまフェイトが、魔力刃を飛ばして、他にガジェット共々破壊していく。

さすがは、空戦Sランク。俺らと違ってスムーズだ。

『助かった、フェイト。しかし、どうなってんだ！！少し空域を離れただけで、何でこんな事になってやがる！？』

『ごめん…。気付けなかった私のミスだ。雲の上で隠れてたみたい。

『
フェイトは悔しそうに唇を噛んでいる。
気持ちは分かるが…。
雲の上まで、サーチャーを飛ばしていなかったか…。
仕方ない事とはいえ、ロングアーチもまだまだ、注意すべき点はあるって事か。
後で、グリフィス達にも言っておかねえと。

『悔やんでる暇はねえ。やる事やらねえと。フォワード部隊は？』

そう聞きなおそうとした時だ。
下から何かこっちに向かって上昇してくきた。
巨大な白い…ドラゴン！？
なんで、あんなモンがここにいるんだ！？

『正宗さん！レイさん！』
『フェイトさん！』

念話で俺たちにエリオとキャロが語りかけてくる。
良く見ればその背中には、新しいバリアジャケットを身に纏ったエリオとキャロがいた。
…もしかして

『竜召喚に成功したってはやてが言ってたね。あの竜…彼女の傍らにいた』
「フリードか！？あれ！！」

思わず口を開いて叫んでしまった。
いや、だって…いつもキャロの傍らにいたあの小さい竜が

「きゅる～」

とか言ってたチビすけが…

「グオォ…」

変わり過ぎだろう…。
竜召喚てあんな風にデカくなるのか？
召喚魔法凄いな…。

『2人共！無事だった！？』

フェイトは飛び込む様に、フリードの傍らに飛んでいく。
今にも、抱きつきそうだ。
まぁ…心配だったのは分かるがな。
エリオがそれを手で制して止めている。

『行かなくていいのかい？』
『…行くよ』

さすがに俺も心配だった。
ゆっくりと下降していく。
フェイトみたいに上手く飛べないんだ。
仕方ない…。

「無事だったか？お前ら」
「あっ…はい。正宗さんとレイさんですよね？」
「？当たり前だろ」

俺の姿を見たエリオはそんな事を口走った。
何を言って…。

「いえ…その姿を見るのは、初めてですから」

キャロが少しばかり、躊躇いながらそう言った。
…そういえば。

『僕達のこの姿は、見せてなかっただろう。まだ』

そういや、そうだ。
今の俺は、ブースト形態。
全身が、異形に変わっている為。
あながち、引かれるのも分からなくはないが…。

「いえ、その格好良いですよ？」
「うん、うん」

2人して、必死で首をブンブン縦に動かす。
いや…変に気ぃ遣われる方がいたたまれんのだが…。

「いや…変な気の遣いは良い。それより、お前等は一旦引け」
「うん。2人共ここは危険だから。」
「でも…」
「うん…」

2人は下を見ると未だ、戦いの舞台のリニアがある。
あそこには、まだスターズのフォワードメンバーが。
その上、ドーパントまでいるらしい…。
心配なんだろう。こつらにしてみれば初めて出来た仲間だ。

「大丈夫だ」
「「えっ？」」
俺は両手をエリオとキャロの頭の上に置くとそのまま撫でた。
一瞬ビクッと、体を震わす2人。
分かってる…。
恐いんだろう。一般的に見ればブーストもドーパントも呼称が変わっただけだ。
それが、子供となれば尚の事。
この姿になった当初は力の加減が分からず、石ころでさえ、軽く握っただけで砕けた。
俺自身恐怖を感じた位だ。
でも…それでも、そんな力を身に纏いながら、子供を、安心させてくれた人を俺は知っている。
その時も…

「大丈夫だ」
「あっ…」
「ん…」
「正宗…」

俺はもう一度そう言うと出来るだけ優しく撫でた。
エリオとキャロはその後一瞬呆けるとそのまま体から力が抜ける様に、落ち着き始めた。
フェイトはそんな俺達を何も言わずに見守ってくれていた。
どことなく視線が暖かいと感じたのは気のせいじゃないか…。
今のフェイトは多分完全に母親の顔になっているのではなかろうか…。

『……』

レイもそんな俺の行動に、若干驚いた様だが、何も言わなかった。
ああ…。
俺だって驚いてるさ。
自然とこうしていたんだからな。
今の俺はまるで…あの時の仮面ライダーだ。
一しきり安心させた後、俺は2人の頭から手を退けると、そのまま通信を入れる。

「そういえばなのはは？」
「なのはは…」
『フェイトちゃん。正宗君』

念話でなのはの声が響いた。良く見ればヴァイスの駆るヘリの近くに白い影が見える。
なのはだ。

『スターズ3と4は無事保護。でもまだ…バニットが残ってるらしくて』

その声からは後悔の念が聞こえる。
まだ、早かったのかと。自身の判断は間違っていたのかと。

『バニットのヤツ…ドライバの拘束具引き千切ってるんです！』
『ですから！！早く助けに行かないと！！』
『なんだと！？おい！！はやて！応答しろ！！』

スバルとティアナの念話が響く。
直ぐに事実確認の為、はやてへと通信を繋げる。

それが事実ならとんでもない事だぞ！

本来ガイアメモリを使うに辺り、必要なのはコネクタと言われるメモリの挿入口だ。
その場所は、使用する人間によってバラバラではあるが、必ず肉体の一部に、刺青の様に刻まれている。
一度でもガイアメモリを使用すれば、そのコネクタは一生その体に残る。
その為、ブーストとなった人間はそのコネクタの表面に、特殊な封印魔法をかけられる。
離反を防ぐ為だ。
そして、これの解除を行えるのは、一部の人間のみだ。
はやての様な部隊長クラスじゃ無理だな。
提督とかあの辺の人間までいけば何とかなるらしい。
それと似た様に、ドライバにも拘束具がある訳だが…この拘束具には少しばかり細工がされている。
許可なく使用しようとすれば、使用者に電撃を流す自動防衛機能。
もしそれを破った上で拘束具を引きちぎっても、まともに戦える体の訳がない。
ボロボロの筈だ。

『ごめん…。正宗君。バニットと急に通信出来んようなって…。次の瞬間には拘束具の反応が消えてもうた』
『何してたんだよ！？お前等…』
異常事態が続いているのは確かだし…それで混乱するのは分かるけど…。
だぁああ…もう。俺自身苛立ち始めてる。
『落ち着いてくれ。正宗。君がそんなんじゃ、誰も守れない』

『でもよ！？レイ』
『大丈夫だ。とはいえ、時間がない。あの飛行型のガジェットはどうやら構造上、装甲が薄く出来ているらしいし、少々強引だが、ガジェットを纏めて蹴散らそう』
『どうやって…おい、まさか。あの技か？』

嫌な予感がするが、俺の問いにレイは答えない。
それは無言の肯定だった。
俺は溜息をつきながら仕方なしに了承した。

「はぁ…やるしかないか。オイ！はやて！」
『何や？正宗君』

静かにそう答えるはやて。どうもさっきの俺の怒鳴り散らした声に責任を感じてるのか。その声は暗い。

「…さっきは悪かった。サーチャーを下がらせろ。後俺達以外のメンバーもだ」
『『『『「「「！？」」」』』』』

俺の言葉に皆が絶句していた。
まぁ…気持ちは分かるけどな。
普段の俺達一人でどうにか出来る数じゃないからな。

『それは、私らの力が必要ない言う事か？』

はやての声は震えている。
必要ない？
…何か凄い勘違いされてないか

『言い方が悪いよ。聞いてくれはやて。これから、僕達はこの辺り一帯のガジェットを一掃する。その後、全員でリニアに突撃。ドーパント逮捕及びレリック確保に踏み込む。正直この技を使った後戦闘時間は大幅に短縮されるんだ。僕達1人じゃ無理だろう。協力してくれ』

『…そういう事だ。頼めるか？皆』

「正宗…出来るの？そんな事」

フェイトが俺を疑う様にそう問いかけてきた。

まぁ…そう思うだろうな…。

俺達がこれから使う技は今まで誰にも見せてないんだ…。

言ってしまえば、隠し技だ。

こんなに早く使う事になるとは思わなかったが…

俺は、左手でフェイトの肩に手を置くと、そのまま真っすぐその赤い瞳を見つめた。

「信じろ。俺達を」

その問いかけに、フェイトは、強く頷くと

『なのは、はやて。信じても良いと思う。私達は一旦下がろう。このままだとバニットの救出が出来なくなる』

『情けないけど…ここは正宗君達に頼るしかないね…時間がない』

『…分かった。じゃあWを除いたメンバーは一旦戦線から離脱してもらう。いいな？』

『『『「「「了解！！」」」』』』

皆の声が重なるとそのまま皆が、戦線から離脱する。

フェイトとエリオとキャロがこっちを心配そうに見ながらその場を離れていく。

俺は左手で、サムズアップをするとそのまま三人に背を向けた。

『格好つけだね…』

「うるせぇよ…！！さあて…やるか！相棒！！」

『ああ。起こそう僕達２人の』

俺達はライトスロットからサイクロンメモリを取り出すと、再びスイッチを押す。

［サイクロン！！］

そしてそのまま、ベルトの左腰のマキシマムスロットに挿入すると、緑の光がベルトに走り、そのままドライバーが音声を発する。

［マキシマムドライブ！！］

俺達の足元に緑のミッド式黒のベルカ式の魔方陣が重なる様に展開する。

「『粉砕の嵐を！！』」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺は左腕を前へ送り、右手を引いて構える。

すると、両腕と両肘、の宝玉が輝く…！！！

そして、そのまま呟いた。

「さぁ…終わりへのカウントダウンのはじまりだ！！」

「やってみろ！！」

赤鬼はその言葉に興奮するように背中の棍棒を手に取るとこっちに突撃してくる。
突起のついたその凶器は、当然見た目から分かる通り破壊にのみ特化した武器だ。
当たれば、一撃で俺を粉砕する事も出来るだろうが、先ほどまでの俺と違い、今の俺にはその動きが全て遅く見えた。
そう。龍（ドラグーン）となった今の俺には！

「遅い！」

棍棒を振り下ろすよりも先に足を動かし、そのまま相手の懐に潜り込む。

「！？」
「喰らえ！Dファング！」

足元にオレンジ色のベルカ式魔方陣を展開させると魔力を宿した拳を、そのまま、赤鬼の鎧に包まれた腹部に撃ち込む。
強固だった鎧もその一撃で表面に亀裂が入るとそのまま拳は中の生身の部分にまで到達する。
手応えありだ！
そのまま、拳にこもった魔力が籠手に装けられた宝玉へとその光を移す。

［チャージ］

ドライバから音声が発せられると、右手の宝玉に光が灯る。
よしっ！これで1段階。

「その程度か？」

「！？」

なっ！？こいつ…効いてない！？
そんな馬鹿な！確かに鎧毎貫いたはず！
俺は離脱する為、拳を引き抜こうとするが、まるで、何かに掴まれたかの様に、俺の拳は抜けなかった。

「この程度の一撃しか入れられんか！？俺をがっかりさせるなあぁあああ！！」
「ガッ…！」

赤鬼の真紅の拳が、俺の顔面を捉える。
抜けなかった拳が、呆気なく抜けるとそのまま、後方へ殴り飛ばされ、壁に激突する。
壁に撃ちつけられた後頭部より、殴られた顔面の方に激痛が走る。
立たないと…殺られる…。

「フン…先程の輝き。もしかしたらと思ったが、とんだ見込み違いだったか？何か考えがあるのかと思い一撃喰らってみたが、少しばかり、威力が上がっただけの拳。正直失望したぞ。Dボーイ」

まるで、俺に興味が失せた様に、棍棒を背中に背負いこむと、次の瞬間には、腹部の傷が一瞬で消え去り、治っていく。
なんなんだよ…。
なんで、俺の拳が効いてない…！

「お前…なんなんだよ！？」
「フン…。“表”の龍に興味はない。俺が興味があるのは、“裏”の龍だ。変われ！」

くっ…やっぱり。こいつ俺に力を使わせようとしてる…。
力が欲しいけど…でも…

『我を…受け入れろ』

「ガッ…！！」

頭にノイズが走る。
糞っ…またかよっ…でも…今なら…俺は…周りには…誰もいない…。
力が手に入る…？やるしかないのか…？
迷う必要なんかない…これで思う存分暴れられると…思っただろうが。
ここには、守るべき命は何1つないんだ…。
だからっ…！！！

「いいぜ…思う存分暴れろよ…！！」

俺はかけ声と共に、ドライバを叩く。
すると

『リバース！』

俺の足元に、黒いベルカ式魔方陣が展開する。
それと同時に俺は、目の前の赤鬼を睨みつけるとそのまま前のめりに倒れ込み、意識を手放した。
これで目が覚めれば全て終わってる…。
殲滅の龍の手で…。
それが正しいのか分からないけど…でもこれで少なくとも…目の前の…かつての仲間の仇は…とれ…る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ほう…やっとお目覚めか？裏が」

目の前で俺を睨みつけるDボーイを見つめるとそのまま小僧は気を失った。
最初からこれを見せろというのに…。
表の龍は只の“龍の記憶”だ。
それに興味はない。
俺が興味を持ったのは…

「グッ…ガァァァァァァァァァ！！！！」
「そうだ…！これだ！」

俺の目の前で意識を失ったオレンジの鎧は次の瞬間には莫大な量の魔力をその体に漲らせると、倒れこんでいた体を起き上がらせ、そのまま首を天へ反らせながら、野獣の様な雄たけびを上げる。
それと同時に奴の足元に展開された魔方陣から噴き出る黒い炎に包まれると、そのまま全身を黒く染め上げた。

「黒の力…その力が我等が求めているモノなのか…。確かめさせてもらうぞ！」

俺は、棍棒を背中から抜き取ると、そのまま右手で握り、腰を落として構える。
この武器は重い上に取り回しが難しい。
故にカウンター狙いで使うのが基本だ。
先程、こちらから振りまわしたのは表の力を測る為だ。
以前戦った時は、あの一撃で奴は、倒れた。
それからすれば、大いに進歩したと言える。

俺のメモリの力は“オーガ”つまりが鬼のメモリだ。
その本質は圧倒的な身体強化。それも破壊という点にのみ特化する。
その為、変身したこの鎧の姿は、見た目同様重く堅く形成され、ちよっとやそっとじゃビクともしないが…
我が装甲を貫いたのだ。
敵ながら…面白い小僧とは思った。
だが、今の俺が求めているのはこの小僧の力ではない。
悪いとは思うが、奴を挑発した。

この程度かと…がっかりした…と。

すると奴は呆気なくその身を引き黒の力を引き出した。
敵ながらまだまだ、磨けば光りそうなだけに、すぐ諦めるその根性は惜しいとは思うが敵は敵。
その成長を望むのは、変だろう。
いや…もしかしたら…この小僧も候補の一人なのだ。
その時は俺が、鍛えれば…いや…それこそ無意味か…。

「……」
「……」

目の前の相手は先程の野獣の様に吼えずに、こちらの動きを待つように、俺と同じく腰を落とし、肘に伸びた刃を引き構える。

（「こちらの動きを見ているのか…。野獣の如く考える知性など、この状態ではないと思ったが…」）

二つの瞳は俺の一挙一動を見逃さないとまで言わんばかりにこちらを睨み続ける。
只の野獣じゃない。

今のこいつは、ハンターだ。
俺が隙を見せればすぐにでも飛びかかり、その刃で俺を切り裂くつもりなのだろう…。

（「…面白い。だが…違うな。やはり…」）

自らの体に震えが走らない。
“オーガメモリ”が響かないのだ。
それが何よりの証拠だった。この力はこのメモリは我等が求めるモノではない。
だが、強い“記憶”だとは思う。この先この力をDボーイが使いこなしたとしたら、厄介な戦力が管理局に増える事になる。

（「潰しておいて損はないか…」）

棍棒を握る手に力を入れる。
こちらから攻める。
そう俺は考えを切り替えた。
そもそも、俺は、カウンター等性に合わんのだ。
今までも、立ち塞がるの者は、全て粉砕してきたのだ。

（「それが…俺のスタイルだからな」）

そう思い、攻めに転じようとした時だ。

「ガァァア…！！！」
「！？」

姿勢の低い状態からそのまま地面擦れ擦れでこちらに接近してきていた。

攻めに行こうと思った瞬間に逆に攻められただと！？
考える間もなく足元に赤のベルカの魔方陣を展開させ、左足を軸とし、右手の棍棒を弧を描きながら、風を撒き散らし、敵の横っ腹に叩きつける…！！

（「獲った…！！！」）

俺はそう確信した。
何とか反応に間に合った。
後、１秒でも遅れていれば、間に合わなかっただろう。
だが、これで終わりだ。
いくら、何でもこの棍棒をまともに受けて、生きている人間などいないのだ。
そう思った直後に右手に鈍い衝撃が走る。
いつもの感触だ。
肉を、骨を砕く感触。それを棍棒を握る腕へと伝えているのだ。
これを感じる度に俺はいつも勝利を確信してきた…だが…

「なん…だ…と？」

棍棒の動きが止まる。
先程の感触は確かに今までいくつもの命を葬ってきたものだった。
…なのに何故？

「何故生きている？」

腹を狙った筈の棍棒を左腕で防いでいた。
棍棒を止めているその腕はあり得ない方向へ曲がり、装甲も砕け、そしてそこからおびただしい程の鮮血が飛び散っている。
だが、それだけだ。

あの一瞬で反応して、咄嗟にガードしたその反射神経の速さに驚きはするが、俺の1撃を片手1本犠牲にするだけで止められただと！？

「グゥゥ…ガァアアアア！！！」

「くっ…！？」

空いていた奴の右腕。
それがそのまま動きが止まった俺の胸元へ突きたてようとする！
が、易々と受けてやる程、俺とて、甘い人間じゃない。
切り裂こうとする刃ではなくその腕を左手で掴むと、そのまま右足で奴の腹を蹴りつける。

「…ガッ！！」

横の壁へ弾き飛ばすと、そのまま動かなくなった。

「ハァ…」

本当に獣だな…。
俺の一撃を受けて生きていたのには驚いたが…最初以外は、まるで獣だ。
自身の体の事など考えていない。
所詮メモリのみの力か。
そこには技も糞もない。

「…この力は」

目の前で倒れている獣の体から黒いベルカの魔方陣が浮き上がらると、そのまま奴の体を黒い炎が包み込む。
そして、次々と身に纏った傷を修復させていく。

「…龍の力か」

龍の血を浴びて不死身になった英雄の神話がある位だ。
自身の体に凄まじい治癒能力を宿していた龍がいても不思議でもなんでもない。
こいつのメモリの武器は圧倒的な治癒能力と言う事か…。
その上、あれだけの俊敏性とパワー…。
だが、どうやら…治癒するにはまだ、時間がかかる様だな…。
今なら簡単に殺れるか。
そう思い、棍棒を振り上げようとした時だ。

「！？何。どういう事だ」

頭に軽く、頭痛が生じる。
リンクシステム…。
離れたガジェット・ドローン達の指示をリアルタイムで行ったり、状況を掴んだりと出来るシステムが俺のドライバには組み込まれている。
とはいえ、俺には他人を指揮するなど性に合わんが、為適当に足止めしておけと指示だけしておいたのだが…。
今の頭痛はリンクが強制的に切れた時に生じる痛みだ。考えられるのは外で待機させておいたガジェット群が、全て破壊されたという事だ
そんな馬鹿な。
あの戦力でこれだけのペースで俺の連れてきたガジェット群を破壊する等不可能だ。
例え、管理局でのエースが2人いるとはいえ、あれだけの数を一撃で破壊するのは…不可能だ。
だが…実際にリンクは切れた。

不可能を可能にした因子（ファクター）があるという事だ。

「ちぃ…あのペテン師。何が完璧だ。一瞬で破壊されているではないか！」

このドライバとリンクシステムそしてガジェットドローンの開発者の顔が思い浮かぶと握りしめた棍棒をあの、いけ好かない顔にぶち込みたくなる…！

だが…いけ好かないがやつの技術者としての腕は間違いない…。

「何が起こっている…？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺達は、完全に意識を1つに合わせる。

この技はタイミングが肝心だ。

『エリアサーチ』

大きな二つの赤い複眼が真紅に輝く。

Wになった時の俺達の5感は通常の人間の比にならない程跳ね上がるんだ。

一種の身体強化魔法だが、今レイが唱えた魔法は、それ等全てを、一時的にそれ等全てをフルで活用し、戦場全ての状況をリアルタイムで掴む事が出来る魔法だ。

その際に消費する魔力量が多い為、使用出来る時間は1分にも満たない。

だが、それだけの時間があれば、今の俺達には十分だ。

『正宗』

「ああ。分かってる」

俺は左手を前へ伸ばすとレイが視ているこの戦場の状況を見渡す。
今の俺達なら一瞬の風も掴めそうだ。
そこに映し出されるガジェット全ての位置を掴み、その後魔法を発動するまでの2．5秒後のガジェットの予測行動データの中から最も確率の高い選択がレイから送られる。
よしっ…！！いける！！

「バインド…！！！」

前に伸ばした左手を思いっきり握ると次の瞬間に視界に次々と、拘束魔法にかかったガジェット群が映し出される。
よしっ！ここまでは成功だ。捕まえた！

「レイ！」
「よしっ！！トルネード！！」

一番近いガジェットへ向けレイが右手を伸ばすと手の先から魔力で形成された、緑の嵐がガジェットへと伸びていく、そして、その嵐は次々と、バインドしたガジェットへと繋がれ、次に瞬間には、俺達の前には嵐で出来た一本の道が出来ていた。
そこへ俺達は躊躇なく飛びこむと、そのまま体を流れに任せたままその道を通り過ぎていく。
そして、そのまま風の勢いを得た俺達の体は一発の弾丸となり、次々と拘束したガジェットを破壊していく。
右足に何度も何度も固い何かを破壊する感触が伝わる。
この技は本来1対1で使う技だ。非殺傷設定があれば相手を吹き飛ばすだけで終わるが、今のこの技は、その設定を解除してある。つまりが弾丸の例えの如く、俺達の体は、この嵐の道に立ち塞がるも

の全てを撃ち貫くのさ！！

「こいつでラストっ！！」

俺は勢い良く声を上げると、そのまま最後の一体を足から貫通させ、嵐の道が終わると同時に体全身にブレーキをかける。

「『これが…ジョーカートルネードだ！！』」

パチン…！

左指を鳴らすと次々と遅れてガジェットが爆散する。

…良かった。成功した。

まだ、俺がバインドを完全に使いこなせてないからな。

一体や二体ならまだしも、これだけの数。成功したのは初めてだ。

『正宗。連絡を』

『わーってるよ。こちらW。目標ガジェット…ドローンは全て破壊した』

ガジェットって言おうとしたらレイから何か妙なプレッシャーを感じた。

まだ気にしてんのかよ。ガジェットの名称。どうでもいいだろうが…

『どうでも良くないよ。良いかい。そもそも名前というのはとても大事なもので…』

「だぁああ！！うるせえ！うるせえ！今はそんな事どうでも良い！はやて！聞こえてんのか！？」

レイのこだわりなんか聞いてたら日が暮れちまう。

？何か反応ないな。

念話通ってんのか？
『おい！はやて！八神部隊長！！』
『はひっ！？』
『はひって…。倒したぜ？全部。俺達は一足先に、突っ込む。なのはとフェイトも…って来てるな』
増援を頼もうとした瞬間に視界に端に、小さい影が見える。
なのはとフェイトだな。
しかし、はやての反応がおかしいな…。
『恐らく、僕達の力を見て、言葉がないんだろう？』
「ああ…成る程な」
ガイアメモリの力は強大だ。
ブーストやドーパントになったってその力の一部しか引き出せていない奴は幾らでもいる。
俺達の今の力はその本の一片だ。
『分かった！そっちに2人も今向かっとる。でも1人で大丈夫か？あれだけの魔法使こて』
『あんまり大丈夫じゃないけど。言ってる場合じゃねえよ。2人がくるまで時間稼ぐ位出来るさ』
『…分かった。無理したらあかんよ？2人の役目は悪まで時間稼ぎ。逮捕は隊長2人に任せてや』
『了解だ。んじゃ行ってくる』
『お願いします』
念話を切ると両腕の拳をスパーンとぶつける。
時間がない。

あの馬鹿（バニット）無事だろうな…？

「行くぜ。相棒」

『うん。いこう』

俺達は、一気に息を吸い込むとそのまま一直線にリニアへと飛びおりる。

そして、そのまま勢いを得ながら、右足に魔力を込めると、リニアの天井をぶち抜いた。

5話　殲滅のD／制御出来ない力１－１（後書き）

ジョーカートルネード…オリ技です。
すいません。
調子乗ってやってしもた…。
でも後悔はない。
サイクロンジョーカーの見せ場があまりなかったので我慢できずにやってしまいました…。
そしてオーガメモリの使い手の名前は次回に持ち越しです…色々すいません。
謝ってばかりだ。

6話　殲滅のD／制御出来ない力　1―2（前書き）

何かバニット言う程暴れさせてないと思う今日この頃…。
それに地味にファングと被る…死にてえ…。

6話　殲滅のD／制御出来ない力　1―2

足に衝撃が走ると鉄板をぶち抜く感触が、伝わってくる。
そしてそのまま風の魔力で制動をかけ、なんとかリニア内に綺麗に着地できた。
…なんか、今日はメモリの力使いすぎだ。
もう、体が長い事持たねえぞ…。
視界の端に、何かが倒れている。

「こいつは！？」

俺達は駆け寄るとその姿を見て絶句した。
黒い龍の形を象った全身鎧（プレートメイル）。
その腹部には管理局製のドライバが装着されている。そこには破損した拘束具の破片が付いている。間違いないこのブーストはバニットだ。
その鎧も左腕の部分からおびただしい程の血液が流れている。

「おい。大丈夫か。バニット！」
『…気絶してるだけだ。大丈夫だろう』
「んな事あるか！これだけの血が…」
『良く見たまえ。既に傷口は塞がっている』

レイの言う通り視界に入る目の前のバニットは、その体を徐々に黒い炎が覆いながら、その傷口から白い煙を出し、修復していく。

「ホントだ…。まぁ大事はなさそうだな。良かった」

しかし、どういう事だ…情報と違うぞ。

こんな力。ドラグーンメモリに無い筈だ。
それにこいつのブースト形態は、オレンジだと聞いていた。
何で黒なんだ？

『！？正宗後ろだ』
「慌てんな…。気付いてるさ」

背後から風を引き裂く音が聞こえながら何かが襲いかかってくる。
≪サイクロン！メタル！≫
俺は素早くメモリをチェンジさせると、そのまま背後からの１撃をメタルシャフトで受け止める。
クソッ…重いな。
甲高い金属同士がぶつかる独特の音と両手に伝わる痺れが、俺を狙う襲撃者の馬鹿力を持っている事を認識させる。
俺は、そのまま、視線のみを背後に向けると相手の姿を確認する。
右手に握られた棍棒に二本角。
どう見ても鬼の様な姿だ。

『鬼…。オーガのメモリか。気をつけて…。奴はドライバをつけてる。何かしらバイヤー達と繋がりのある人物の可能性が高い』
…バイヤーとの繋がり。って事は…アイツと。ビギンズナイトの時のアイツとも繋がりがあるかもしれないって事か。
丁度良い。ひっ捕まえて口を割らしてやる！

「テメエか。うちの新人を随分と可愛がってくれたドーパントってのは」
「ふん…貴様…ブーストか？成る程お前か。外のガジェット群を纏

めて破壊した桁外れな戦士は」
「だったら、なんだってんだ！」
そのまま両腕に力を込めると、相手が叩きつけてきた棍棒をシャフトで弾き返すと、そのまま左足を軸に体ごと回転させ風を纏った一撃を叩きこむ。
「ハァッ！」
「フン…」
相手も黙ってやられる程甘くないか。
棍棒でシャフトを叩き落とされた。
いつもなら、風の勢いがもう少しある為今の一撃は入れれた筈だ。
糞っ…思ったより風がシャフトに乗らねえ…。
「思ったよりパワーはないな。まぁ…恐らく先程空で大技を使った為魔力が尽き始めているのか？」
「……」
「ふん。図星か」
糞っ…見透かされてるか。
『トルネードを使ったからか…。この技の改善点はいかに消費魔力を減らすかだね』
『まぁ…そうだな。だが、今はこの状況でどうするかを考えねえと…』
『今の状況じゃ避けてなのは達が来るまで時間を稼ぐ位しかできないよ』
『だな…。しゃあねえ。サイクロンジョーカーに戻るぜ』

自身の手で逮捕出来ないのは悔しいが四の五の言っていられない。
逮捕さえすれば…情報は入るんだ。
慌てるな…。クールにだ。クールに。
メタルメモリからジョーカーメモリへとレフトスロットのメモリを切り替える。

≪サイクロン！ジョーカー！≫

左半身が黒へと変わるとそのまま左指を相手を指すといつもの決め台詞を口にする。

「『さぁ！お前の罪を数えろ！』」
「！？貴様も黒の力の使い手か」
「あ？黒の力」

目の前の鬼は俺達の決め台詞聞かずに、俺達のドライバに差し込まれているジョーカーメモリを食い入るように見つめてくる。
なんなんだ…。こいつ。

『黒の力？聞いた事ないね。確かにジョーカー“切り札”のメモリの色は黒ではあるけど』
「黒の力ってなんの事だ？それにお前も？俺以外にもいるってことか？」
「ふん…貴様の後ろで転がっている小僧が見えんか？そいつも黒だろうが」

バニット？
確かに今のこいつは黒いが…それが黒の力ってことか？
だが…俺のジョーカーメモリに色の変わる機能なんざねえぞ。

「ふん。分かっていないか。まぁ…良い。打ち込めば分かる事よ」
そう言うと目の前の男は背中に棍棒を背負うと、そのまま腰を落とし左手を前に右手を脇の下に引くとこちらを睨みつける様に構えた。
「…どういう事だ？テメエの武器を背負い込むなんざ」
『何か考えがあるかもしれない…。注意する事にこした事ない』
『だろうな』

俺達は肩幅に両足を広げると左手を前に右手を引いて構える。防御魔法は俺の方が得意だ。
ジョーカーメモリの特徴はその扱いやすさにある。
今持ってるメモリの中じゃ、俺はこのメモリの力を一番引き出せている。
他のメモリが、棒や銃を使うのに対し、このメモリだけは自身の肉体を武器とするからな。
元々俺に魔道士の才能は言う程ない。
だが、身体強化を用いた戦い方は、ガキの頃からの父さん仕込みの格闘術が十二分に発揮できる。
相手が素手でくるならこっちだって負ける気はしねえ。

『正宗。何も勝たなくてもいいんだ。熱くなり過ぎないで』
『わーってるよ』
「はっ…！！！」
俺はサイクロンの魔力でその体に身体強化をかけるとそのまま一気に相手の懐へ飛び込み右手を振り被る。
『ちょっと！？分かってないだろ！！』

わりいな。
拳での勝負を挑まれたんだ。
逃げない訳にはいかないさ。

「ふん！」
「ちぃ！」

その拳を鬼が構えていた左手でその軌道を逸らすとそのまま膝蹴りを俺の胸へと打ち込んでくるが…。

「見え見えだ！」

俺は引いていた左手でその膝を受け止め、弾き返すとそのまま再び右手を握りしめ拳を鬼の顔面に打ち込むべく構える。

「ぬんッ！！」
「なっ…！？ガッ！！」

しかし、俺の拳がヤツの顔面に打ち込む前に俺の腹部に何かがめり込む。
奴の肘打ちがおれの腹部に突き刺さった。
一瞬呼吸が止まり動きが強制的に止められるが、それを感じるよりも前に奴の掌底が下顎に昇る様に打ち込まれる。

「ガッ…！？」

軽く脳が揺らされる。
やべえ…。平行感覚が…。

「ハァァアア！！」

そのまま浮き上がった俺達の体を右足で奴は蹴り飛ばした。

『正宗！？』

糞っ！！わーってるよ。そのまま後方へ弾き飛ばされるが…このままじゃ、バニットに直撃だ。

俺はその場で素早く、サイクロンの魔力で体に制動をかけるとバニットの体にぶつかる手前の地面に右足を屈伸させ、着地。そのままその足をバネにして、再びヤツの懐に、向かって飛びこむ。

その瞬間奴の表情が驚きに歪んだようにたじろいだ。

「何っ！？」

「喰らいやがれ！！」

そのまま足のバネの勢いと同時に風を纏わせた飛び膝蹴りをヤツの驚いている顔面に叩きこむ。

ザマ見ろ。

「このまま押し切る！」

「なんのっ！！」

「チッ…！！マジかよ？」

顔面に膝をぶち込んだにもかかわらず、奴はその場にとどまると着地した瞬間の俺達に回し蹴りを振るう。

何とか左手で俺はその蹴りを受け止めるが、障壁を張る暇がなかった。

衝撃が殺しきれずに、ジンジンと腕に衝撃が響き続ける。

『想像以上だね…。正宗とクロスレンジでここまで打ちあえるなん

て』

『一撃一撃が重いな。…だが。動きそのものは見切れない事はない！やれる！』

俺はそのまま腰を落とし、右の正拳突きを打ち込むがそれを、サイドステップで奴は避けるとそのまま背後から蹴りを放つ。俺もそれを、上半身を前へ倒す事で避けるとその体勢から下段蹴りで相手の体勢を崩そうと狙う。しかし、ヤツは上空へ跳びあがるとそのまま俺目がけて飛び蹴りを狙ってきた。

「喰らえ…！！！」

「ハァアア…！！！」

俺はそれを風を纏った回し蹴りで迎え撃つ！

「ガァアアアア…！！！」

「クッッウウウ…！！！」

蹴りと蹴りがぶつかり合いそのまま互いの足に込められた魔力がぶつかり合う！！！

チッ…！！！やべえ…！！！押し切られる！！

その瞬間だった。

「何！？」

「何だ！！」

『正宗！？どうした！！』

視界一杯が光に包まれるとレイの声が遠のいていく…。

何だ…頭に何かが流れ込んでくる…。

次々と流れ込んでくる記憶の海。

まさか…逆記憶現象(バックファイヤ)か？
時々、そのメモリに込められた記憶そのものが使用者に逆流してくるという現象がある。
これにより、そのメモリの本質を掴み、そのレベルを上げる者もいれば、その流れてくる情報に耐えきれず発狂する者もいるらしい。
中には、自身の存在がメモリに取り込まれる事もある程、危険な現象だ。
発動のプロセスまでは、現段階では解明されていないが…今回の場合は、恐らく…先程の強烈な一撃と一撃がぶつかり合う事でメモリ同士が、共振したんだ。
こればっかりは、俺も初めての経験だ…。
糞っ…。なんだこの記憶は…。

戦場…？
女？
子供？
守る？
仲間？
未来？
切り札？

思いだけが流れて来て何がなんだか訳が分からない。
キーワードとしての断片が次々と俺の頭の中に響く。
なんだ…気になる…。
まだ…聞こえる筈だ。
耳を研ぎ澄ませ…。

『正宗！！』
「！？レイ」

頭にレイの声が今まで聞いた事のない位響渡るとそのまま俺の中で
響き続けていたキーワードが消えていく。

「レイ…？」

『正宗…。危なかった。記憶に呑みこまれるところだったよ』

呑みこまれる？記憶に？
ああ…そういう事か。
腹部のジョーカーメモリを見つめる。
恐らく、今のはジョーカーメモリに込められた記憶の断片だ。
でも何だ…妙に懐かしいような…そんな感覚が。

「わりい。助かった」

『いや…』

とはいえ、あのままいたら俺の意識がメモリに取り込まれる所だっ
た。
危ねえ危ねえ…。

「……クッ」

どうやら相手も同じ様に逆記憶現象（バックファイヤ）に巻き込まれていたらしい。
そのまま記憶に呑まれずヤツは自力で戻って来たのか？
なんて野郎だ…。

『気をつけて。正宗』

「わーってるよ」

目の前の鬼は俯いたまま微動だにしない。
そのだんまりが妙に気味悪さを醸し出している。

「見つけたぞ…」
「…あ？」
「黒のメモリ。逆記憶現象（バックファイヤ）。そして…何より先程見つけたキーワードの非対称の王。間違いない。貴様だ。貴様がエイトだったか」
「エイト？なんの事だ」

その時だった。
睨みあう俺達とは違う女の声が響き渡った。

「そこまでだよ。ドーパントさん？」
「公務執行妨害…器物破損…殺人未遂…無許可でのガイアメモリ使用によりあなたを逮捕します！」
「なのは！フェイト！」

リニアの俺が空け屋上から2人が飛びこんでくるとそのままバルディッシュとレイジングハートを目の前の鬼に向ける。
終わったな…。
エイトとは何かが気にはなるが…それも逮捕すればいずれ吐くだろう。

「くっ…時間をかけ過ぎたか…」
「さあて…形成逆転だ。大人しく捕まってもらうぜ？」

そう言いながら俺体は3人で目の前の鬼を睨みつける。
とりあえず…拘束魔法で拘束して。
その瞬間、首元のマフラーがなびいた。
一瞬だが…巻き起こった風…。
俺の横を何かが…

「悪いが…そういう訳にもいかん！」
「えっ…！？きゃああ！！」
「なのは！？」

その存在を確認する前よりも突然なのはの悲鳴が響き渡ると、何かに弾かれた様になのはの体が突き飛ばされる。
瞬間的にそれを何とか俺達は飛びこむ形で受け止める事に成功するが。

「えっ！！…くっ！！」
「フェイト！」

フェイトも同じ様に一瞬で弾かれてリニアの壁へ激突する。
なんだ！？一体何が！？

『おい！？どうなってんだ！レイ』
『これは…予想外だね』

その時オーガの傍らに何かが現れた。
馬鹿な…さっきまでいなかった筈だ。一瞬で動いたのか？

「！？ドーパント！？」

青い姿のドーパント。
右手に剣を持ちその両肩でなびいている二つのマフラーが印象的なドーパントだ。
こいつが、高速移動して、二人を弾き飛ばしたのか？
そして何より…ヤツの腹部にあるのは…ドライバ。
間違いない…こいつも。

「糞っ…まだバイヤーの一味が」
「ご名答。しかし…一人意気込んで出撃してこのザマか？オーガ。情けなさすぎるぞ。見た所未だレリックの回収も済んでいない様だしな」
「ちっ…ナスカ。出しゃばるな！今回は俺一人で…」
「出来てないからここに今俺がいるんだ」
「クッ…」

オーガと呼ばれたドーパントはそのまま何も言えずに悔しそうに口を閉じやがった。
仲間らしいが…仲はあまり良く無さそうだな。

「今回はこれで引かせてもらう…。レリックも頂いていく」
「何時の間に！？」

その脇には、レリックの入ったケースが挟まれており、そのままオーガの肩を担ぐと無理やり立たせる。

「やらせない…！！ディバインシューター」
「何！？」

俺の手の中で倒れていたなのはがレイジングハートをナスカと呼ばれていたドーパントに向けるとそのまま魔力弾を3発撃ち込む。

「フン！！」

ナスカはそのまま右肩に抱えていたオーガをその場に落とすと握りしめた片刃の剣でそれ等全てを切り裂くとその場で魔力弾を爆発させる。
なんて野郎だ…誘導弾の軌道を読み取った上で一撃で仕留めやがっ

た…。

「悪あがきを…」
「はぁああ…！！」
「何！？」
「フェイト！？」

気絶していたと思ったフェイトがバルディッシュを死神の鎌の様なサイスフォームへと変形させると金色の魔力光の刃をナスカに向けて振り下ろす。
その攻撃を避けた際に、脇に挟んでいたレリックの入ったケースを落としやがった！
チャンスだ！

「レイ！」
『ああ！！』
≪ルナ！ジョーカー！≫

すかさずレイがメモリをチェンジすると、右半身が黄色く変わる。
そしてそのまま右手を伸ばすとレリックのケースを掴むと一気に引っ張る。
っしゃ！

「レリック確保だ！」
「くっ…しまった！？」
「何をしている！？ナスカ！！こうなったら俺が力づくで…」

来るか…？でもまぁ…このまま来ても。
なのはとフェイトは睨みつける様に俺の両隣りでデバイスを構えてやがる。

さっきは不意打ちだったが、あの超高速…サイクロンを使えば見切れる筈だ…。

「…撤退だ」

「はぁ…！？ふざけるな！！ここまで来て！！」

「貴様の軽率な行動の所為だろうが…！このまま目の前の三人を相手に貴様一人で勝てるのか？なら面白い。やってみろ！そんな事が出来れば、この場に俺達自身いないだろう！違うか！？」

「糞っ…！貴様…名前は！？」

「W…」

「W…。その顔覚えたぞ！！」

「なっテメ！」

「逃がさない！」

その瞬間、ヤツ等の足元に赤いミッドの魔方陣が展開されると、そのまま2人の姿は一瞬で姿を消した。

フェイトが誰よりも早く気付いた様だが…残念ながらその振るわれた鎌は空振りに終わった。

「…糞っ！逃げられちまった！！」

「なんだろう…さっきのオーガの台詞が妙な既視感があるのは。気の所為かなぁ…」

なのはのヤツなんかブツクサ呟いてんな…。

前にも似たような事あったのか？

「バニット！？」

フェイトがバニットに駆け寄ると、そのままその体に触れる。

血が流れているのを見るとその顔が一瞬で青冷めた。

『大丈夫…。気絶しているだけだ』
「でも…こんなに血が…」
「良く見てみろ。傷は塞がってる…」
「あっ…ほんとうだ。でも…なんで？」
「さあな？メディカルチェックはした方が良いだろ…。俺はこのまま
こいつを連れて地上本部にいくぜ」
「うん。了解。はやてちゃんにはわたしが報告しとくよ。取りあえ
ずは…任務完了かな」

なのはの言葉にフェイトも俺達も頷くと手にしていたレリックをな
のはに手渡す。
皆のその表情はどことなく暗い…。
仕方ないだろう…。
何とかレリックは回収出来たが…。
今回の出撃…色々異常事態が多過ぎた…。
新人どもが自信喪失にならなきゃ良いんだが…。
にしても課題が山積みに出てきたな…。
なにより…足元で倒れているバニット…。
こいつの…事前のデータに無かった黒い形態について…。

（「黒の力…か。調べる必要があるな」）

それだけじゃねえ…ドライバを手にしたドーパントの存在…。
ビギンズナイトの時以来だ…遭遇したのは。
何だ…何かが動き始めているのか…？

（「それに俺の事をエイトと呼んでいた…。俺の出生についてあい
つ等は何か知っているのか？」）

間違いなく…あの日の夜から停滞していた何かが、ゆっくりと動き始めた様なそんな気がしていた。

……

目の前に広がる巨大モニター。そこには、先程までのWの戦いの映像が流れている…。

やはり…あのブーストWは…。

［刻印ナンバー9。護送体勢に入りました］

「ふむ…」

［追撃戦力を送りますか？］

「いや…止めておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ。それに…あの2人が撤退したんだ。私達が攻めるのも無粋だろう？」

サイドモニターで女性と話し終え、そう言うと目の前の白衣の男はこちらに笑いかけながらそう呟いた。

相変わらず…興味のある事しか頭に無い様だ…。

だからこそ…この人物は信頼できるのだが。

「そうしてもらえるならこちらとしても助かる。無駄にプライドが高いのでね。私の部下共は」

「いやいや…まぁ、それも一興だろう。ファントム」

「スカリエティ。君はどう思った？あの部隊は」

「面白いね…実に興味深い素材が揃ってる。その上…」

モニターが切り替わるとそこには、金の少女と赤の少年の映像が映し出される。

「生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがあるのだからね…。君にとっても興味深いだろう？君の探しているエイトもまた…彼女達と同様の存在だ…」

同じ？

一緒にするな…。

貴様の提案したレプリカの計画などではない…我等が探しているのはオリジナルだ。

古代ベルカよりの忘れ形見…。

「おや…納得いかないって顔だね。まぁ…確かに…君の探しているエイトも興味深いけどね。そちらは君に譲るよ。そういう約束だ」

「恩にきろう」

「ふふふ…そんな気持ち欠片もないだろうにねぇ」

不気味な笑みを浮かべながら、スカリエティは笑う。

ふむ…。隠し事はどうも苦手だな…。

しかし…君は勘違いをしている。エイトを探す必要はもうない。

見つかったんだよ。もう…ね。

W…。まさかあの片割れがエイトとはね…。

始まりの夜の因縁はこんな所まで繋がっているとは…世の中上手くできているよ。

6話　殲滅のD／制御出来ない力　1―2（後書き）

何か色々出ましたけど…。
原作と大分かけ離れてきた気が…。
さあて…次回はやっとバニットと正宗の殴り合いだ…。
何か長かった気がする。

7話　過去（前書き）

思う様に書けない…。
ジレンマ…。
泣きてえ。

7話　過去

報告書
?:事件　ＮＯ　ＭＩＤＥ００５６６６５７１３－Ｅ６５３２４２
?:事件種別　遺失遺産（ガイアメモリ）の違法使用による殺人事件
?:担当者　執務官　メロス・ハイウェイ
?:指揮官　同上
?:現場主任　同上
?:概要

ミッド東部の森林部にて大量の遺失遺産（ガイアメモリ）をパトロール中の陸士１０６部隊が発見。
地上本部へと連絡後、メロス・ハイウェイ執務官が派遣。
現場到着時、１０６部隊のフォワードメンバー１名を除き死亡を確認。
同時に未確認のドーパントを２名確認。
２名の内１人は重要参考人であり、容疑者のバニット・ランクロス三等陸士。（魔道士ランクＣ＋。ドーパント時は推察だが、ＡＡＡ）
ドーパントの形状はオレンジ色の龍の形をした全身鎧。
もう１名は、正体不明。（魔道士ランクは不明）
しかし、腹部には、管理局製とは思えないドライバらしきものが確認された。
バイヤーもしくはバイヤーと何らかの関係がある者と推察される。
特徴としては赤い分厚い装甲に額の二本角。背中には棍棒を担いでいた。
両名は、残されたガイアメモリを巡り、戦闘行動を行ったと思われる。
その際、メロス・ハイウェイ執務官が制止に入った際、正体不明のドーパントは逃亡。

その後、残されたバニット・ランクロスが暴走。
メロス・ハイウェイ執務官の手により、強制的にメモリを排出に成功。
正気に戻り、そのまま意識を失う。

１週間後意識を取り戻したバニット・ランクロスへの事情聴取の結果。
本人がメモリを使用し、部隊の皆を殺害したと自白。
正体不明のドーパントと遭遇後部隊員が次々と倒されているのを見て、咄嗟に確保したメモリでドーパント化したとの事。
その後の記憶は曖昧であまり、記憶にないと言っている。
しかし、部隊員を殺した時の記憶のみは残っている模様。
一種のガイアメモリの暴走と思われるが、真相は不明。
以後は、ガイアメモリ対策班に調査を委譲。

?被害結果
死者４名（陸士１０６部隊フォワードメンバー）
ガイアメモリ１０本中１本がバニット・ランクロスにより使用。
残り９本の内、５本が正体不明ドーパントに強奪。
残り４本は、本局遺失物管理下へ受け渡す予定。

?レポート制作者
時空管理局執務官補佐　カイト・ミナセ

・追記
バニットが使用したメモリの検査結果ドラグーンメモリと命名。
既に滅びた世界の龍の記憶が込められていると思われる。
引き続き調査を進める様。
また…本人に十分の反省の意思が読み取れるのと状況からも情状酌量の余地があると思われる為、執務官メロス・ハイウェイ。私、執

務官補佐カイト・ミナセの両名の判断により、ブースト局員への推薦も検討する様求む

以上

時空管理局地上本部データベース閲覧室。
そこに俺は来ていた。
目的はご覧の通りだ。
バニットの起こした過去の事件を詳しく知る為だ…。
この手の事件の概要を知るには、本部に出向いて色々面倒な処理をしなきゃならねえから面倒だった。
特にガイアメモリ関連の事件となればな…。
やはり…黒の力。黒い姿に関しては記されていない。
仕方ねえ。直接聞くか…。
幸いこの事件の担当者のメロスとカイトは知り合いだ。
執務官の数は現在少ない為、大体の人間の名前は把握している。
人付き合いが広ければ、自ずと情報は集まる上に協力してくれるように、貸しも作れる。逆に借りも作らされる事もあるが、そこはギブアンドテイクってヤツだ。
あいつ等には少しばかり、貸しがある。それを後で精算してもらおう。
そう思いガジェット「スタッグフォン」を取り出すとコールしようとする。
こいつもレイが作ったガジェットで普段は通信端末として使用できるガジェットだ。
ちと型は古いが…今でも地球とかいう世界ではこんな端末が流行っ

ているらしい。
だが…このスタッグフォン。
凄いのが…念話を使用して通信とするこの世界の端末とも話せるが…これ同士ならどんなに離れていても念話が出来る程強烈な魔力波を出す事が出来る。
そしてその際、これは会話内容を盗聴される可能性が限りなくゼロになる。
その為か結構俺達執務官の間じゃ、その性能から欲しがる人間も多く数人の信頼出来る人間には同じタイプのガジェットを渡してある。
メロスとカイトにも丁度この間渡していた。

「正宗」
「レイか。そっちはどうだった？」

別件を頼んでいたレイが、自動ドアを開けながら不満そうに入ってくる。
やっぱ怒るか…。
こりゃ…連絡は後回しだな。

「どうもこうもない。なんで僕1人でレジアス中将に報告しなきゃならないんだ。お陰で2人分の小言を言われたよ…」
「…やっぱりか」
「分かっているなら付き合うのが普通だろう。そもそも君が執務官で僕は補佐だぞ。普通逆だろう…」

地上本部に調べ物をしに来たついでに、全開起きた事件の報告書と、現在調べれるだけの六課についてのレポートを提出してきた所だ。
あの人が望む様なモノは現在見つかっていない…。
恐らくその辺の事も追及されて、グドグド文句言われたんだろう…。
まぁ…実際は少しばかり調べた段階で、六課の後見人である1人の

カリムさんが俺的には怪しいと踏んでいるだが…。
確証が無い以上…報告は出来ないしな…。
それに、今は俺も六課の一員だ。
彼女達がどんな思惑で動いているにせよ…それが正しくなければ報告はするが、その証拠が無い内に報告してしまっては、執務官としても人としてもいい加減に見られる。
そいつだけは勘弁だぜ…。
仕事もプライベートも完璧にこなす…これがハードボイルドだ。

「（ボソッ）…そう思うなら、正宗が報告してきたらいいのに」
「さーてあいつ等に連絡とるかー！」

何か聞こえた気がするが気にしなーい！！
細かい事を気にしない…それも一流の男のたしなみだぜ？

「はぁ…それはそうと、正宗。奴の言っていた黒の力なんだけど」
「何かわかったのか？」
「いや…“僕の本棚”にそれらしい該当する記録はなかった」
「まぁ…仕方ねえよ…。となると…何なんだ？黒の力って」
「……それとなく心当たりはなくもない」
「？どういうことだ」
「冷静になって考えてみた。奴はWの僕達の姿を見てジョーカーメモリに対してのみ黒の力といった。僕は最初はメモリに共通点があるのではと思ったけど…不意に気付いたんだ」
「何にだよ？」
「使用者には共通点があると…」
「共通点？」

すると、珍しく俺から視線を逸らし口を開いた。

「正宗にあって、僕にないものさ…始まりの夜での事と言えばわかるかい？」

“正宗、レイ”

「……」

レイの一言で俺の頭の中に今はもう聞く事の出来ない女性の声が響く。

体全身に悪寒が走る…。体中から冷や汗が出続ける…。

分かってるさ…。幻聴だと…。

だからといって忘れることなど許されない…。

これが、俺の罪の記憶なのだから。

「…多分そこに何か関係があるんだよ。黒の力っていうのは」

レイはそんな俺に、持っていた飲みかけのペットボトルのミネラルウオーターを手渡す。

別に心配する様子なんかない…。慣れたのか？いや…というより少しその瞳は俺を睨みつけている様にも見える。

ここまでこいつが感情を表に出すのは珍しい。それも事、怒りや悲しみそういった負の感情に至っては。

…ビギンズナイトでの事をまだ怒っているのか？

「…怒ってんのか？」

俺はその瞳を受け止めつつ、渡されたペットボトルに口をつけるとそのまま一口飲み下す。

乾いていた口の中に水分が入ると大分楽になる。

「…すまない。単なる八つ当たりだ。あの時の事と未だ決着をつけれない僕の弱さだ」
「いや…まぁ…俺も人の事いえねえけどな」
……あの時の事だな。
バニットを見ていると自然とビギンズナイトの事を思い出す。
だからかもしれないな…最初頑なにバニットの世話を引き受けなかったのは。
「……気付いているんだろう？バニットの心の闇には」
「ああ…まぁな」
あいつの過去の経歴を見れば何となくだが、分かる。
少しばかり似ているのだ。俺達と…。
まぁ…根本的には違うのだろうが。
ガイアメモリで…大事な人を亡くしてしまった事には変わりない…。
「いい加減向き合うべきなのかもな…。俺達も」
「……」
レイはその答えにはダンマリを決め込む。
まるで悪戯の見つかった子供の様に気まずそうに俺から視線を逸らす。
「…良いさ。まず兄ちゃんが手本見せてやるよ」
「えっ…？」
驚く声を上げるレイを前に俺は、覚悟を決める。
そしてその上で、バニットには教えてやらなきゃいけない事がある。
あのままじゃ…バニットは”自分自身”に食いつくされる。

それを教えないと…。それが、拳をぶるけるという、野蛮なコミュニケーション方法であろうとも…だ。
その上でレイにも伝えられる事があると信じている。
バニットもレイも俺も1つの共通点で結ばれている。

「お前の罪を数えろ…」

俺は自然と胸に手を当てるといつも口にするフレーズを自分に向けてレイに向けて…バニットに向けて自然と呟いた。

……

“受け入れろ…”
“受け入れろ…”
“受け入れろ…”
“受け入れろ…”
“受け入れろ…”
“受け入れろ…”

ああ…分かる。
これは夢だ…。
いつも見る悪夢そのものだ…。
視界一杯に広がる闇…。
そして、その中心でとぐろを巻きながら眠りについている黒い龍…。

“我を！受け入れろ！！”

「受け入れてる…俺は…」

“否！！断じて否！！そうであれば、我等があの程度の者に負ける

筈がない…！”

その瞬間、俺が意識を失っていた間の記憶が龍から俺に流れ込んでくる…。

獣が如く飛びかかり呆気なく撃破される俺達…。

左手に激痛が走る…！

骨が折れて、肉がグシャグシャになる感覚が記憶とはいえ再生される…。

「ッ……！！！！」

“その痛みこそ敗北の証”

「…なんで負ける！？俺は受け入れている！お前を！力を！」

“……”

「何とか言えよ！！」

“わかっていない。力ではない。我を受け入れろ”

達観した様に眠りながらこちらを見下ろす、黒い龍の二つの瞳。

その真っすぐ射抜く視線に我慢しきれず視線を逸らしてしまう。

“…潮時か”

「…潮時？」

どういうことだ？

“次に貴様が我を呼び覚ました時…。我を受け入れぬというのであれば…”

「！！？」

その時、今まで微動だにしなかった龍がその巨体を起こすと、そのままその顔を俺に近付けてくる。

…なんだこの重圧（プレッシャー）。

体が震える…。

自然と俺の足は一歩、一歩後ずさる。

恐い…。

恐い…。

恐い…。

何だこいつは。

龍だからか…？

いや…違う。

なんだ…こいつは。

こいつは…俺の存在そのものを否定している！！

“貴様を食い殺す…！！！”

「うわぁあああああ……！！！！」
「きゃっ…！？」

目の前で白衣を着た金髪の女性が、驚きの声をあげながらこっちを見ている。
そうか…夢だったんだよな。
アレは。

「シャマルさん？」
「ああっ…もう。驚かさないで。バニット」

白衣を着た女性が可愛らしく怒りながら、そう言うと溜息をついた。
これまでも、何度か世話になった事がある上、六課に異動になってからは、世話に成りっぱなしの女性だから嫌でも覚えている。
彼女の名はシャマル。
ガイアメモリという、未だ解明されていない技術を使用する俺達、ブーストは変身する度に、メディカルチェックが勧められている。
体にどんな異常をきたすか分からないからだ。
実際、メモリの力を引き出せば引き出す程、ブーストの肉体を酷使する事が大半で最悪に死に至らしめる程の事もありうる。
それを、事前に防ぐ為にも、こうしてメディカルチェックを行うのが、ブーストの間では普通だ。
その為、どこの部隊に配属になっても、医務官とは必然的に接する機会が増える。
彼女もまた医務官であり、六課では、彼女が主任である為、必然的に接する機会が増えるのも仕方ない。
六課では今の俺がまともに会話している数少ない人間でもある。

「すいません。ここは…？」

辺りを見渡せば、白い壁に、俺の体に取りつけられた見慣れた医療器具。
メモリによる肉体の侵食を測定するものだ。
六課じゃない…。

「地上本部のメディカルルームよ。ブースト局員のメディカルチェックを行う機材はまだ、六課にはないから」
「そういえば、そうでしたね」
「本当…。ブーストが3人来るって言ったらやっと、機材を六課に搬入してくれるって話になって、安心してたのに、搬入前にこんな事になって。あまり心配かけないで。バニット」
「すいません」

軽く左手に触れる。
夢の中で激痛を感じた左手には傷1つ残っていない。
でも…あの夢は。

（「夢だ…夢」）

そうだよ。夢だ。あんなの。今までだって、一時的に記憶を無くす以外、何ともなかったんだ。
問題ない筈だ。

「そういえば、あれから…どうなったんですか？」
「大丈夫よ。軽い掠り傷程度は負ってるけど、全員無事に帰還したわ。後は、バニットと私と正宗くんにレイくんが帰還すれば、全員無事六課に帰還ってことになるわ」
「…そうですか。よかった」
「…でも！」
「えっ！？」

顔を近付けられると、そのまま額を指で小突かれる。
軽く、頬を膨らませながら軽く睨みつけられる。
怒っているんだろうが…自分よりも年上の目の前の女性は、どうも可愛く見えて仕方ない。

「プッ…！」
「なんで笑うの！？」
「いや…すいません。それで？なんですか？シャマルお姉さん？」
「うう…何か馬鹿にされてる気が…」

自身をお姉さんと言いはる彼女はどうも、自覚しない天然のドジっぷりからか…俺の毒気を普通に抜いてしまう。

「ドライバの拘束具。引きちぎったわね？」
「うっ…」
「もう…心配させないで。部隊の皆も心配してるのよ？それに、今回のあなたの行動で部隊長にだって管理不届きとして、責任の一端がかかる。そこまで頭が回らなかったの？」
「…すいません」

あの状況じゃ、ブースト化して戦う以外選択肢はなかった。
だが、八神部隊長にまで責任が行くとは思ってなかった…。
いざとなれば俺が部隊から離れれば良い…。
そう思っていたが、とんだ勘違いだった。
ブーストの責任は所属する部隊の隊長に責任が掛かるのを忘れていた。
ブーストになって今まで部隊の事を考えて動いた事がなかったのが裏目に出た。
普段から気をつけていれば問題はなかった筈なのに…。

当然の事が出来なくなっていた。

「幸い。あなたも無事だし。メモリが奪われた訳でもないから今回は責任は問われなかったけど…今後は気をつけて」

「…了解しました」

「でも！それ以上に自分の体も心配する事！！良い？」

「…はい」

そう言うと彼女は満足した様に笑うとそのまま俺の腕に繋がった装置を外すと、なにやらモニターを開いて、操作する。

「うん。コンディションは問題なし。正宗くんとレイくん2人にお礼言わないとね」

「えっ？」

「気を失っていたからね…。あなたを助けに行った時、あの2人が先陣を切り開いたのよ」

……あの2人が？

……なんだろうか。あの2人に助けられたと思うと少しばかり苛立ちが胸の中をくすぶる。

今思えば、初めて会った時からあの2人…。

とくに兄の正宗の方に対する苛立ちは異常な程に大きい。

…嫉妬か？

力を持つブーストという存在に対する…いや違う。

この感情は…そんな生易しいものじゃない…。

認めたくない…のか？

なんで？

「よーバニット。元気してるか？」

「正宗…。声が大きい」

いつの間に来たのか、医務室の扉を開けるとそこには、先程まで考えていた空条兄弟の４つの赤い瞳が俺を見つめていた。
相変わらず…兄の方は、ふざけた態度で俺に近付いてくる。

「どうも。シャマルさん」
「ええ。久しぶりね。正宗くんもレイくんも2人共元気してました？六課に配属になってから、まだ挨拶もろくに出来てなかったものね」
「はい。先程は、僕達のチェックの方ありがとうございました」
「いいえ。どういたしまして。じゃあ…わたしは、ここの医療班の責任者さんにお礼言ってきますから、先にバニット連れてヘリポートまで向かってくれる？」
「了解しましたっ！」

シャマルさん相手にビシッと敬礼をする兄の方。
なんなんだこの人…。
そうこうしてる間にシャマルさんは俺に、微笑みかけるとそのまま医務室を出て行った。
なんだったんだ？最後の笑みは…？

「ふぅ…女性に良い顔したがるその癖直した方がいいよ？」
「そんなつもりはねえ。これが俺だ。女性に優しくってな」
「…フェイトに言ったらどうなるかな？」
「…いや、なんでそこでフェイトの名前がでる？」

なんだか分からないと言った様に言う兄の方は、とぼけているが、それに対して弟の方は溜息をついて「もういいよ」と呟いた。
なんだか苦労してそうだな…この人。

「おい。バニット。どういう事か分かるか？こいつの言ってる事」
「……そんなくだらない話しにわざわざ迎えに来たんですか？」
こちらを挑発する様な言葉を出しておいて平然と顔を出すこの人の神経はどうなっているのか正気を疑う。
普通の人間なら少しは気まずくなるというのに。

「まぁ…そうピリピリすんなよ」
「させてるのはあなたでしょう？」
「…んじゃ単刀直入に言おう。全部話せ」

…全部話せか。
本当に単刀直入だな。

「……知ってるんでしょう？俺の起こした事件については」
「ああ。だが…今回の出動の際のお前が戦っていたオーガドーパント。初見じゃないだろ？お前」
「……すいません。話は六課に戻ってからでいいですか？」
「ん？どういうこった」
「約束…しちゃったんですよ。ナカジマとランスターに。戻ったら話すって」

あの時、俺を信じてくれたナカジマに最後まで俺を心配してくれたランスター。
言ってしまったんだ。仲間って…だから。説明する義務はある。
この話をすれば、もう気負う事はない…。
自然と離れて行く筈だ。
今までだってそうだったんだから…。

「……分かった」

そう言う兄の方は何故か、驚く様にそう答えた。
初めてそういう素の顔と言うモノを俺は見た気がしたが…。

「それじゃあ行こうか。ヘリポートに」
「ああ。いくぞバニット」

命令すんなっての…。

「了解」

そう言うと俺は、ベッドから起き上がり六課の制服に腕を通した。

……
六課部隊長室

「あーもう最悪や…」
「はやてちゃん…」

あかん…リィンが心配そうにこっち見てくるけど挫折しそうや…。
初出動でこの有り様…。
いや…ちゃう。
フォワード陣も隊長陣もようやった…。
最後の最後で油断したあたしの所為や…。

「はやて」
「ん?…ああフェイトちゃんか。どないやった?フォワード陣の様子は」

なんや、いつの間にか知らん間にフェイトちゃんが部屋におる。

報告書のデータ持ってきてくれたんか…さすが執務官…仕事早いな。
データで送ってくれたら良いのに…。
心配してくれたんやね…。
…あかんなぁ。
部隊長やのに…心配かけてまうなんて。

「外傷は殆どないよ。皆掠り傷程度。ティアナがちょっと打撲の跡があるけど、直ぐ治る程度だし、問題はないよ。バニットもさっき正宗とレイと一緒に戻ったしね」
「そうか…」

ほんま…将来有望な新人の芽を摘むとこやった…。
ドーパントはその姿を変えるまで、魔力反応を出せへんのもおるから…サーチャーにも引っかからへんの忘れてた…。
ゴタゴタしてて、ロングアーチスタッフに指示するのを忘れてたあたしのミスや…。
ガイアメモリに対して、管理局はまだ色々対応出来てへん事が多いな…。
最近流出が始まったロストロギア関連の代物やから基本知識がまだ全管理局員に行きわたってへんのが完全に表に出てもうた。
これは少し不味いなぁ…。
今後は徹底させへんと…私も含めてやけどな。

「予想以上に参ってるね…」
「はいです…さっきからこの調子で…」
「…はやて。ウジウジしてても始まらないよ」
「フェイトちゃん?」
「人生選択の連続だ。時には間違える事もある…。でもその失敗は決して無駄にならない。その経験を生かして行けばいい。そうして最後まで諦めない人間が最後に笑える人間だ…」

…この言葉。
なんやろ…安っぽく聞こえなくもないけど。
フェイトちゃんの顔見てるとそんな事感じへん。
実感籠ってるいうか…。
確かに、フェイトちゃん執務官試験に落ちた経験あるからなぁ…。
それもあるかもしれへんけど…それだけやあらへんな。
なんちゅうか…フェイトちゃんの言葉とは違ういうか…。

「…正宗の受け売りだけどね」

そうフェイトちゃんは微笑みながらそう言った。

…あかん。女のあたしでも今のフェイトちゃんドキッとする程の飛びきりの笑顔やった。
…ほんまに正宗君にぞっこんぽいな。
ほんま何があったんやろ…。二人の間に…。
でも…無駄にならへん…か。
そうやね…失敗の経験は何より得難いモノになるて師匠にも教わったな…。
…随分歯が浮く様な言葉を言うんやね。正宗君。
狙って言うとるんやろうか？
こういう言葉遣いもフェイトちゃんに好かれとるんかな？

「…そうやな。こんな事でウジウジしてるのもあたしらしくあらへんな。今あたしがするべき事はそんな事やないな」
「うん！」
「はいです！はやてちゃん！」

よーし何かやる気出てきたよ！！

とりあえず、ロングアーチスタッフ集めて、軽く勉強会かな？
いや…ここは折角やし正宗君とレイ君にマニュアルでも作ってもらうかな…。

「…はやて。１つ報告が」
「なんや！？今のあたしはなんでもばっち来い状態や！！」
「…バニットがフォワードの皆に自分の過去について話すって…」
「……えっ？」

やる気満々の思考が止まる。

「…？どういう事ですか？」

リィンが「何のことですか？」と言う様に首を傾げてくる。
無理もない。
あの事知ってんのは隊長陣にあたしと今日来たばかりの正宗君とレイ君だけや。
でも、

「自分から言うたんか？」
「どうも…リニア内で約束したらしくて」
「約束？」
「ですか？」
「バニットが必ず戻るから、逃げてくれってティアナとスバルに言ったらしいよ」

うーん。
やっぱり…あの子何か普通とはちゃうな。
こっちに事前渡されたバニットのデータにはなのはちゃん達から聞いた”黒い形態”なんて書かれてなかった。

どうも…何か故意に情報が隠蔽されとる気が…する。

「…その代わりに教えろて？」

「みたいだね」

「はぁ…ほんま問題が次から次へと…。でもまぁ…チャンスではあるか…」

確かに不安ではあるけど…それでもバニットと皆が打解ける良い機会ではある…。

ただ…これが吉と出るか凶と出るか…。

「なのはちゃんは？」

「正宗達に付き合って話を聞いてる」

「フォローは、なのはちゃんに任せるしかないね…」

「うん。…只」

「只？なんや」

「どうも、正宗。バニットに模擬戦仕掛ける気らしいんだよ」

「…模擬戦？」

「うん」

フェイトちゃんは心配そうに溜息をつくとそう言った。

そういえば出撃前に何や正宗君とバニットが揉めたいう報告があったな。

その続きか。

そうやとしたら…

「任せるしかないやろ。それが正宗君なりにバニットの為になる事を考えた結果やったら頼んだ私たちが文句いうなんてできひんしなぁ」

「それは…そうだけど。なにか…今回の正宗もレイもいつもと違う

気がして…」

顔を伏せると静かにそう言うフェイトちゃんには不安が簡単に見てとれた。

私はまだ会って1日しか経ってへんから分からんけど…フェイトちゃんがそう言うんやったら…少しこっちも警戒はしておいた方が良いかもしれへんな。

「まぁ…今ここで愚痴っても始まらへん。フェイトちゃん。リィン。訓練スペース行くよ。丁度ヴィータもシグナムも帰ってくる頃やしね。それに三人に何か起きそうになったら私達で何とかしたらいい。私達は仲間やねんから」

「…うん」

「はいです！そういえばヴィータちゃんとシグナムは御二人にあった事あるんですか？はやてちゃん」

「それっぽい事は前言うてたからあるんちゃうかな。まぁそれも会えば分かることや」

さて…どうなることやら。

……

六課レクリエーションルーム。

俺達はあれから帰還した後、直ぐになのはに俺達とバニットとフォワードメンバー4人。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ…あ～後フリードでバニットの過去について話した。

大体の内容はやっぱりあいつ等に聞いたのと、報告書通りだな。

只…この話を聞いた瞬間場の空気が一瞬にして固まったのが分かる…。

「分かったろ？俺は人を殺してる。それも仲間を…」

その言葉にいた人間は俺とレイを除いて顔を伏せる。
なのはに至っても例外ではない。予め知っている情報とはいえ…本人から聞くのとでは情報の鮮明さというかそういうのが…全然違うからな。
悪く言えば…生々しいんだよ。
そういう経験からくる話の内容っていうのは。

「でも…でも！バニットは仲間を守りたくて！それで！」
「そうですよ！バニットさんは悪くないですよ！」
「わたしもそう思います！わたし知ってますよ！バニットさんが優しい人だって。時々フリードと遊んでくれてるじゃないですか」

ティアナ以外のメンバーがそうバニットに声をかける。
その言葉にバニットは目を伏せる。伏せている為表情は読み取れないが…今思ってる事位分かる。
同情は止めろ…何を分かった様な事を…。
大方そんなモンだろ…。
こいつらは、本気でバニットを心配しているのかもしれないが、今のこいつには言葉だけじゃ届かない。
やはり、力づくでいくしかないか。

「その辺にしときなさい。アンタ達」
「ティア！？だって！」
「うっさい！こいつが何の為にあたし達にこの事を話したか位分かりなさいよ…」

その言葉に皆がハッとなる。
さすがティアナ…この中じゃリーダーなだけはある…。

皆を一言で冷静にさせた。
しかし、なのはは少し意外そうにティアナを見つめていた。
まぁ…俺も同じ様に思ったけどな。
正直この六課メンバーは事感情面においては隙だらけな様な気がしてならない。
俗に言うお人好しの集団だ。
こういう話を聞いて…相手をどうにかしたいと思ってしまうのだろう。
ティアナもその筆頭に立つと思ったのだが…。

『意外だな』
『うん…。ティアナって…ほら』
『ああ…。人の死には感情を先走らせる可能性の方が高そうだからな』

リニア内でのこいつの動きを最初から見ていたのはティアナだけだったな。
…何かを感じ取ったか。
それと、感情で走る…悪く言えば暴走しかねない他のメンバーのブレーキ役にもならないと考えたのかもしれないな。
とはいえ…これは嬉しい誤算だ。

「ねぇバニット。あんた。あたしに言ったわよね？あたし達を仲間って」
「「「！？」」」

なのはにエリオにキャロがその言葉に驚きを隠せず目を見開くと信じられないとでも言うう様にバニットを見つめる。
その言葉と視線にバニットは罰が悪そうに眼を逸らす。
…やっぱりな。

こいつはビビってるだけだ。
こいつの心の闇のキーワードは…

『仲間だね』
『正解だ。相棒』

まぁ…それだけじゃないんだろうけどな。
そろそろ良いか…。
汚れ役は俺達がするべきだ。
それに…残りのキーワードはこいつ自身に分からせないといけないからな。

「おい…バニット。取りあえず表出ろ」
「えっ？」
「正宗さん。何を？」

エリオが心配そうに聞いてくるが…ここは少し悪ぶった方が良いか？
バニットの本気を見ないとな。

「いつまでもウジウジ悩んでいる“ドーパント”を見てらんねえだけだ。当初の予定通り模擬戦で決着つけようか。あんな不安定なまま戦場に立たれても迷惑なだけだ。見極めてやる。」
「「「「「！？」」」」」

レイ以外の人間は俺の言葉に異常な程に反応する。
フォワードメンバーが何でそんな事を言うとでも言いたそうにこっちを睨みつけてくる。
どうして、仲間になろうとする自分達の邪魔をすると…。

「正宗さん！！なんでそんな言い方するんですか！！」

案の上スバルがキレて俺に抗議してきた…。
…ＯＫ。
これならいけるさ…多分な。

「事実だろ。制御できない力を持つメモリ所有者なんかドーパントと同じだ。そんな奴に自分の背中を預けられるのか？お前達は」
「っ！？」

拳を握りしめると俺に向かって今にも殴りかかりそうな程睨みつけてくる。
…恐いな。正直。
エリオにキャロにも信じられないという様な目であからさまに俺に対してがっかりした怒りの視線を送ってくる。
正直その視線がとても痛い。
ああ…もうなんでこんな汚れ役引き受けちまったんだか…。
不幸だ…。

「どうだ？バニット？俺に証明出来るか？自分がドーパントではなくブーストだって」
「…やってやりますよ」

逃げるかと言おうとしたらバニットに遮られた…。

「やりますよ…。証明とかどうでも良いけど。アンタに負けてて…アイツに勝てる訳ないんだ！！」

アイツ…ね。
多分オーガドーパントの事だろうが…。
お前は復讐の前にもう１つするべき事があるんだよ…。

いや…”俺達”がか。

「じゃあ、1時間後に訓練スペースで良いね？」
「ああ」
「はい」

レイがそう言うと俺達はそ答え、俺とレイはその場を後にする。
まるで、ヒーロショーでさっさと出て行けとでも言われる様な悪役が如くな…。
視線が痛い…

『なのは。この場は任せた』
『…正宗君。分かった。でも…終わったら皆に話すんだよ？』
『わーってるさ。俺だってこのまま悪役でいるのは嫌だからな…』

…さて、そうとなれば俺は俺でやるべき事があるな。
バニットだけじゃねえ…。
俺自身もいい加減…覚悟するべきなんだ。
なぁ…父さん。母さん。
いや…仮面ライダー。

7話　過去（後書き）

…文章が酷い。
時間が出来ない…。
おまけに次回に続く…。
本当にすいません…。

8話　仮面ライダー（前書き）

大分遅くなった…。
模擬戦のつもりが…その前に1話挟む事にすいません。
次回に持ち込みです。
今回短いです。

8話　仮面ライダー

六課　正宗・レイ自室。

俺達は、1時間後の訓練スペースでの模擬戦の前に自室に戻っていた。昨日ついたばかりだから荷物は殆どない。
今度、自分達のアパートから送ってもらう様頼まないとな…。
そんな訳なんだが…それでも俺達は常に後生大事に持っているモノがいくつかある。
その内の1つを俺達は見つめていた。
そして俺は覚悟を決めた様にゆっくりとその左手を帽子へと手を伸ばす。

「いいのかい？それを被ると言う事は…」
「…わーってるよ。もう後戻りは出来ないってんだろ？」

何もないデスクの上に置かれている白い帽子。
つばの部分が何かに削られた様に刻まれているが…その傷も全てあの時の…始まりの夜の出来事が原因だ。
そして…それを被るべき本来の人間はもう…この世にはいない。

「…くっ」

軽く胸がざわめく。
この帽子を見つめているといつもその様な感覚に囚われる。

（「父さん」）

頭を横切るのは最後に見せた帽子の持ち主だった俺達の父親の笑

顔だった。
今でも十分に印象に残っている…。
ハードボイルド。
語源としては白身と黄身二つがしっかりと凝固するまで煮られたゆで卵の事らしい。
そこから感傷や恐怖といった感情に流されない常に冷静である強靭な精神と自身の決めた事を最後までこなせるだけの強靭な肉体を併せ持つ男の中の男を指す言葉に繋がったらしい。
父さんは正にそのハードボイルドという言葉がピッタリの人間だった。
ガイアメモリと呼ばれる当時では得体のしれないモノを武器とし、人々の笑顔を守り続けた。
正直凄過ぎる…。
俺には無理だ…。
恐すぎる…。
今でこそメモリの力は少しづつ解明されその結果ドライバと呼ばれるメモリを制御するデバイスが完成しているが、当時はそんなモノはなく直接その肉体にメモリを打ち込んで使っていたのだ。
いつ…自分がドーパントになるか分からない…。
そんな恐怖を抱えながらあの人は俺達兄弟や家族だけでなく、皆の笑顔を守る為に戦っていたんだ。
正にハードボイルド。
そんな父さんはガキの頃から俺の憧れで…目標で…そして…ヒーローだった。
いつかは父さんの様になりたい。そう思いガキの頃から目を盗んでは父さんの帽子を被っていた。
その度に父さんは静かに
「帽子を被るのは一人前の男にのみ許される」

そう言い、俺には被らせてくれなかった。無論レイにも。
その意味が当時の俺には分からなかったが…その意味を知ったのは皮肉にもその憧れの人の最期の瞬間だった。

とびっきりの笑顔で俺達に微笑みかけると父さんは震える手で俺の頭にこの帽子を被せた。
だが…その瞬間俺は見逃さなかった。
父さんの瞳に一筋の涙が流れているのを…。
その瞬間俺は自身の馬鹿さに呆れた。
どんな人間だって自分の命の死を恐れない人間なんていない。
得体のしれない力に体を蝕まれている事に恐怖を感じない人間なんていない。
つまりが…そういうことだったんだと…帽子は感情を隠す為のモノだったんだ。
そう俺は気付いた。
ハードボイルド。
その言葉は、恐怖を恐れない人間を指すんじゃない…。
その恐怖と向かい合い、戦い続ける人間にのみ与えられる言葉だと。
だからだ…自然と周囲の人間が…父さんをヒーローをこう呼んだ。
仮面ライダー…と。
言い得て妙だ。仮面で素顔を隠し、戦う戦士。
ハードボイルドに当てはまると思わないか？
だから俺達は今まで仮面ライダーの名を名乗らなかった。
いや…名乗れなかった。
それだけの人間だと自分自身で俺達は思えなかったからだ。
俺達は罪を犯している…。
罪人だ。
俺達が、正義の使者の名を名乗るなど父さんの名を傷つけている様にしか思えなかったからだ。

だが…それでも…父さんは最後に俺達に微笑みながら逝った。
その笑みの意味がなんなのか俺には分からない。ガキだった俺達を安心させる為の笑顔だったのか。それとも…俺達がいるから後は大丈夫だと安心してくれた笑顔だったのか。
死んだ人間の事はもう分からない。
だからこそ今日まで俺達は死にモノ狂いで執務官として働いてきた。
生前父が就いていた役職で同じ様に働けば答えが見つかると思ったからだ。
だが…そんな事は関係なかった。
俺達がやるべき事は1つだった。
俺達はいい加減向き合わなければならないんだろう。自分自身と。その罪と。
今回のバニットを見ているとそう思った。
だからこそ分かる。バニットを救えるのは仮面ライダーだけだ。
罪は…無くならない。
でも背負う事は出来る。向き合う事は出来る。
俺達の罪。
家族を…壊したという罪。
それと俺達は向きあう…。
他人(バニット)を変えるんだ。俺達Wも変わらなきゃ始まらない。

「……正直僕自身はまだ僕自身を許せそうにない」
「……」
「事実…僕の本来のメモリ“ファング”はその姿を僕の前から消した。僕は君達と違って自身の罪を背負う事も向き合う事も出来ない…」
「…形に囚われるんじゃない。自身と向き合え。無理言ってんのは分かるけどな。黒の力。これはメモリに対して重ねて記憶された使用者の負の記憶…。違うか？」

「…！？気付いたのかい」
「まぁ…お前の態度を見てりゃな。それに…バニットの心の闇と俺との共通点っていえばそれだろ？メモリに自身の罪が記憶されるんじゃ、背負うことも、その結果も、力という形で現れるから安心できるかもしれない。でもよ…そんなモノ（メモリ）があってもなくても向き合う事は出来るんじゃねえか？人は。手伝いって訳じゃねえが…」

そう言うと俺は自然と伸ばしかけていた左手を伸ばすとそのまま帽子をレイの頭へと被せる。

「…！？」
「今は俺がお前の帽子に仮面になってやる。二人で一人だ。俺達は」

二人で一人。
Wに成る時。レイの精神は俺の体に宿って1つになる。
つまりが俺の体を使って戦う訳だ。
…誤魔化しかもしれない。
詭弁だとも思う。だが…。

「……ふざけるな。僕は君に守ってもらう側の人間じゃない」
「！？」

なんだこいつ！？
俺が折角！！

「…僕達は対等だ。君に出来て僕に出来ない訳ないだろう。心配しなくてもファングだって何時か僕の下に戻ってくるさ」

そう言うとレイは帽子を深く被ると俺の横を通り過ぎそのまま俺

の頭へと帽子を被せると俺の背中越しに立ちどまった。

「なんだよ。人が折角」

「感情面で人を心配するなんて百年早いよ。正宗。帽子(それ)は君が被っていたまえ。人前でみっともない感情を隠すのに役に立つだろう」

「テメっ…!?レイ!!」

［サイクロン］

俺がレイの方へ振り向こうとした瞬間狙った様にレイは背中越しでサイクロンメモリを覚醒させる。

「レイ?」

「早くしたまえ。決意したのなら即行動。君が良く言っている言葉だろう」

こいつ…。

照れてんのか?

心の中で久しぶりに見たこいつの可愛い所を苦笑すると俺もジョーカーメモリを取り出しダブルドライバーを腹部に装置する。

「…わーったよ」

［ジョーカー］

メモリを覚醒させる。

そして、そのまま背中越しに俺達はメモリをスロットに挿入する。

今までとは違う。只のWじゃない。

「「変身!!」」

≪≪サイクロン！ジョーカー！≫≫

軽い風が巻き起こるとそのまま俺の体を左右非対称の異形に変える。

いや…あえていうぜ。

俺達の体を仮面を纏った戦士へと変える。

「「…仮面ライダーW」」

レイの体が、背後で倒れる音を聞くとそのまま自然と俺達はそう呟いた。

さぁ…覚悟は決まった。

まだ、俺達は1人では半人前だがそれでも2人でなら…！！

そうさ…今日から俺達は2人で1人の仮面ライダーW！！

『それはともかく…部屋を掃除しないとね』

「げっ…」

変身した際に起こした風が部屋においてあった荷物を撒き散らしていた。

…締まらねえな。オイ！！模擬戦前に部屋の掃除かよ！！

8話　仮面ライダー（後書き）

少しだけビギンズナイトの事が出ました…。
親父の名前は光です。
正宗達の言う罪と光の死はまた別です。
それを書くのはまだまだ先になりそうです。
あ～ファングが出るのも大分遅くなりそうです…。
更新遅くてすいません！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7050i/

魔法少女リリカルなのはW

2010年10月11日17時55分発行